

平安通志

三

110
60

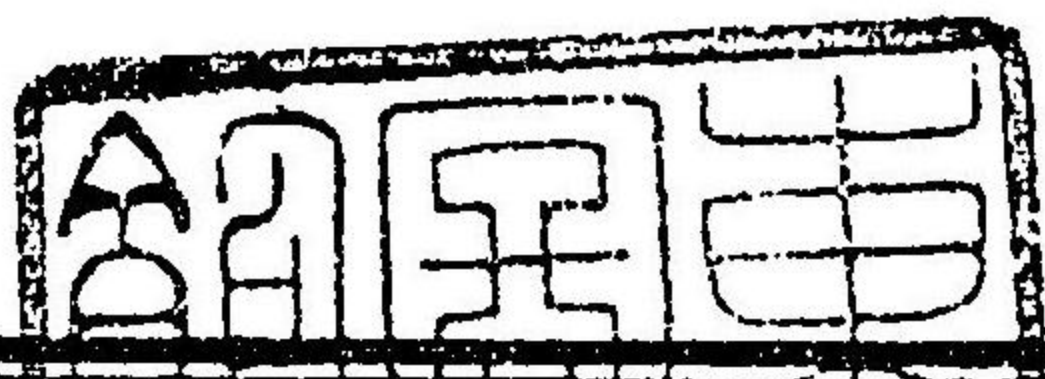
館書圖京東					
二	久		二		
0	0		0		
冊	號	架	函	類	門

平安通志卷之六

第一編

大内裏

朝堂院



朝堂院ハ大極殿ノ在ル所ニシテ、國家ノ正朝ナリ、又八省院ト稱ス、其地ハ中御門小路ヨリ、冷泉小路ニ至リ、南北一百三十六丈、朱雀大路ヲ中央ニシ、東西五十六丈、凡二萬三千六百一十一步餘、朱雀門ノ内五十丈ニ起リ、皇宮ノ迤西ニ至ル、繞ラスニ複廊ヲ以テス、其南面ノ大門ヲ應天門ト號ス、左右二重複廊アリ、相抱テ南ニ出ル、十三丈、廊端栖鳳翔鸞ノ二樓アリ、東西相對ス、應天門ノ内、東西朝集堂アリ、應天門ヨリ北ニ入ル、二十五丈、會昌門アリ、宣政門ハ其東ニ在リ、章善門ハ其西ニ在リ、昭慶門ハ其北ニ在リ、大極殿其北位ニ據リ、南面ス、殿ノ南、延石壇、東西ニ横亘シ、左右階アリ、之ヲ龍尾壇ト曰フ、蒼龍樓ハ大極殿ノ巽位ニ在リ、白虎樓ハ大極殿ノ坤位ニ在リ、龍尾道ノ南、延十二堂相並ヘリ、昌福含章承光明禮ノ四堂ハ其東ニ在リ、西面北上ス、延休含嘉顯章延祿ノ四堂ハ其西ニ在リ、東面北上ス、暉章康樂修式永寧ノ四堂ハ、會昌門ノ内ニ在リ、左右相并ヒ、小安殿ハ、大極殿ノ

湯本文彦等編

背ニ在リ、北昭慶門ト相對セリ、皆瓦屋飛棟、朱漆ヲ以テ其材ヲ塗ル、是レ朝堂院ノ大形ナリ、

大極殿

朝堂院ノ正殿ニテ、國儀大禮ノ行ハル、所ナリ、或ハ最大殿ト稱シ、又大殿ト曰フ、蓋シ略稱ノミ、大極殿トハ、其名易ヨリ出テ、易深辭ニ屬有ニ大極、是生兩儀トアルニ取リシモノナリ大極殿ノ國史ニ見エタルハ、皇極帝ノ時ヲ初メトス、此後天武帝九年二月二十五日、天皇皇后ト大極殿ニ御ス云々、同十一年正月七日、親王以下羣臣ヲ大極殿ニ宴シ、朱鳥元年正月二日、天皇大極殿ニ御シ朝ヲ受ク云々、文武帝ノ二年正月朔、同大寶元年正月朔、天皇大極殿ニ御シ朝賀ヲ受ク、元明元正、二帝ハ大極殿ニテ即位アリ、聖武帝天平十四年正月朔日、恭仁新京ニテ大極殿未タ成ラサルヲ以テ、權ニ四阿殿ヲ造リ、朝賀ヲ受ク、十五年ニハ平城ノ大極殿ヲ恭仁宮ニ移サル、等ノ事、國史書ヲ絶タス、爾來登極ノ禮、國家ノ大儀ハ、必ス此ニテ行ハル、事ト定マレリ、桓武帝長岡京ニ於テモ、已ニ大極殿ヲ造管アリシカ、平安京建奠ニ及ヒ、最モ叡念ヲ此ニ留メ、之ヲ建築シテ以テ國ノ面目ト定メラル、其規模宏大、結構華麗、實ニ王者ノ正朝ニシテ、其廟造ノ屋、瑠璃ノ瓦、金鏤朱楹、鞏飛ノ觀、輪奐ノ美、亦以テ

延曆ノ宏圖ヲ昭耀スルニ足レリ、

占地

朝堂院ノ北位ニ在リ、南面ス、北ハ昭慶門ヲ去ルコト十一丈ニ起リ、南ハ會昌門ヲ去ルコト八十七丈ニ至ル、占地南北七丈四尺、東西十九丈八尺ナリ、之ヲ現今步數ニスレハ、四百六步、八九トナル、

基

高六尺、版石條石ヲ以テ築成ス、地面整スルニ方磚ヲ以テス、南正面石階ヲ設ク九級、級毎ニ六寸、其左右階ヲ設ル、南階ノ如シ、之ヲ東階西階ト稱ス、北面ノ階ハ、東西ノ階ト相當レリ、廊及ヒ階ニ接スル外、皆朱欄ヲ設ク、

殿

南北四間、五楹、楹間各一丈三尺、合五丈五尺、東西十一間、十二楹、楹間各一丈六尺、合十七丈六尺、内部楹ヲ建ル一重、其中央ヲ宸座トス、總テ五十二楹、前面戸ナシ、其東西及ヒ北面ノ廊、及ヒ階ニ接スル所戸アリ、丹腹粉壁、其構造ノ詳細、今考フル所ナシ、

屋制

廟造四注

今案ニ大極殿屋制ハ廟造四注トス、左經記ニ長元元年七月十五日、外記賴隆ノ勘文ヲ記シテ曰ク、大極殿體非寢非堂、所謂廟作也ト、廟作トハ所謂四方屋根ノ葺下シナル制ヲ謂フナリ、裏松固禪曰ク、廟作トハ殿屋四注ナリト、是說蓋シ之ヲ得タリ、長元元年ハ後一條帝ノ御宇ニシテ、當時ノ大極殿ハ第二回元慶再造ノ建物ナレハ、延曆ノ舊制タルヲ知ルヘシ、東西榮兩下ノ屋制ハ蓋シ延久第三回造管ノ變更ニ係レルモノナルヘシ、

屋瓦

葺クニ碧料瓦ヲ用フ、
今案ニ大極殿ノ碧瓦ヲ用ヰルハ、全ク唐制ニ據リシモノニシテ、此外ハ之ヲ用ヰルヲ得ス、古本拾芥抄ニ所謂葺クニ鴛鴦瓦ヲ以テストハ是レナリ、檐瓦唐草華樣ヲ刻シ、又大極殿ノ三字ヲ陽起スルモノアリ、

鵝尾

屋脊東西鵝尾ヲ置ク、

鵝尾ハ、久都賀太ト謂フ、蓋シ其形靴ヲ立ツルカ如シ、依テ靴形ト稱スルナルヘシ、初メ瓦製ヲ用ヰ、後木製トナリ、保元修理ノ時、包ムニ金銅ヲ以テセリ、鵝尾ノ事ハ、蓋シ漢代ニ始マル、淵鑑類函居處部ニ、(鵝吻)虬尾墨客揮犀曰、今自有唐以來、寺觀舊殿宇尙有爲飛魚形尾指上者、不知何時易名爲鵝吻、然狀亦不類魚尾、唐會要曰、漢栢梁殿災、或曰、海中有虬尾似鵝、激浪卽降雨、當作此像於殿堂上、以厭火魚形、墨客揮犀曰、漢以宮室多災、術者言、天上有魚尾星、爲其形冠於室、以禳之トアリ、蓋シ鵝尾ハ、鵝吻虬尾ノコトナルヘシ、

高御座

殿ノ中央ニ方形ノ御臺ヲ安シ、欄ヲ設ク、北東西ニ階アリ、臺上八方形ノ御帳アリ、其上御輿式ノ屋ヲ施シ、屋頭ニ金鳳ヲ立テ、又方毎ニ一金鳳ヲ立ツ、裝飾スルニ明鏡、美玉、錦幡、綾幔等ヲ以テシ、内ニ御茵ヲ重敷ス、其儀ハ貞觀儀式、延喜式等ニ詳ナリ、

額

木製、文ハ大極殿ノ三字ナリ、
此他裝飾ノ品多ケントモ、各其書ニ詳ナルヲ以テ之ヲ略ス、

小安殿

大極殿ノ北、昭慶門ノ内ニ在リ、占地南北二丈六尺、東西十四丈四尺、基ノ築成ハ大極殿ニ同シ、以下皆之ニ推ス北面石階ヲ設ク、三所各三級、殿南北二間、三楹、二丈、東西九間、十楹、十四丈四尺、瓦屋、屋脊、鸚尾ヲ置ク、南面中央廊アリ、大極殿ニ接シ、其東西ニ石階アリ、大極殿ノ北階ト相當ル、大極殿臨御ノ時ノ便殿ナリ、

案ニ日本書紀天武紀ニ、九年春正月七日、天皇向小殿ニ御シ、親王諸王ヲ内安殿ニ、諸臣ヲ外安殿ニ會ストアリ、又朱鳥元年正月癸卯、大極殿ニ御シ、同丁巳、大安殿ニ御シ、同二月甲戌、又大安殿ニ御ス云々、續日本紀文武紀ニ、大寶元年正月朔、大極殿ニ御シ、二年正月己卯、大安殿ヲ鎮ス、同聖武紀ニ、神龜二年十一月乙丑、大安殿ニ御シ、孝謙紀ニ、天平勝寶二年正月朔、大安殿ニ御シ、三年正月庚子、大極殿ニ御ストアリ、則チ飛鳥藤原、平城ノ宮、皆大極、大安ノ兩殿、又外安殿、内安殿、等アリシナリ、因テ考フルニ、大極殿ハ正朝ニシテ、大安殿ハ内朝ナルヘク、小安殿ハ大安殿ニ屬スル便殿ナリシ者ノ如シ、平安京ニ及ヒ、紫宸殿ヲ内朝トシ、小安殿ハ大極殿ノ便殿トナリシモノト察セラル、大極殿ニおほやす

みとのノ稱アルハ、蓋シ大安殿ト混シタル者ニ非ラサルカ、猶考フハ

蒼龍樓

白虎樓

蒼龍樓ハ、大極殿ノ巽位ニ在リ、白虎樓ハ其坤位ニアリ、基廣方四丈六尺、築製小安殿ニ同シ、階ナシ、樓方二間、二丈、八楹ヲ以テ成ル、瓦屋、檐瓦其樓名ヲ記ス、上青瑣、下粉壁、西南ニ戸アリ、屋上中央ニ閣アリ、又四小閣アリ、其四隅ニ相依ル、屋各東西榮四注、屋脊ニ鸚尾アリ、閣各青瑣欄檻戸アリ、白虎樓之ト同シ、

大極殿南廷

北大極殿南階ヨリ、南ハ龍尾道ニ至リ、東ハ蒼龍樓、西ハ白虎樓ノ間ヲ稱ス、即位正賀等大禮ノ行ハル、所ナリ、事ハ禮樂志ニ詳ナリ、

龍尾道

又龍尾壇ト稱ス、大極殿基ヲ南ニ去ル十七丈、蒼龍樓ノ基ヲ去ル二丈、南北ニ横亘ス、板石條石ヲ以テ築成シ、中央二十丈ノ間、朱欄ヲ設ケ、其東西石階各八丈、階ヲ設クル三級、二樓ニ當リ、又朱欄ヲ設クル各四丈

東西步廊ニ接シ、又石階アリ、各四丈、

案ニ、延曆十八年正月、假殿ヲ構造シ、葺クニ彩帛ヲ以テス、臨御シテ羣臣及蕃客ニ宴ヲ賜ヒ、承和十二年正月、尾張濱主カ和風長壽樂ヲ舞ヒ、又其荒廢ノ後、後圓融帝ノ即位ノ時、臨御アリシハ、皆此所ナリ、龍尾道ハ、唐ノ含元殿ノ制ニ效ヒシモノニテ、淵鑑類函居處部ニ、泊宅編、唐含元殿前龍尾道、凡詰曲七轉、由丹鳳門北望、龍尾下垂於地トアルニヨル、其形狀ハ異ナレト、正朝前ノ道ナルヲ以テ、此名ヲ用ヰシナルヘシ、龍尾道南廷

龍尾道ノ南、會昌門ノ北、十二堂ノ間ヲ稱ス、大禮宣詔ノ時、十二堂ヨリ親王百官臚進シ、各其位ニ就キ、式ヲ行フ所ナリ、此時衛府ハ仗ヲ龍尾道ノ階下ニ立ツ事ハ、禮樂志ニ詳カナリ、

十二堂

昌福堂

龍尾道ノ南九丈二尺、東廊ノ西四丈二尺ニ在リ、基東西二丈六尺、南北七丈六尺、條石板石ヲ以テ築成シ、東西階ヲ設ク、各三所、階毎ニ三級、堂東西二間三楹二丈、南北七間八楹七丈、瓦屋南北榮、屋脊鴟尾アリ、楹

含章堂

間其額ヲ掲ク、以下皆同シ、之ヲ略ス、大禮ノ時、太政大臣、左右大臣ノ座ナリ、昌福堂ノ南四丈二尺ニ在リ、其制昌福堂ニ同シ、但シ南北廣九丈、大禮ノ時、大納言、中納言、參議ノ座ナリ、

承光堂

含章堂ノ南四丈二尺ニ在リ、其制含章堂ニ同シ、大禮ノ時、中務省、圖書寮、陰陽寮ノ座ナリ、

明禮堂

承光堂ノ南四丈二尺ニ在リ、南會昌門ノ廊ヲ去ルコト四丈トス、其制承光堂ニ同シ、但シ南北廣十五丈、大禮ノ時、治部省、雅樂寮、立蕃寮、諸陵寮ノ座ナリ、

延休堂

龍尾道ノ南九丈二尺、西廊ノ東四丈二尺ニ在リ、昌福堂ト相當ル、其制昌福堂ニ同シ、大禮ノ時、親王皇族ノ座ナリ、

含嘉堂

延休堂ノ南四丈二尺ニ在リ、含章堂ト相當ル、其制含章堂ト相同シ、大

禮ノ時彈正臺ノ座ナリ、

顯章堂

含章堂ノ南四丈二尺ニ在リ、承光堂ト相當ル、大禮ノ時刑部省判事ノ座ナリ、

延祿堂

顯章堂ノ南四丈二尺ニ在リ、明禮堂ト相當ル、其制明禮堂ニ同シ、大禮ノ時、大藏省、宮内省、正親司ノ座ナリ、以上四堂北上東面ス、

暉章堂

康樂堂

明禮堂ノ東ニ在リ、北面相次ク、其制含章堂ニ同シ、大禮ノ時、暉章堂ハ少納言左右辨、康樂堂ハ民部省主計寮主稅寮ノ座ナリ、

修式堂

永寧堂

其制暉章堂ト相同シ、延祿堂ノ東ニ在リ、北面相次ク、大禮ノ時、修式堂ハ式部省兵部省、永寧堂ハ大學寮ノ座ナリ、

東朝集堂

會昌門ノ南六丈二尺、東廊ノ西四丈二尺ニ在リ、其制含嘉堂ニ同シ、大禮ノ日、百官待朝ノ所ナリ、

西朝集堂

製作東朝集堂ニ同シ、三十八丈八尺ヲ隔テ、東朝集堂ト相對ス、

應天門

朱雀門ノ内五十丈ニ在リ、朱雀大路ノ中正ニ當リ、朱雀門ニ通シ、遙ニ羅城門ト相望ム、基南北四丈三尺、東西十丈六尺、築成諸堂ニ同シ、南北石階六丈、階毎ニ三級、門廣サ南北三丈、東西六楹十丈、楹數十五本ヲ以テ成ル、二重閣制、五間戸三間、瓦屋鴉尾、東西榮四注、閣上青瑣粉壁、曲欄飛棟、中間ニ額ヲ掲ク、其東西ハ二重歩廊ニ接ス、

二重歩廊

應天門ヨリ東西各十丈ニシテ南折シ、又各八丈、基築成諸廊ニ同シ、廊瓦屋兩下、廣二丈、中間白壁青瑣、其兩偏ヲ步道トス、閣上青瑣白壁、椽アリ戸アリ、欄檻ヲ施ス、

栖鳳樓

應天門ノ東二重廊南出ノ端ニ在リ、基南北七丈六尺、東西五丈六尺、相

堂ル、樓方二間二丈ナルモノ、迤ニ相屬シ、屋勢相錯ハル、瓦屋鴟尾、青瑣
白壁、閣上其額ヲ掲ク、

翔鸞樓

應天門ノ西二重廊南出ノ端ニ在リ、其製栖鳳樓ニ同シ、

會昌門

應天門ノ内二十五丈七尺ニ在リ、基南北三丈六尺東西九丈六尺、門五
間戸三間、南北三丈、東西九丈、其製朱雀門ニ同シ、閣上中間其額ヲ掲ク、
此ヲ南内門ト稱シ、之ヨリ内ヲ禁内トス、闌入スル者ハ刑アリ、

昭慶門

朝堂院北面ノ正門ナリ、車駕臨幸此門ヨリ入り、小安殿ニ御ス、瓦屋鴟
尾、五間戸三間、南北三丈、東西九丈、

宣政門

東西ノ正門ナリ、屋制瓦屋鴟尾、東西二丈四尺、南北七丈五間、戸三間、楹
間其額ヲ掲ク、

章善門

西面ノ正門ナリ、其製宣政門ニ同シ、

步廊

基廣二丈六尺、條石板石ヲ以テ築成ス、瓦屋兩下中楹、青瑣粉壁、處々掖
門ヲ開キ、石階ヲ設ク、

掖門

掖門ハ二殿四樓諸門ノ間ニ於テ、步廊ニ開ク所ノ小門ナリ、廣各一丈、

東福門

宣光門

昭訓門

大極殿ノ東ニ在リ、

西華門

壽成門

光範門

大極殿ノ西ニ在リ、

嘉喜門

永福門

昭慶門ノ東西ニ在リ、

通陽門

感化門

宣政門ノ南北ニ在リ、

含耀門

東朝集堂ノ良位ニ在リ、

章德門

會昌門ノ東ニ在リ、

長樂門

東朝集堂ノ南ニ在リ、

慶儀門

白虎樓ノ西ニ在リ、

顯親門

敬法門

章善門ノ南北ニ在リ、

興禮門

會昌門ノ西ニアリ、

章義門

西朝集堂ノ乾位ニ在リ、

永嘉門

西朝集堂ノ南ニアリ、
日本紀、日本後紀、續日本後紀、三代實錄、日本紀略、式拾芥抄、京古圖數種、伴大納言繪卷、年中行事繪卷、今昔物語、平治物語、清原類聚、大永即位記、天正本太平記、和名抄、大内裏圖考、大内裏諸門圖、大内裏實地實測ニ據ル、

大極殿ノ國史ニ見エシハ、皇極帝四年ヲ初メトス、其記事ニ依テ之ヲ察スルニ、此時已ニ唐制ノ大極殿建營アリテ、正朝トナリシヲ知ルヘシ、其後歷代ノ帝都ニハ、必ス此殿アリテ、大禮ノ行ハレシコト、史書ヲ絶タス、平安京ニ及テハ、桓武帝特ニ淑念ヲ盡シ、之ヲ建營シ、莊宏華麗、國家ノ正朝トナシ、其十五年正月朔、天皇大極殿ノ高御座ニ御シ、正賀ヲ受ケラレシヨリ、國儀大禮ハ、必ス此ニ行ハル、コト、ナレリ、是ヨリ此殿荒廢ニ至ルマテ、世ハ三十代、年ハ三百二十餘年ヲ經タレト、陽成帝、大極殿燒失、再造、後三條帝、上冷泉帝、御シカタク爲メナリ、ハ豐樂院、又ハ紫宸殿、又ハ太政官廳ニ於テ即位アリシカ、其他ハ皆大極殿ニ於テ行ハレタリ、治承災後、更ニ造營ノ事アレトモ、王室衰微、軍國多事、其功卒ニ成ラス、

此ヨリ永ク荒廢ニ屬シタレト、即位ノ式ニハ、其地ニ行幸アルコトハ、猶行ハレ
シコトト見エ、永和元年後圓融帝即位ノ記ニ曰ク、大極殿のあと龍尾道の前に
て腰輿にめしうつらせ給ふ、今はいつくとも見ぬす、草のはらにてあれとも、尙
むかし跡を尋ねて、めしうつらせ給ふなりト、以テ登極ノ式ハ、大極殿ニ於テ
行フヘキ制規ニテ、國家ノ大禮トナリ、此喪亂ノ際ニ於テモ、猶其遺式ニ依リシ
ヲ見ルヘシ、貞觀八年閏三月十日夜、大納言伴善男等竊ニ火ヲ行テ、應天門ヲ燒
ク、已ニシテ事覺ハレ、皆流竄セラル、是レ造營以來ノ災ナリ、此時柏原陵ノ告文
ニ曰ク、去閏三月十日夕、應天門并左右樓等有失火事、忽然燒盡、此宮掛
畏、天皇朝廷乃勞作、太耳賜天萬代宮止、定賜處、奈就中八省院、殊留御
意、天國乃面止作狀賜、奈毛聞賜而不慮之外、爾有此災事、因茲天災人火、毛止不知
志、晝夜無間、憂念耻畏、利末賜云々トアリテ、六月三日ニハ、木工寮ノ官吏ヲ近
江丹波二國ニ遣ハシ、應天門ノ材ヲ取ラシメ、同十年二月十三日、應天門ノ造營
ヲ始ルヲ以テ、會昌門外ニ於テ大祓式ヲ行ヒ、然後其工事ヲ始メタリ、同十三年
十月、再造功成ル、勅シテ明經文章博士ヲシテ、應天門名ヲ改ムヘキヤ否ヤヲ勘
セシム、大學頭文章博士巨勢文雄、大學博士菅野佐世等、其議ヲ上ル、曰ク、今此應
天門既是人火、仍舊謂之何必更改ト、依テ其名ヲ改メス、同月廿九日、落成ノ式行

ハル、其ノ記事ニ曰ク、應天門成、所司設饗饗、大工已下、公卿大夫莫不畢會トアリ、
同十八年四月十日夜半、大極殿災アリ、同書ニ曰ク、是夜子刻時、大極殿災、延燒小
安殿、蒼龍白虎兩樓、延休堂、及北門、北東西三面廊百餘間、火數日不滅云々、詔召明
經紀傳博士等使議其事、又勅遣木工權大允惟良、安宗、大工日置繩主等、向紀伊國
占探大極殿材木山云々、又遣使告伊勢神宮及松尾賀茂兩社、五月八日遣使柏原
山陵、告以火災、曰、去月十日、中此宮、掛恐、天皇朝廷乃營作、其之賜、天萬代、爾
傳賜、官利、奈就、中爾、大極殿殊、爾御意、留賜、天妙、仁麗、久造、飾賜、天國、乃而、止之、百
官萬民、乃仰、久所、止定、賜留、倍殿、利奈、而不、意之外、爾此災、在天、一旦爾、燒盡、利太、近日之間、
此、手憂、念耻、歎賜、天夜、毛晝、毛無、間畏、利賜、止限、量毛、無之、云々トアリ、此等ノ告
文ヲ見テモ、桓武帝ノ此殿造營アリシ、勅旨ト、此殿ノ宏壯華麗ナリシト、朝廷ノ
最此殿ヲ重シ、火災ニ遇テ、恐竦憂懼セシコトト見ルヘシ、此時王政正ニ隆
盛ナリ、勅シテ速ニ之ヲ營セラル、此冬清和帝位ヲ讓リ、皇太子立ツ、之ヲ陽成帝
トス、右大臣藤原基經ニ詔シテ、萬機ヲ攝行セシメラル、實錄元慶元年四月八日、
使ヲ遣ハシ、柏原山陵ニ告ク、曰ク、去年四月十日、爾所、燒失、乃八省院、乃大極殿、非
東西樓廊等、以今月九日吉日、天所、始造、之此院、最是、掛畏、天皇朝廷、殊勞
作賜、留所、利奈、故是以、更可、始作、狀手、爲令、申爾、差使、具官、某奉、書爾、掛畏、御陵、相

助相矜賜天無事久無障令作竟賜借云々トアリ其翌九日辰刻始構造大極殿云々内藏頭和氣彙範木工頭藤原維邦等行司職タリ親王公卿八省院ニ向ヒ木工京職員及ヒ飛驒工大小工等ニ饗ヲ行フ四位五位諸司百官畢集リ饗ヲ助クトアリ是ヨリ先キ伊勢太神宮石清水賀茂稻荷社等ニ奉幣アリテ其由ヲ告ケラル同三年十月ニ至リ造營落成シ慶賀ノ式行ハル日本書紀新日本紀文德實錄等ヲ參取ス本朝文粹ニ善相公ノ大極殿成命宴詩序菅家文章ニハ大極殿成畢王公會賀ノ詩アリ其盛ナル知ルヘシ其後朝綱縱弛官殿益敗頽シテ時々ノ修理モ行ハレヌ荒涼タル景況トナリシハ大鏡ニ記セシ道長兄弟ノ大極殿豐樂院仁壽殿ニ行キシ事又今昔物語ニアル西京人見應天門上光物物語ナドニテモ知ルヘキナリ其後一條帝ノ時ニハ大風ニテ朝集堂應天門會昌門ノ地回廊數十間後一條帝ノ時ニハ八省堂二字應天門及ヒ回廊顛倒ノ事アリ其時稍再造アリシモ僅ニ其修補ニ過キサルモノ如シ後冷泉帝康平元年二月廿六日内裏并中和院大極殿東西樓回廊朝集堂悉ク燒亡ス後冷泉帝ノ時皇居火災數回ニ及ヒシカ今回ハ内裏ヨリ大極殿ニ延燒シ遺ス所僅ニ應天門ト左方樓登シ極ノミ此時元慶造營ノ第二回ノ建築ナリシ大極殿ハ燒亡セリ當時奥州ニハ所謂前九年ノ亂アリ兵連ナリ禍結ヒ朝廷多事ノ際ナリシヲ以テ災後造營ノ事モナク空シク

十二年ヲ經タリシカ治曆四年四月後冷泉帝ハ高陽院ノ里内裏ニテ崩御アリ後三條帝皇太弟ヲ以テ閑院内裏ニ踐阼シ同七月廿一日太政官廳ニ於テ即位アリ帝ハ英邁ノ明主ニテ深ク朝廷ノ衰微ヲ慨シ興隆ノ勅志アリシカハ速ニ勅シテ正朝ノ造營ヲ命セラレ即位ノ翌月即八月二日大極殿造營事始メアリ百鍊抄日史官記ニ治曆四年八月二日大極殿造營事始也右大臣以下諸卿參入所司云々同八日被定造大殿由山陵使山陵依造大極殿故也同十四日大極殿木作始也早且於建禮門有大祓事同十月十日大極殿上棟也丹波守高房造之内大臣以下諸卿參入未刻上棟所司羞膳云々トアリ此ヨリ數年ヲ經テ落成シ後三條帝延久四年四月十五日落成ノ宴會アリ百鍊抄ニ四月十五日幸大極殿行宴會土木新成之故也但記云其儀如寬和大嘗會節會後節會於大極殿被行之トアリ此時王公文人ニ命シ慶賀ノ詩ヲ獻セシメ雅樂寮歌舞ヲ奏シ其儀甚盛ナリ是レ第三回ノ造營ナリ此時多少ノ變更アリテ屋制ヲ東西榮兩下四注トナシ鷄尾ヲ木制トシ應天門二重廊ノ東西ヨリ朝集堂ノ後ナル步廊ヲ瓦垣ト改メシハ此時ノ事ナルヘシ

此ヨリ白河鳥羽兩上皇ノ院政トナリ國力ヲ盡シテ六勝寺等ノ造營アリ佛寺ハ日ニ壯麗ヲ極ムト雖モ皇居ハ荒廢シ朝堂モ殘破ニ委シメリシカ保元ニ至

リ藤原通憲才學ヲ以テ後白河帝ノ信任ヲ得大ニ事ヲ用井舊儀ヲ興シ記錄所
ヲ復シ政紀ヲ振作シ又諸國ニ課シ大内朝堂院等ヲ修造セリ本朝無題時、日錄抄、平治物語、取
神皇正統記ニ小納言通憲法師といひしは名家儒門より出たり宏才博覽の人
なりきされと時にあはずして出家したりしに此御代にいみしく用ゐられて
内々には天下の事さなからばらひ申ける大内は白川の御代より久しく荒廢
して里内裏にのみましまししを謀をめぐらし國のついにいひなくつくり立
たはたる公事をも申おこなひずへて京中の道路などもはらひ清めむかしに
かへりたるすかたにそありしトアリ又平治物語ニモ其事ヲ記シテ曰ク大内
は久しくしゆさうせられさりしかは殿舎けいさしるうかくわうはいして
牛馬のまき牧雉菟のふし伏所となりたりしを一兩年の内造にそうひつして遷幸な
し奉る外廓屋てうくたる大極殿豐樂院屋しよく八省大かくれう朝所にいたるま
て花のたるき雲のかた形大かのかまへ成風の功年をへすして不日なりしかと
も民のわつらひなく國のついにいひなかりけるトアルハ此時ノ事ナリ保元元
年造管功成り同年十二月廿日二條帝此ニテ即位ノ式行ハレタリ明年平治元
年二月藤原信賴源義朝反シ大内ニ據ル平治ノ亂是レナリ此時帝潛ニ平清盛
六波羅第二幸シ清盛ニ勅シテ賊ヲ討セシメラル其時ノ勅ヲ平家物語ニ記シ

テ曰ク上新造の内裏なりし同くわい光るくあらは朝家の御大事たるへし官
軍いつはりて引しりそけはけうと定めてすみ出てむ然らば官軍を入かへ
て内裏を守護せさせ火災なきやうに思慮あるへしと仰下されければ清盛畏
りて朝敵たる上は逆徒の誅戮掌の内中にあり火災なからむ條難義の勅定
にて候へ去なから智略をめぐらし金關無爲なるやうにせいはい仕るへしと
奏しけるトアリテ平重盛ハ陽ハリ敗レテ賊ヲ六波羅ニ誘ヒ一戰之ヲ誅シ金
關全ク無事ナルヲ得タリ然レトモ延久造管ノ時ニハ全部落成ニハ至ラサリ
シカ又ハ其後荒廢セシ所アリシニヤ清原頼業ノ記ニ曰ク今度即保元大極殿
小安殿八省院諸門回廊等朱雀門皆以修造會昌門外左右瓦牆任舊跡即延久變
ナル被修築大極殿鴉尾新以金銅鑄作之大極殿八省院諸門朱雀門額前關白被
書云々但應天門并翔鸞栖鳳樓無修造東西朝集堂只有礎石遺憾耳トアリ此記
ニヨレハ應天門二樓等ハ荒頽ノマニテ修造ナク朝集堂ハ災後廢趾ニ委シ
タル者ト察セラル高倉帝治承元年四月廿八日夜京師大火アリ大内裏ヲ延燒
シ八省院全部其他多ク灰燼トナレリ此時未タ改元セサルヲ以テ世之ヲ安元
ノ大火ト云フ此夜亥刻樋口富小路人家ヨリ發ス時ニ東南ノ大風ニテ焰火飛
散一時ニ延蔓シ朝堂院ヲ始メ神社官民部省等ノ十餘所公卿第宅十四所其他

殿上人以下第宅ニ至テハ數萬戸一時皆灰燼トナレリ實ニ建都以來未曾有ノ
火災ナレハ史籍ノ當時ニ涉ルモノ此ノ災ヲ記載セサルハ無ク中ニ就キ其ノ
最モ詳ナルモノハ玉海顯廣王記方丈記吉記山槐記平家物語源平盛衰記等ニ
シテ顯廣王記ニ曰ク廿八日丁酉燒亡大極殿同書今夕燒亡火起於五條富小
路自亥及寅刻炎烟散餘炎遂及禁中大學寮勸學院大膳職拂地燒神祇官八神殿
柏殿御倉燒了朱雀門應天門會昌門等并八省院大極殿拂地了南樓廻廊併以燒
亡了式部省民部省主計主稅水主司眞言院諸卿家文書史長古家文書各皆悉
燒失了勸學院大織冠并冬御御儀五千卷見在公卿王臣家多以爲灰燼凡百卅餘
町之中所在民家及米家等皆悉燒亡了眞言院傳傳鑿門火殆可云天火歟凡王
代之法年中神事佛事皆以如況乎諸司納物哉下輕上上恐下只武盛顯官重
職併在武家國又然諸國大名不應國役諸莊下司不順領家洛中狼藉外國私勞
誰加制斷哉故有此天災歟此ノ記事ニヨレハ獨リ殿堂ノ燒亡ノミナラス巨
多ノ文書モ亦烏有ニ歸セシテ見ルヘキナリ此時朝廷已ニ衰フト雖モ大極殿
ハ國家ノ正朝之ヲ荒殘ニ委スヘカヲサルヲ以テ同八月廿三日造八省院ノ廷
議アリ陰陽寮其日時ヲ卜定シ造八省院ノ別當行事ノ職ヲ定メ十月八日ニ大
極殿事始アリ玉海ニ其事ヲ記シ甚詳ナリ今其大畧ヲ抄出センニ曰ク廿三日

此日於陣頭有造八省院定云々今日不被定國充云々天喜元年例歟云々康平元年
重而有豐樂院炎上事驚此事更有造大極殿遂不造畢崩御了後三條院御時大厦
成了代々造營定御前儀也何以希代也重事也云々如此事委不被尋立例歟陣頭
之定甚以不被甘心者也云々蓋シ造大極殿充國ハ大事ナルニ御前ニ於陰陽寮
擇申可被始造八省院行事所時日十月八日甲戌時已二點若未年月日陰陽寮
又擇申可被造八省院雜事日初八日十月十四日庚辰時午二點若申採伐木
日時同日庚辰時午二點若申造八省院所別當大納言藤原朝臣實定權中納言藤
原朝臣雅賴參議藤原朝臣長方造八省院所行事左中辨藤原朝臣重方右中辨藤
原朝臣經房左太史小槻宿禰隆職右大史中京成舉云々同廿四日ノ記事ニハ昨
日左大臣別當以下八條殿ニ參着シ其式アリシ事ヲ記シ其末ニ今日雖不被定
國充豫風聞大極殿邦綱卿小安殿光隆卿但シ此會昌門資賢卿如此云々於同廊
者可被充諸國云々トアリテ十月八日ニ八日甲戌天晴此日大極殿事始也トア
リ是ヨリ先キ八月五日改元アリテ安元三年ヲ改メ治承元年トナス此時年號勸文
治承元年正月廿日上略予置劬於右尻下見文作法如恒左大將宗叙正二位官符造八省充
國官符數十通也トアリ此ニ因テ考フル時ハ造八省院ノ事ハ朝議決定其造營

ノ國充モ定マリ、官符ヲ成シ下サレシ也、世ニ傳フル所南都二條法眼所傳圖ハ、蓋シ此時ノモノナルヘシ、其圖中ニ題シテ曰ク、簡要類聚抄第一云、大内裏之繪者五條大納言國朝爲備未來之龜鑑被圖置也云々ト記セリ、且ツ其上ニ諸國ノ國充ヲ記セリ、蓋シ此時造營ノ國充ヲ記シタル者ナルヘシ、事ハ皇居記事ノ沿革ニ詳ナリ、八省院造營ノ事ハ、已ニ事始アリテ、國充モ定マリシモ、未タ幾年ナラス、福原ノ遷都アリ、源平ノ戰爭、西海ノ遷幸、軍國多事、其造營ニ及ハサリシナリ、玉藥ニ建曆三年十二月十一日ノ記ニ曰ク、宰相中將實氏來談曰、明年可有造八省院之由、一日有沙汰伊豫播磨讃岐周防押合可候之由議定、然間忠綱申行一身可造之由、仍被仰了、有不堪之氣之時、可被副紀國云々、希代事歟、生見大極殿、今生云々、延久有能成宴、今又有此宴者、政道了、只有此事耳トアリ、建曆二年ハ、治承元年ヨリ三十六年ノ後ナレハ、當時起工アリシモ、幾年ナラス、軍國多事、其功ヲ果サス、已ニ數十年後ニ在テモ、猶此計畫アリシヲ知ルヘシ、忠綱ハ當時播磨守ナリ、任國ヲ給ヒテ、一身ヲ以テ造進スヘキ由申行ヒシモ、其事ノ大ナルヲ以テ、若シ力ニ堪ヘサル時ハ、更ニ紀國ヲモ充ツヘキ事ト定マリシモノ、如シ希代事歟、生見大極殿云々トアルヲ見テモ、當時朝臣ノ心ヲ想フヘキナリ、然レトモ、此時後鳥羽上皇北條氏討滅ノ謀アリ、未タ幾ナラス承久ノ亂起リ、朝廷益衰微

セシカハ、其實行ニハ至ラサリシモノナルヘシ、建武中興ノ勢ニ乘シ、俄ニ大内裏造營ノ議アリ、太平記ニ、翌年建武元年正月十二日大内裏造ヲルヘシトテ、安藝周防ヲ寄セラレ、日本ノ地頭公家人ノ所領ノ得分二十分一ヲ懸召サル、中興大内裏天災ヲ消スルニ便ナク、回祿度々ニ及ヒ、今ハ昔ノ礎ノミ殘レリ、中興〇此間裏天災災ノ事去程ニ治曆四年八月十四日、内裏造營ノ事始マリ、後三條院ノ御宇、延久四年四月十五日遷幸アリ、文人詩ヲ獻シ、伶倫樂ヲ奏ス、幾程モナク、安元二年建武三、大内ノ諸寮一字モ殘ラス、燒シ後ハ、國ノ力衰ヘテ、造營ノ御沙汰モナカリケルニ、今兵革ノ後、世未タ安カラス、國費エ民苦テ、馬ヲ華山ノ陽ニ歸サス、牛ヲ桃林ノ野ニ放タス、大内裏作ヲルヘシトテ、昔ヨリ今ニ至ルマテ、我朝ニハ未タ用井サル紙錢ヲ作り、諸國ノ地取御家人ノ所領ニ課役ヲ懸ケラル、云々トアリ、然レトモ、其年冬、尊氏反シテ、關ヲ犯シ、明年正月ハ、細川定禪京師ニ亂入シ、皇居ヲ始メ、燒拂ヒシカ、大内造營ノ事ハ、未タ着手ニモ至ラサリシナルヘシ、此ヨリ南北戰爭、京都ハ必争ノ地トナリ、正平十年、北朝文和四年、足利直冬南朝ニ降リ、京都ヲ攻メシ時ニハ、太平記ニ、正月十六日、直冬大將トシテ、足利高經桃井直常三千餘騎ニテ入洛アリシカハ、大内ノ舊跡、大極殿ノ額門ノ跡ニ、敷皮布テ坐シ給フト記セリ、此時敵ハ山崎南備山ニアリ、直冬、高經、山名時氏等ト合シ、之ト戰フ爲ニ陣營ヲ布キシナリ、此後天授元年、北朝

平安通志 卷之六 十二

永和六年、後圓融帝即位ノ時、大極殿ノ荒址ニ行幸アリシ事ハ、先ニ記スル所ノ如シ、是ニ由テ之ヲ案スルニ、朝堂院即チ大極殿ハ、延暦十五年ニ落成シ、貞觀八年ニ應天門二樓焼失シ、同十三年再營功成リ、同十八年延休堂以北、大極、小安兩殿、蒼龍、白虎二樓、此他焼亡シ、元慶三年再營功成リ、康平元年又焼亡シ、延久元年三造功成リ、保元三年、大ニ修造アリシカ、治承元年ニ至リ、至ク焼亡シテ、永ク荒廢ニ歸シタリ、元慶第二回造營ハ、舊規ニ依リ變更ナカリシ者ニ似タリ、察スルニ、此時變更ノ重ナルモノハ、屋制ノ崩造、四阿ヲ變シテ、其東西榮兩下トシ、應天門左右二重廊ヨリ、東西朝集堂ノ外面ヲ繞リテ、會昌門ノ步廊ニ接スル步廊ヲ廢シ、瓦垣ト更メシモノ、如シ、蓋シ後冷泉帝ノ時、皇居屢、大災アリシ後ニテ、國用窮乏、大ニ節制ヲ加ヘシ者ナルヘシ、大極殿ハ、本朝第一ノ造築ナリシモ、其圖ノ現存スル、完全ナル者ナシ、僅ニ伴大納言繪卷、年中行事繪卷ノ類アレトモ、是等ハ其事ヲ見ルヲ主トシテ、畫キシ者ナルヲ以テ、殿宇構造ニ至テ、疎漏少カラス、其殿屋モ、多ク雲烟中ニ籠メテ露サス、全屋ヲ見ルコトヲ得サルヲ以テ、其體ヲ知ルニ由ナケレトモ、察スルニ、東西榮兩下制後世ノ式ナルカ如シ、蓋シ其圖ヲ作リシ時、皆延久以後ナルヲ以テナリ、凡ソ大極殿圖ハ、平面圖ノ後世考定セシモノ多ク、其古キハ、僅ニ拾芥抄所載神泉苑所傳圖等數帖ニ過キス、且ツ建物

圖ノ全部ヲ寫ス者ナキヲ以テ、其詳細ハ到底得テ詳ニスヘカラス、況ヤ殿宇ノ高低、柱梁ノ大小、構造結架ノ細密ニ至テハ、考證スヘキモノナシ、猶大方君子ノ說ヲ待ツノミ、其儀式ハ別ニ第二編禮樂ノ部ニ之ヲ記セリ、

豐樂院

豐樂院ハ、朝堂院ノ西ニ在リ、日本後紀ニ、延暦十八年春正月丙午朔壬子、豐樂院未成、大極殿前龍尾道上、構借屋葺、以彩帛、天皇臨御、蕃客仰望、以爲壯麗云々、然レハ大極殿造營ノ後ニ於テ、之ヲ建築アリシモノニシテ、同廿五年正月、造宮職ヲ廢スルマテニ成功セシモノナルヘシ、此院ハ、大嘗會、節會、賜宴、饗宴、禮射等ヲ行フ所ニシテ、元會ノ日、大極殿ニ於テ、賀正ノ大禮ヲ行ヒシ後、天皇及皇后皇太子本殿ニ臨御シ、親王大臣以下位ニ陪シ、賜宴ノ事アリ、此時玉座ハ中央ニ、皇后座ハ子座ハ、東階ニ、間ニ設ケ、西面ス、親王以下座ハ、第三四間ノ差、南ニ設ケルナリ、其儀尤モ盛ナリ、事ハ弘仁内裏式、貞觀儀式、延喜式、西宮抄、江家次第等ニ詳ナリ、元慶元年正月三日、陽成帝此殿ニテ即位アリ、其建造ノ大形ハ、南面ノ正門ヲ豐樂門ト曰フ、北ニ不老門アリ、東ニ延明門アリ、西ニ萬秋門アリ、繞ラスニ瓦垣ヲ以テシ、掖門アリ、豐樂殿其北位ニ在リテ、南面ス、之ヲ正殿トス、其北ニ清暑堂アリ、又後房ト曰フ、其東西ニ東華、西華ノ二

堂アリ、豐樂殿ノ東西ニ二樓アリ、東ヲ栖霞樓、西ヲ霽景樓ト曰フ、栖霞樓ノ南ニ顯陽堂アリ、其南ニ觀德堂アリ、其南ニ延英堂アリ、各西面ス、霽景樓ノ南ニ永觀堂アリ、其南ニ明義堂アリ、其南ニ招俊堂アリ、各東面ス、豐樂院ノ内ニ儀鸞門アリ、之ヲ中門トス、皆通スルニ步廊ヲ以テス、

占地

南北百三十六丈四尺、北ハ不老門ノ中楹ヨリ、南ハ豐樂門ノ中楹ニ至ル、東西五十六丈ナリ、現今步數二萬二千二百八步トナレ、

豐樂殿

院ノ北位ニ在リ、南面ス、基南北八丈四尺、東西十九丈四尺、其築成大極殿ニ同シ、南面石階三所、九級ナリ、殿南北四間六丈六尺、東西十一間十七丈六尺、五十二楹ヲ以テ成ル、中央高御座ヲ設ケ、御帳アリ、瓦屋東西榮屋上、鴉尾ヲ置ク、丹樓彩壁、朱欄等制作大極殿ニ同シ、楣間額ヲ掲ケ、豐樂殿ト曰フ、以下皆類ア、殿舊名乾臨閣ト曰フ、神泉苑正殿ト同稱ナルヲ以テ、改メテ豐樂殿ト曰フ、和名抄、古本檢芥抄、其他古京圖、

清暑堂

正殿ノ北ニ在リ、基南北三丈六尺、東西十五丈四尺、北面石階三所、各三

級、南面中央步廊ヲ以テ正殿ニ通シ、左右ニ石階アリ、殿南北二間二丈六尺、東西九間十四丈四尺、東西榮瓦屋、其制作小安殿ニ似タリ、天皇臨御ノ便殿ナリ、

東華堂

西華堂之ニ准ス、但東西相對ス、

後堂ノ東ニアリ、北垣ヲ去ル四丈七尺、東垣ヲ去ル三丈三尺、栖霞樓基ヲ去ル三丈、堂東西二間二丈八尺、南北七間九丈八尺、瓦屋南北榮、西面ス、

栖霞樓

霽景樓之ニ准ス

正殿ノ東ニ在リ、基方四丈六尺、樓二間方二丈、步廊ノ上ニ建ツ、瓦屋二重閣制

顯陽堂

栖霞樓ノ南二十五丈ニ在リ、基東西三丈八尺、南北二十七丈六尺、東ノ瓦垣ヲ去ル三丈三尺、堂東西二間二丈八尺、南北十九間二十六丈六尺、瓦屋南北榮、大嘗會、五節會射禮、賜宴、踏歌ノ禮、此前ニ於テ行ハル、

觀德堂

顯陽堂ノ南七丈ニ在リ、其大小制作、顯德堂ニ同シ、

延英堂

觀德堂ノ南七丈ニ在リ、堂南北九間、其製作上ニ同シ、
以上西面北上ス

永觀堂

霽景樓ノ南ニ在リ、其大小制作、顯陽堂ニ同シ、之ト相向フ、

明義堂

永觀堂ノ南ニ在リ、其大小制作、觀德堂ニ同シ、之ト相向フ、

招俊堂

明義堂ノ南ニ在リ、其大小制作、延英堂ト相同シ、之ト相向フ、

以上東面北上ス

右六堂ハ、禮式ノ日、親王大臣以下ノ座ナリ、蕃客賜宴ノ時モ、亦之レニ
居ラシム、

豐樂門

南面ノ正門ナリ、基ノ築成ハ、朝堂院諸門ニ同シ、門南北二間二丈六尺、
東西五間十丈、戸三間、十六楹ヲ以テ成ル、瓦屋東西榮、

儀鳳門

豐樂門ノ内ニ在リ、院ノ中門ナリ、其制作豐樂門ニ同シ、東西步廊ヨリ、
相通ス、
不老門

北面ノ正門ニシテ、車駕臨院ノ時ハ、此門ヨリ入り、後房ニ御スルヲ例
トス、其製作豐樂門ニ同シ、但シ南北二間二丈二尺、東西五間九丈、戸三
間、

延明門

東面ノ正門ニシテ、顯陽觀德二堂、中間ノ東ニ在リ、其制作不老門ト相
同シ、但シ東西二間二丈四尺、南北五間七丈、戸三間、東西榮、

萬秋門

西方ノ正門ニシテ、延明門ト相當ル、其制作大小相同シ、

掖門

青綺門

正殿ノ東廊ニ在リ、廣一間一丈、以下皆同シ

白綺門

正殿ノ西廊ニ在リ

逢春門

栖霞樓ノ南ノ步廊ニ在リ、

承秋門

霽景樓ノ南ニ在リ、逢春門ト相對ス、

高陽門

儀鳳門ノ東廊ニ在リ、

喜樂門

儀鳳門ノ西廊ニ在リ、

以上皆内ノ步廊ニ在リ

禮成門

豐樂門ノ東垣ニ在リ、

崇賢門

豐樂門ノ西垣ニ在リ、

陽祿門

舍利門

開明門

東垣ニ在リ、

福成門

吉徳門

陽徳門

西垣ニ在リ、

以上外垣ニ在リ、

豐樂殿ハ大内裏造營ノ時最終ノ建築ニシテ、今昔物語ニ其比飛驒ノ工ト云フ者アリ遷都ノ時ノ工也世ニ並無キ者武樂院武ハ蓋シハ其工ノ起ハタレ微妙ルナハトアリテ飛驒工ハ畫工百濟川成ト其技ヲ角セシユトナ記セリ果シテ此良工ノ建築ニ係レハ微妙ナリシナルヘシ其後時々修理アリシカ、後冷泉帝康平六年三月廿二日火災ニ罹リ烏有トナレリ扶桑略記ニ廿二日戌刻豐樂院燒亡火起霽景樓西北廊トハ此時ノ事ナリ所謂康平大火エテ皇居朝堂院等ノ灰燼トナリシヨリ僅ニ六年ヲ經テ未タ再造モナラサルニ豐樂院又火災ニ罹レリ此ヨリ再造ナク舊來豐樂院ニテ行ヒシ儀式ハ朝堂院又ハ紫宸殿ニテ行ハル、事トナレリ、延喜式、西宮抄、江家次第、

武德殿

殷富門内右近衛府右兵衛府ノ東相距ル僅ニ四丈造酒司ノ北圖書寮ノ南ニ在リ東面シ宴松原ヲ隔テ斜ニ宜秋門ニ對ス其前四方百數十丈ノ廣場ニシテ武技ヲ演スル所ナリ駒牽御馬奏騎射競馬等此ニテ行ハル時ニ天皇親臨天覽アリ皇太子以下之ニ陪ス其儀最盛ナリ弘仁内裏式貞觀儀式延喜式西宮抄北山抄等ニ詳ナリ

武德殿

基南北十六丈東西六丈六尺殿東面東西四間五丈南北十間十四丈四尺凡五十楹ヲ以テ成ル瓦屋鴉尾四方各石階アリ其西步廊ヲ以テ後殿ニ接ス其他皆欄檻アリ中央高御座ヲ設クル大極殿ノ式ノ如シ

後殿

式ハ小安殿ト稱ス猶大極殿ノ後房アルカ如シ天皇親臨ノ時ノ便殿ナリ殿ハ東ニ向ヒ南北七間十一丈二尺東西二丈三方垣ヲ設ク

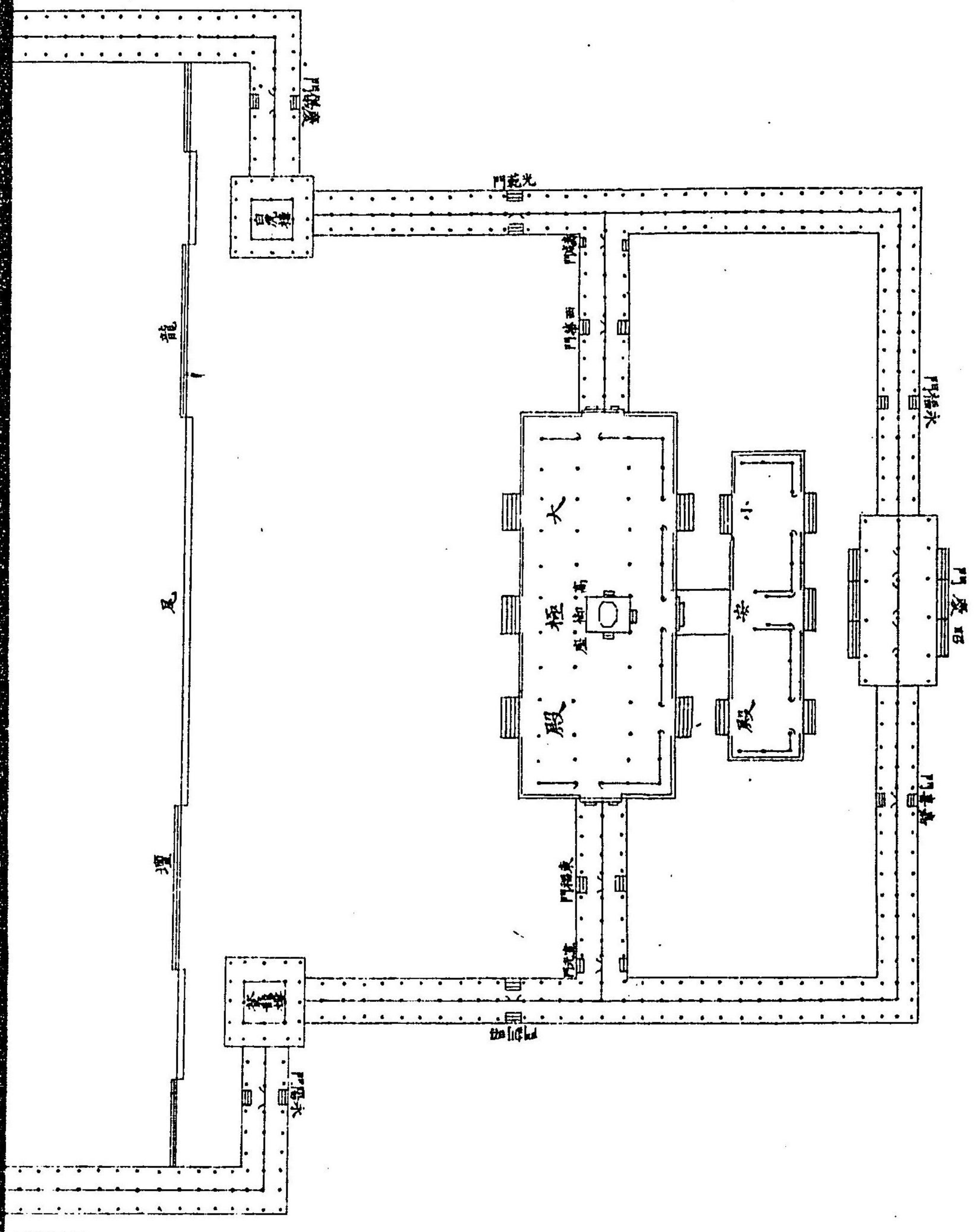
埒

武德殿ノ東宴松原ノ西ニ於テ南北ニ埒ヲ立ツ御馬奏ヲ行ヒ騎射ヲ演スル所ナリ

案ニ武德殿本ト馬埒殿又弓場殿又馬場殿ノ稱アリ弘仁九年五月五日嵯峨帝臨幸騎射ノ天覽アリ此ヨリ武德殿ノ稱アリ總テ武事ニ關スル事駒牽ノ奏騎射相撲司ノ事等ヲ此ニ行フ故ニ武德殿ト稱ス五月五日騎射ノ禮ハ盛大ノ式ニシテ其前日左近右近ノ馬場ニテ試射アリ之ヲ荒手番ヒト稱ス重五ノ式ヲ眞手番ヒト稱ス皇太子以下之ニ會シ優劣ヲ等シ祿ヲ賜フ中古此禮廢シテヨリ其遺法ハ上賀茂神社ニ存シテ今ノ競馬トナリ騎射ハ終ニ廢レタリト云フ

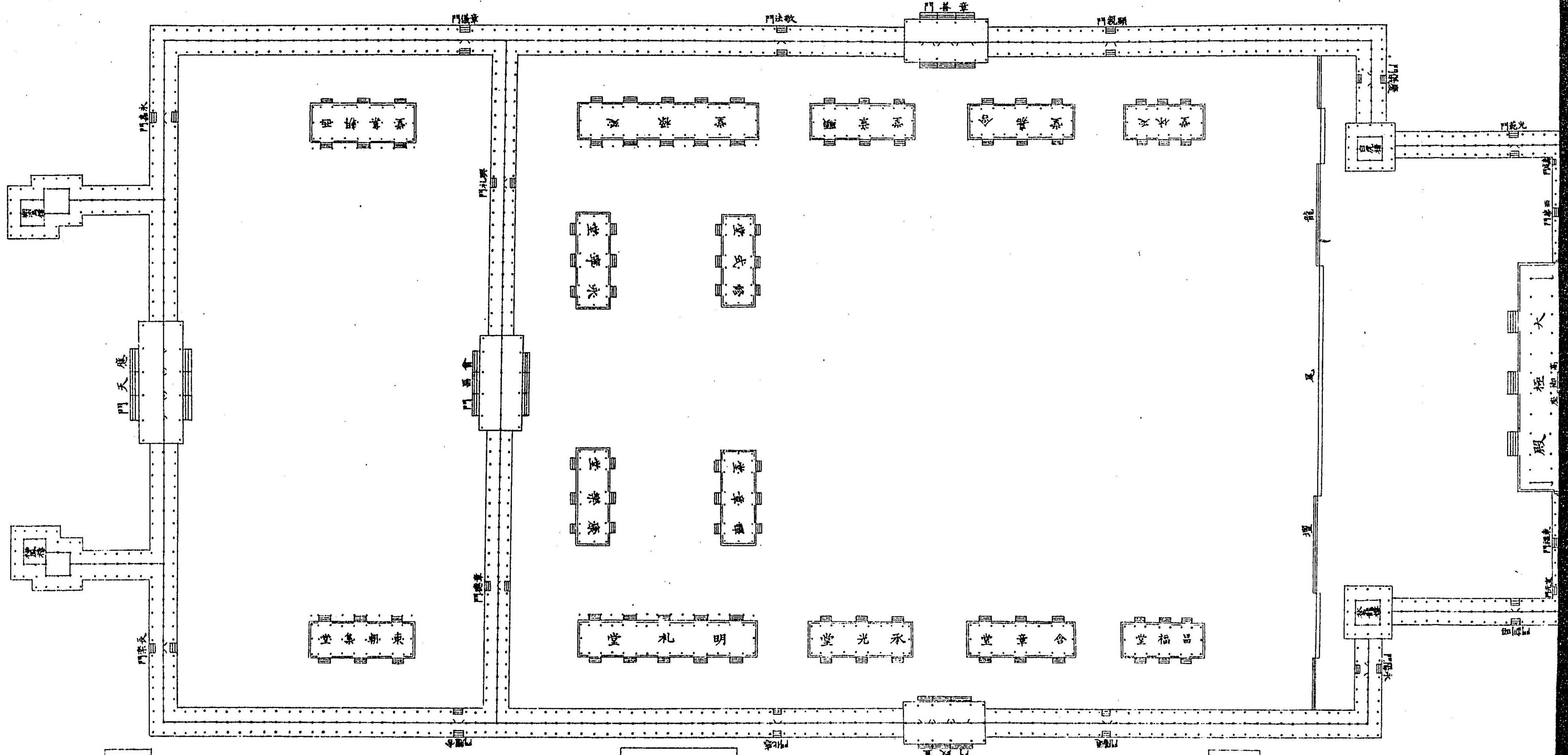
平安通志卷之六

圖 全 院 堂 朝



中門大略平

春山院平
田大



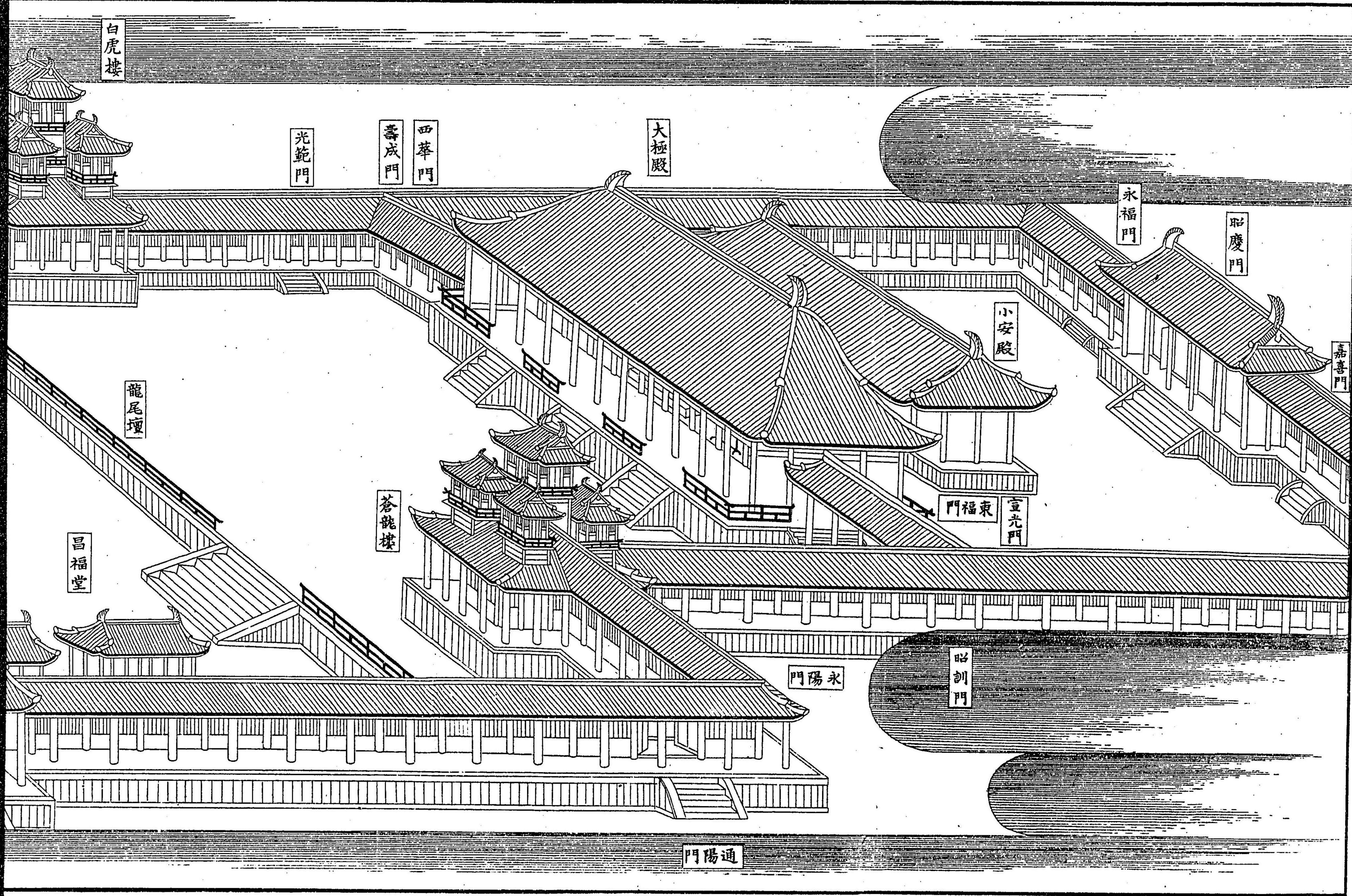
崇聖堂
大門

大門
崇聖堂

崇聖堂
大門

大門
崇聖堂

大極殿全圖



延祿堂

敬法門

章善門

頭親門

白虎樓

慶義門

水寧堂

修武堂

顯章堂

合嘉堂

延休堂

會昌門

龍尾壇

康樂堂

暉章堂

東朝集堂

義光堂

會章堂

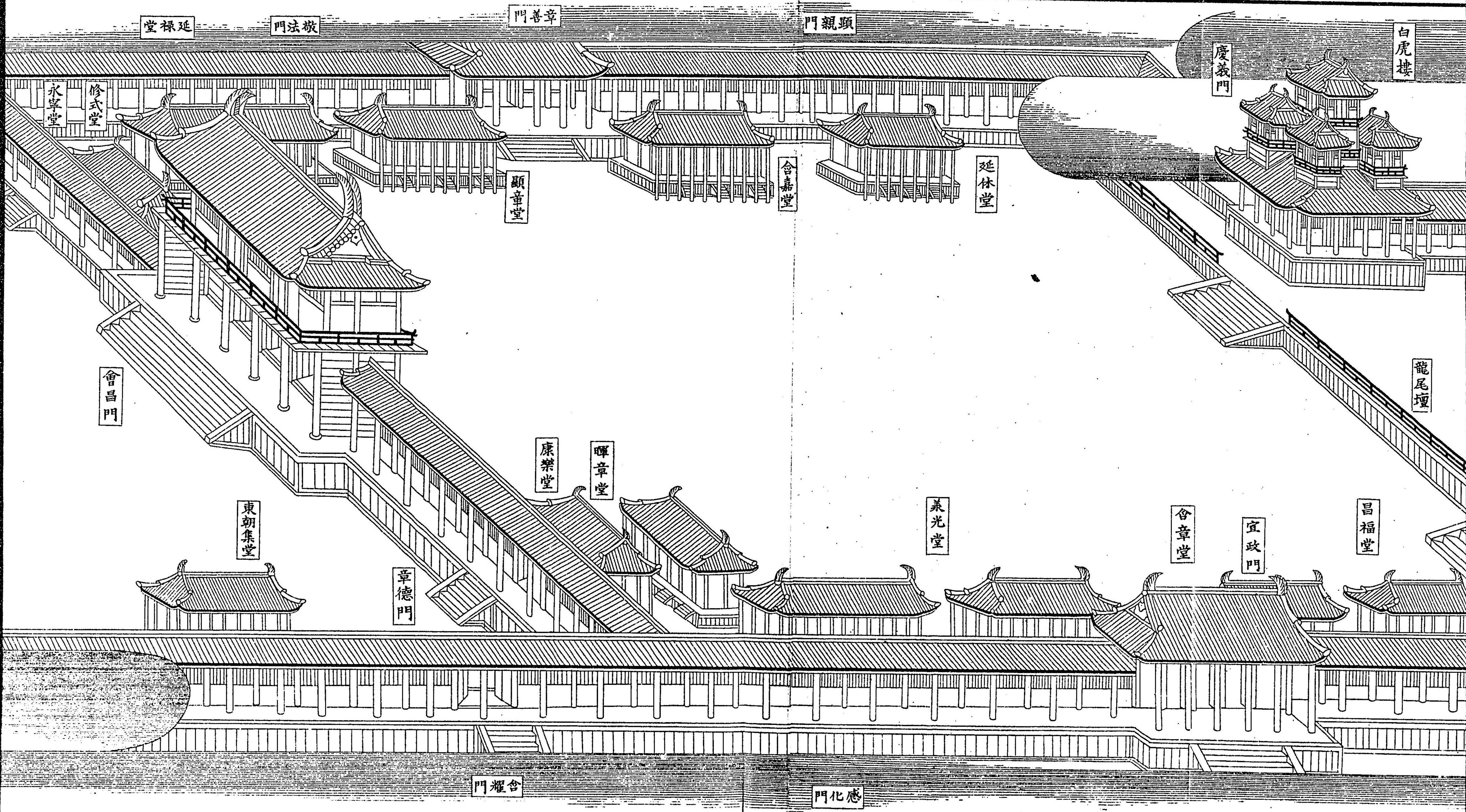
宜政門

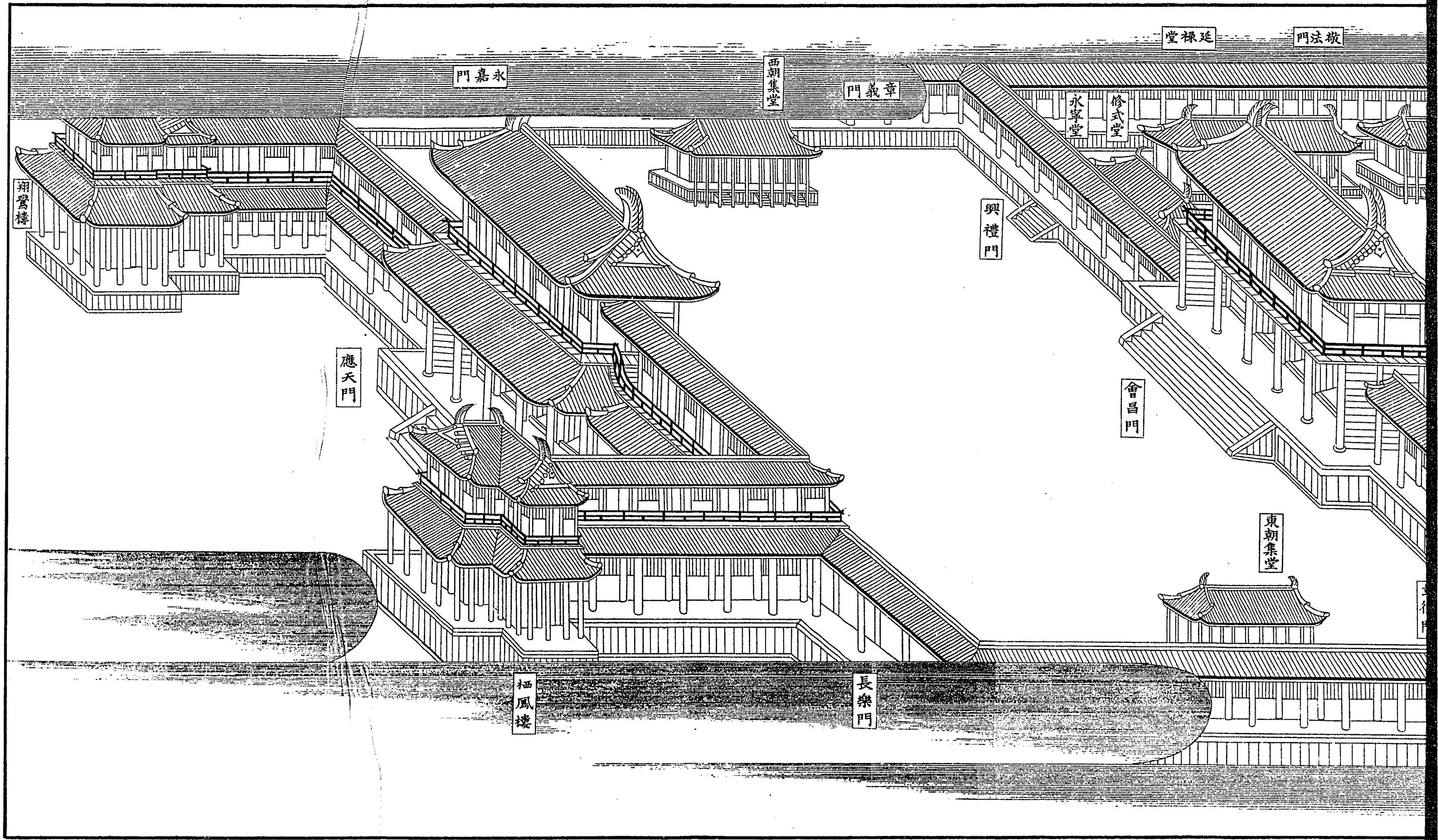
昌福堂

章德門

會耀門

感化門





延祿堂

敬法門

永嘉門

西朝集堂

章義門

永寧堂

修武堂

興禮門

會昌門

東朝集堂

應天門

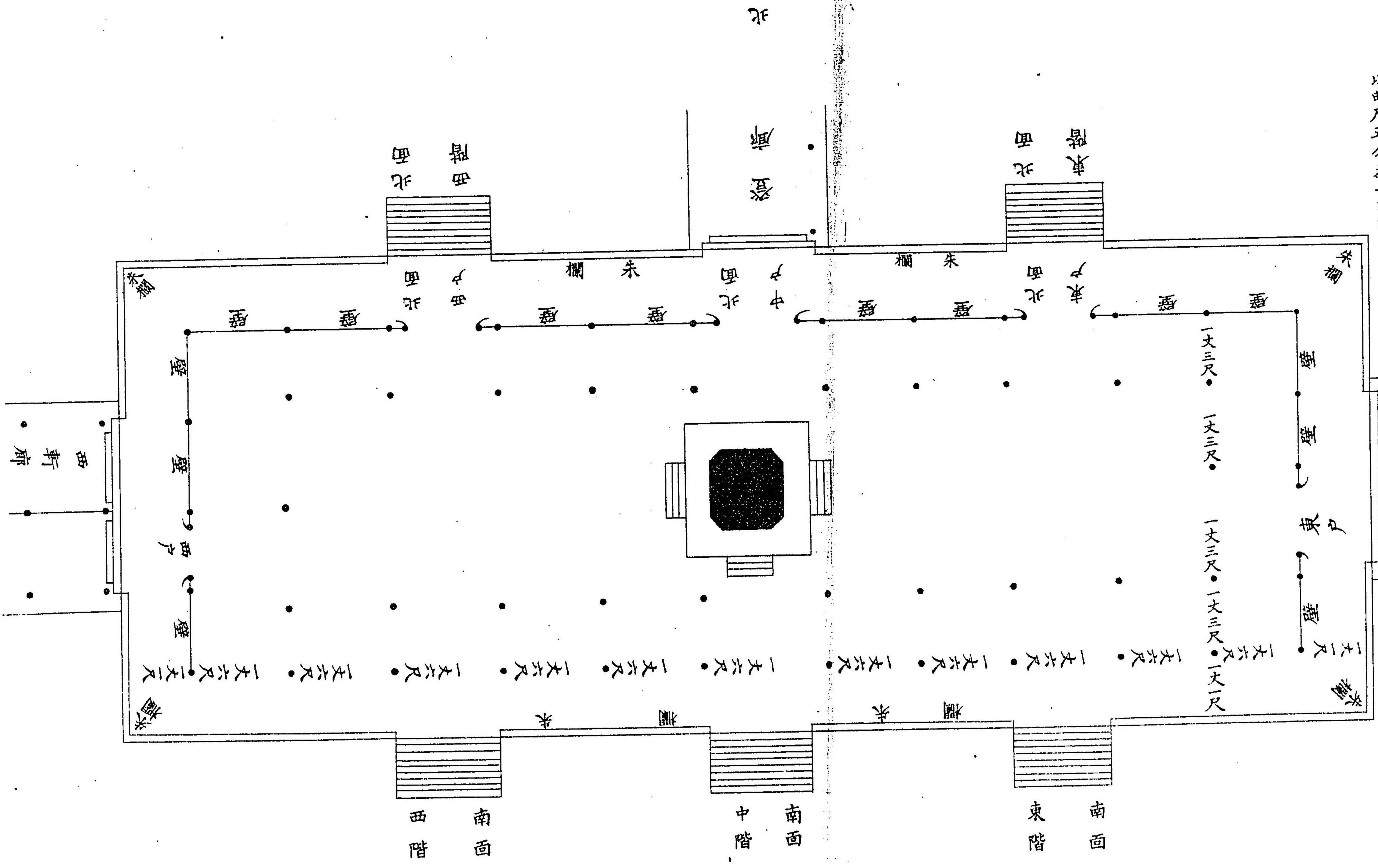
翔鸞樓

柘風樓

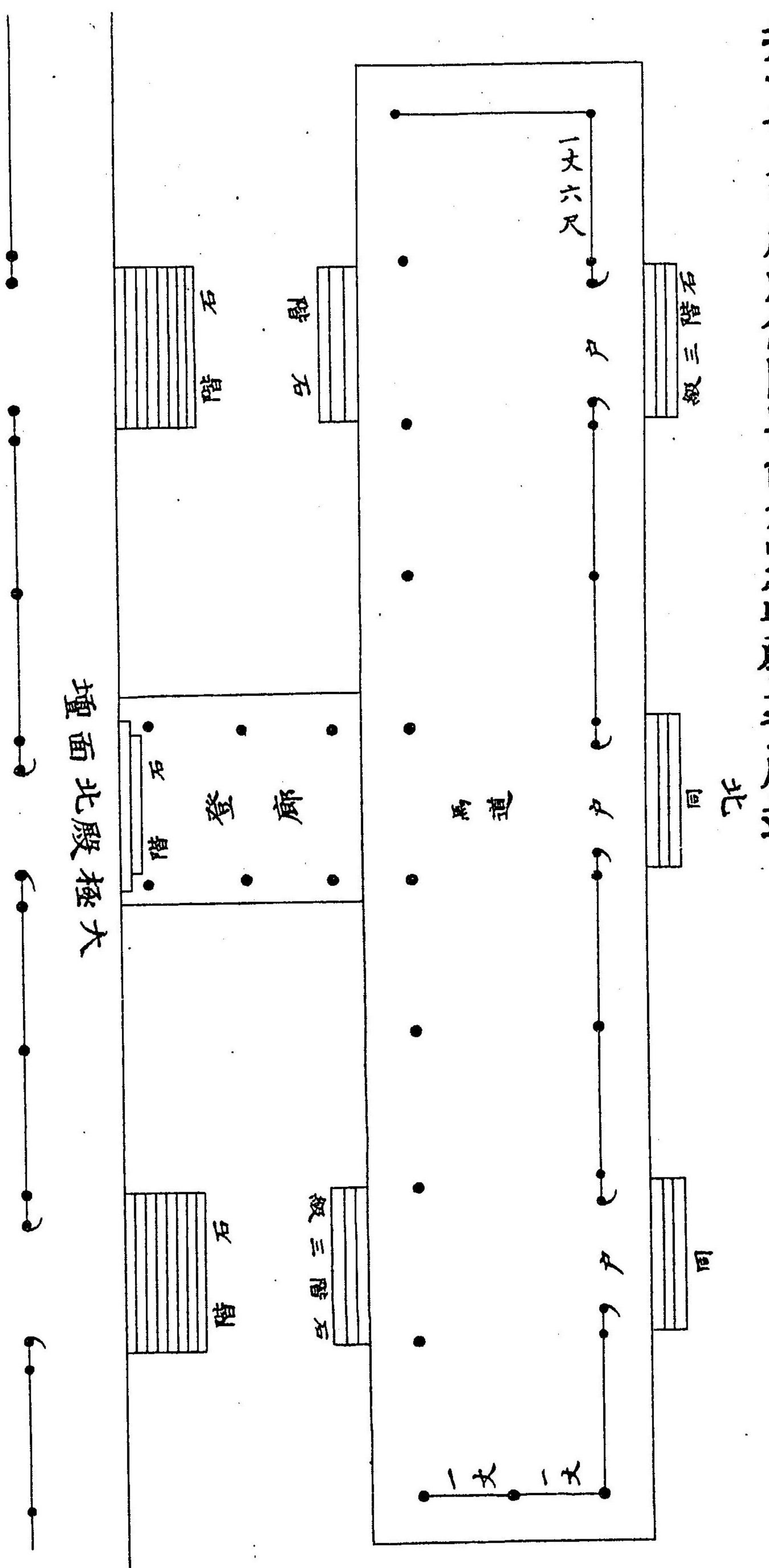
長樂門

據諸圖書所考定大極殿圖

以曲尺五分為一大法

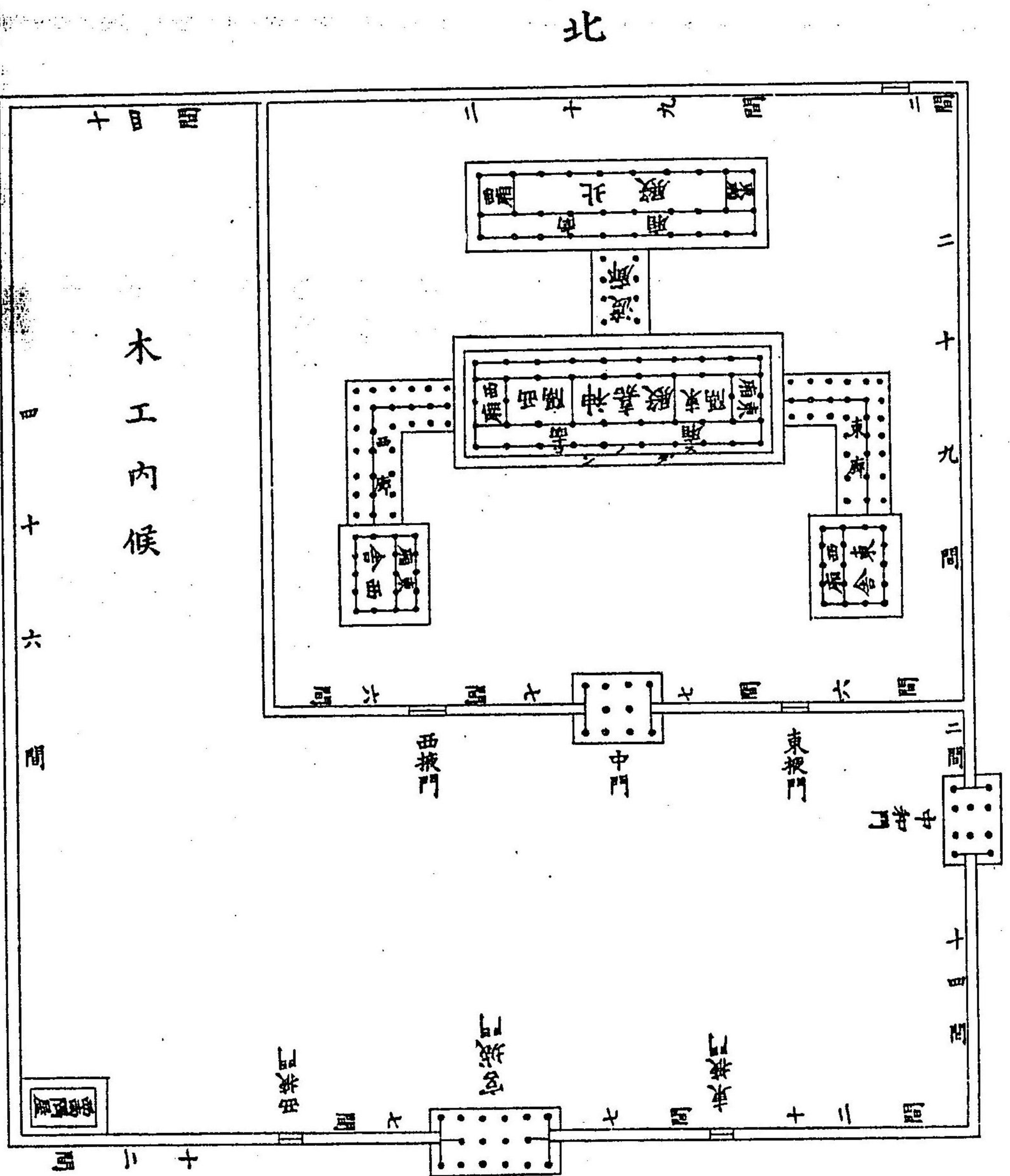


據古圖及南都所傳圖等研考宗安殿及登廊圖

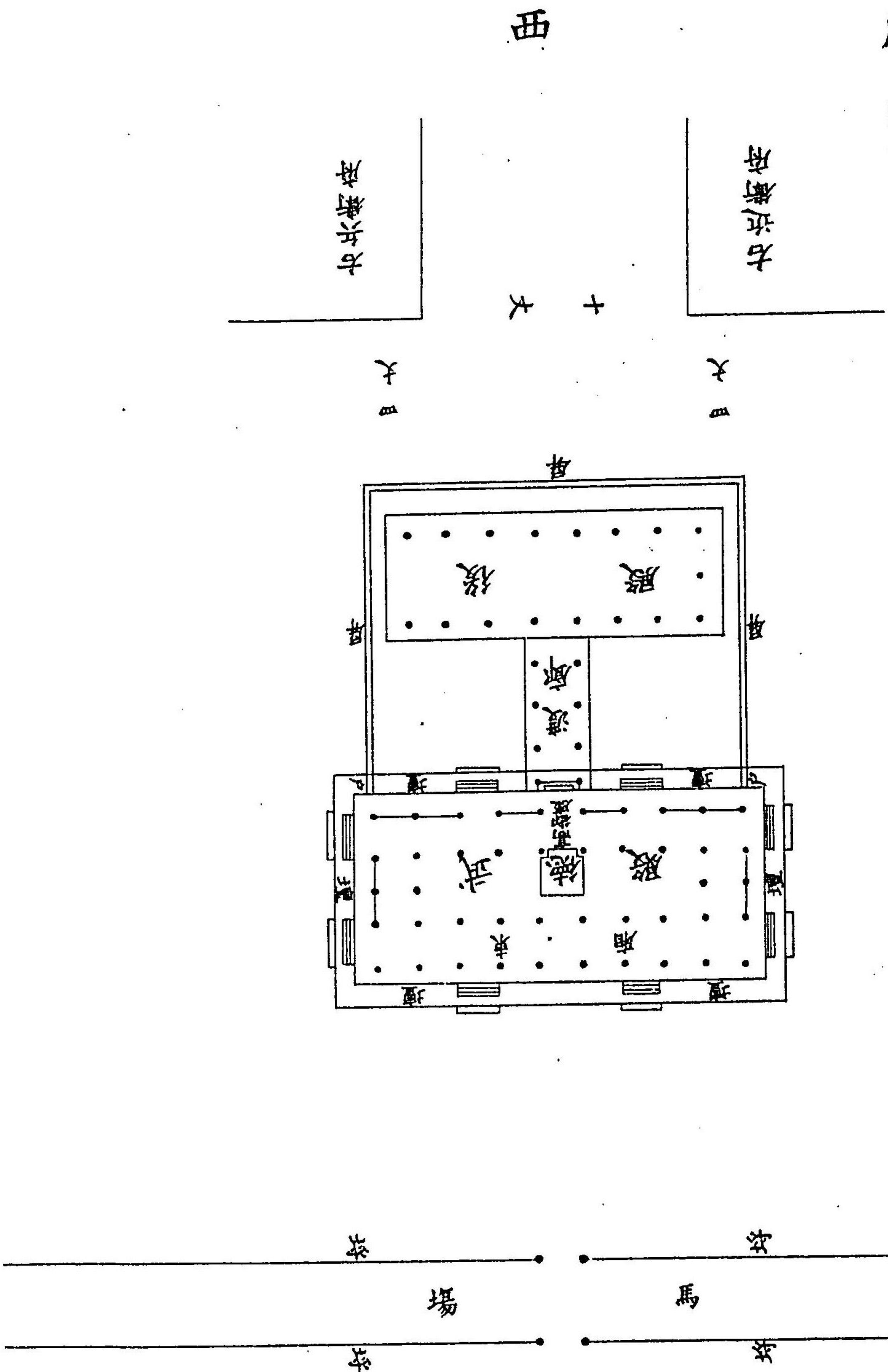


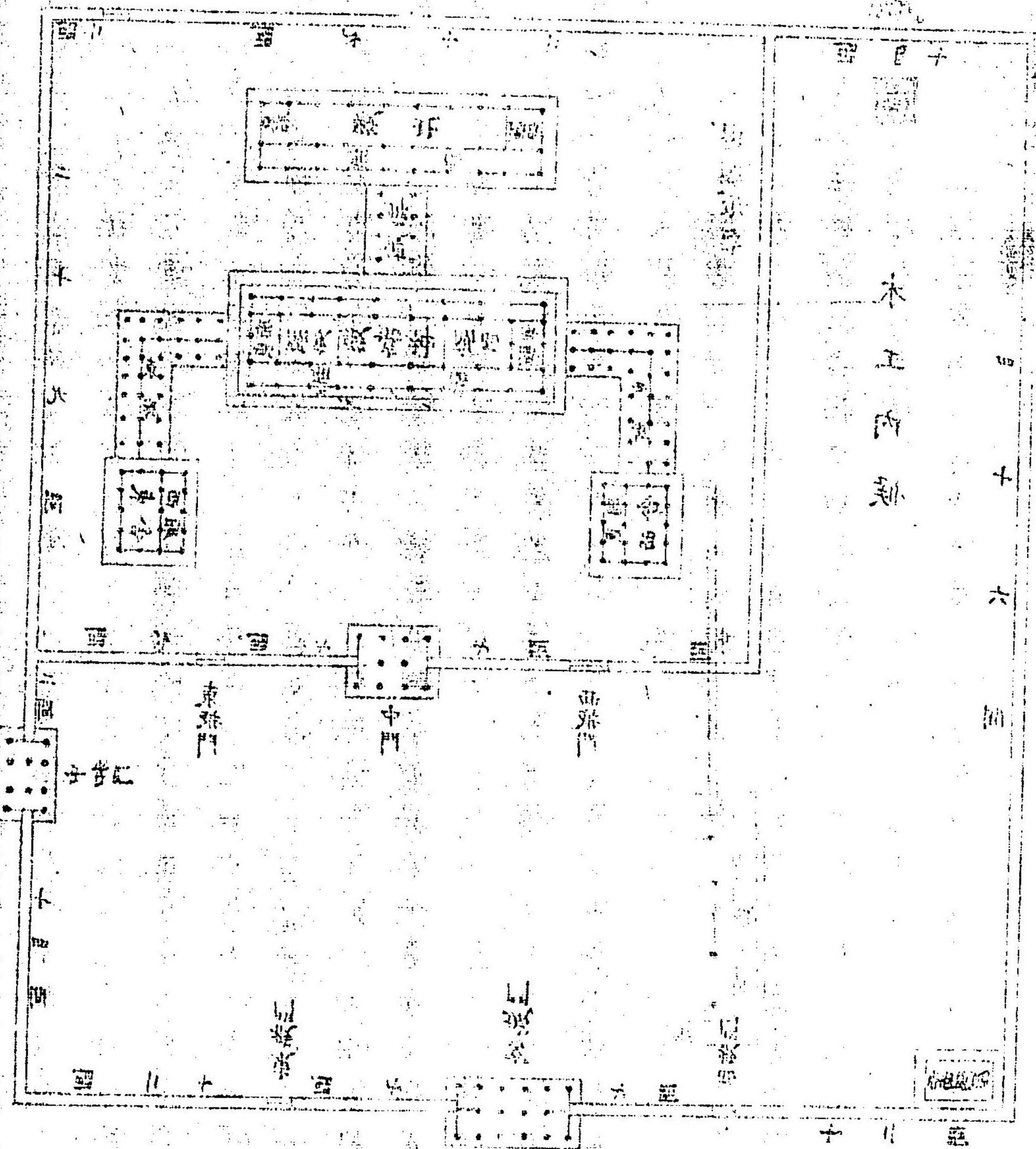
大極殿北面壇

宇和院圖



武德殿圖





平安通志卷之七

第一編

大内裏

神祇官

皇朝神道ヲ以テ國ヲ立ツ、祭政一致以テ天下ヲ經理ス、故ニ大化ノ政ヲ革ムル、先ツ神祇ヲ鎮祭シテ、然後ニ政事ヲ議シ、大寶ノ官ヲ定ムル、神祇官太政官ノ上ニ居ル、其神ヲ敬シ、祖ヲ尊ヒ、以テ尙フ所ヲ明ニス、盛哉、其後王政衰ヘ、太政官廢スト、雖モ神祇官ハ獨リ存シ、永ク天下ノ神祇ヲ統ヘ、以テ徳川氏ノ初ニ及フ、是レ其由ル所ヲ知ラサルヘカラサルナリ、今其全體ヲ記シ、併セテ其沿革ノ大要ヲ録シ、以テ其實事ヲ明ニス、

神祇官ハ加牟都加佐ト稱ス、郁芳門内ノ南ニアリ、西ハ廩院ニ隣シ、南ハ雅樂寮ニ隣シ、北ニ八脚門アリ、之ヲ正門トス、大炊寮ト相對セリ、八脚門ノ東ニ棟門アリ、南ニ二門ヲ開ク、南北三十七丈、東西三十五丈、之ヲ西院東院ニ分ツ、

西院

官ノ西部ニシテ、占地ノ大凡三分ノ二ヲ占ム、北ニ八脚門アリ、南ニ

棟門アリ、東ノ中隔ニ中門アリ、中門正面ノ西偏ニ八神殿アリ、東ニ向フ、八神殿ノ南ニ齋部殿アリ、其南ニ西舎アリ、八脚門ノ坤、八神殿ノ北ニ北廳アリ、南ニ向フ、北廳ノ東ニ東舎アリ、亦南ニ向フ、東舎ノ前高藏アリ、棟門ノ内南舎アリ、北廳ト相對ス、南舎ノ東ニ幣殿アリ、八神殿

西院ノ西部ニ在リ、八社相並ヒ東面ス、各東西榮搏風堅魚木アリテ、神社ノ制ナリ、其北ヨリ第一社第五社第八社ノ前ニ鳥居ヲ立ツ、齋垣アリテ之ヲ繞ル、

祭神

延喜式神名帳ニ、神祇官西院座御巫等祭神二十三座并大月次新嘗御巫祭、神八座并大月次新嘗中宮東宮御巫又同、神産日神、高御産日神、玉積産日神、生産日神、足産日神、大宮賣神、御食津神、事代主神、座摩巫祭神、五座并大月次新嘗、生井神、福井神、網長井神、波比祇神、阿須波神、御門巫祭神、八座并大月次新嘗、櫛石窓神四面門各一座、豊石窓神四面門各一座、生島巫祭神、二座并大月次新嘗、生嶋神、足嶋神トアリ、但シ八神殿ハ、神體ヲ安セス、唯賢木ヲ用フ古文、百鍊抄ニ、大治二

年二月十四日、園韓神社神祇官以下八神殿并内外院焼亡、園韓神御正體同奉取出シ、但後日兼俊宿禰云、八神殿園韓神、自元無御正體、但園韓神有神寶劍云々トアリ、

齋戸殿

八神殿ノ巽ニアリ、東西二間、南北一間、東西榮、神物ヲ納ムル所ナリ、

北廳

七間四面、東西榮、南ニ面ス、中央二間ヲ身舎トシ、南北ニ廂アリ、南廂ノ西ヨリ第一間第四間第七間ニ戸アリ、其他部ヲ立ツ、身舎ノ北戸之ニ同シ、其他東西皆壁ナリ、北廂ノ中央戸アリ、其東部ニ御厨子所アリ、天皇臨幸ノ時、北戸壇ヨリ入御アリ、御幣ハ御厨子ノ間ニ安スルナリ、

東舎

廳舎ノ東ニアリ、五間ニ二間、東西榮、南ニ向フ、

南廳

六間、東西榮、北ニ向フ、

高藏

東舎ノ前ノ東ニアリ、一間四面、神物ヲ納ムル所ナリ、
御幣殿

南舎ノ東ニアリ、四間ニ二間、南北榮西ニ向フ、

東院
官ノ東部ニシテ、占地ノ大凡三分一ヲ占ム、其棟門北ニ向フ、南ニ土
門ヲ開ク、中隔アリ、西院ト區畫シ、中門アリテ之ニ通ス、

東廳
六間東西榮、南ニ向フ、

北舎
棟門ノ内東廳ノ北ニ在リ、六間東西榮、南ニ假廂アリ、

大炊殿
井舎
東廳ト北舎ノ間ニアリ、蓋シ大炊殿ハ神饌ヲ調スル所ニシテ、井舎
ハ神用水ノ井ナリ、

南舎
南ノ土門ノ内ニアリ、六間東西榮、北ニ向フ、

大内裏ニ於テハ、神祇官最モ久シク存シ、其儀式モ亦最モ久シク行ハレタリ、仍
テ其沿革變遷ノ大略ヲ記サンニ、其火災ニ燒亡シ、大風ニ顛倒セシコト、幾回ナ
ルヲ知ラス、然レトモ時々造營修理アリテ、其儀式モ常ニ絶エス行ハレタリ、其
燒亡ハ、天曆七年二月十二日、藍園町失火ノ時、大内裏ニ延ヒ、神祇官ノ後廳燒亡
セリ、扶桑畧記ニ、天曆七年二月十二日壬戌丑刻、藍園町有失火事、延及神祇官後
廳屋燒亡、已畢、勅遣差近衛少將國紀、防止其火、十三日癸亥、發遣失火百姓賑給之、
例宜勸申、又去夜失火、登神祇官高倉、撲滅火者、宜令給祿トアリ、日本紀略ニハ、天
德元年二月十一日、神祇官火、長德四年三月廿八日、中御門南_中及神祇官北廳舎
燒亡トアリ、北廳舎ハ西院ノ正廳ニシテ、第一ノ舎ナリ、後三十六年、長元七年再
造ノ事アリ、左經記ニ、長元七年八月十九日、_中神祇官北廳舎_{信乃國、南屋一字、}
_{國、西屋一字、武藏倉一字、若狹}トアリ、此時火災燒亡ノ餘、諸國ニ課シ、他ノ官廳ト
俱ニ再造アリシナリ、其後九十四年ヲ經テ、大治二年二月十四日、神祇官八神殿
燒亡、後日廢朝三ヶ日ト玉海ニアリ、此後又造營アリシト見エテ、兵範記ニ、仁安
三年、神祇官ニテ祈年穀、諸國奉幣使發遣ノ事アリ、其後十三年ヲ經テ、治承元年
四月廿八日ノ大火_{即天安元}ニ罹リ、燒亡セルコト玉海ニ見ユ、此時大極殿ヲ始
メ、官廳多ク烏有トナリシカ、國計已ニ窮乏、再造ノ力ナク、是ヨリ永ク荒廢ニ委

セリ、然レトモ神祇官ハ再造アリテ、壽永元年六月十一日、神今食ノ事、同年九月二日、祈年穀奉幣發遣ノ事アリ、吉建久九年正月廿二日、土御門帝即位奉幣ノ爲、攝政基通神祇官正廳ニ臨ミ、建仁元久ノ際、多ク此ニテ祈年穀奉幣發遣ノ儀行ハレタリ、三長然レトモ治承元年ニハ、東舍顛倒シ、文治五年ニハ、廳舍、貞應三年ニハ、東應并棟門安貞二年ニハ、御幣殿ノ顛倒セシ事、當時ノ記録ニ見エタリ、然レトモ時々修造行ハレシト見エテ、百鍊抄ニ、貞應元年六月五日ノ夜、神祇官八神殿遷宮ノ事アリ、承久ノ後ニ至テハ、大内裏ハ全ク荒廢セシモ、神祇官ノミハ修造ノ事アリシト見エ、玉英曆應三年ノ記、後村上神體アル時ハ、先ツ假殿ヲ作り、神體ヲ奉安シ、後ニ正廳ヲ作ルヘシ、今神體已ニ紛失スレハ、直ニ正殿ヲ造ルヘキ由ヲ答ヘシ事アリ、然レトモ元弘ノ亂ヨリ、内野ハ常ニ四戰爭鬪ノ地トナリシヲ以テ、元弘ノ亂ニハ、忠顯朝臣ハ、神祇官ノ前ニ控ヘテ勢ヲ分テ、上大舍人ヨリ下ハ七條マテ云々、太平將軍ノ御勢、嵯峨ヨリ内野ニ充滿ス、先陣ハ神祇官ノ前ニ當リ、東向ニ控ヘ云々、梅松明德ノ役ニハ、後龜山帝元中ノ年ニテ幕府ノ陣ヲ記セシ文ニ、畠山右衛門佐ハ、八百餘騎ニテ、神祇官ノ北、大庭ノ掠ノ木ヲ南ニ見テ、土御門ノ末ニ陣ヲ取ル、中大内左京權太夫義弘ハ、五百餘騎、神祇官ノ森ヲ背ニ當テ、二條大宮ニ陣ヲ取ル、明徳ト見エタリ、此ノ如ク常ニ戰場ト

ナリシヲ以テ、其興廢定ラス、變遷常ナシ、然レトモ足利氏ノ盛時ハ、更ニ修造セシナルヘシ、康富記ニ、嘉吉二年十一月廿一日、鎮魂祭ノ時、深雪ニ因テ、神祇官北門下ニ於テ、事ヲ行ヒシ事アリ、蓋シ北廳ノアラサルヲ以テ、雨儀ニツキ、北門下ニ於テセシコトヲ察セラル、拾芥記ニハ、永正十五年十一月三日、神祇官ニ於テ、伊勢神宮幣帛發遣ノ事アリ、此亂離衰頹ノ世ニ於テモ、古式ヲ弃テス、必ス此ニテ行ハレシヲ見ルヘシ、永祿二年正親町帝即位ノ時ハ、神祇官ハ殆ト荒廢セシヲ以テ、舊儀ニヨリ、假屋ヲ設ケ、其中ニテ行ハレタリ、中原康雄記ニ十一月十一日、其式行ハルヘキニ、京中材木屋ヨリ、假屋ヲ作ル材木ノ事ニ付異議アリ、爲ニ果サス、翌十二日假屋ニテ、其式ヲ行ヒ、幣帛發遣ノ時ニハ、主上遙拜アリ、シコトヲ記セリ、此時代ニハ、京中材木屋ニテ、既國社ノ神幸ノ假儀ヲ作リシコト、伯家部類ニ、寛永元年神祇伯雅朝王ノ話ヲ記シテ曰ク、神祇官ハ大内裏ノ辰巳ナリ、今ハ二條通ノ北ニ當ルヘシ、其屋敷三十九年許已前、予カ三十餘ノ時迄、屋敷アリ、其頃ハ芝ニ成テ在リシヲ、太閤檢地ノ時カハリテ、其ヨリ絶タルナリ、註ニ雅棟王ノ二十九年已前ハ、正親町院ノ御代末也、天正十二年雅朝王三十歳ニ當ル、又曰ク、八神殿ハ慶長三年吉田ヘ移ス、此時迄ハ、其古キ社、其レヲ直ニ吉田ヘ引用シント云フ、此時分迄ハ、二條ノ城ハ、曾テ以テナカリシナリト、然レトモ寛永三年東照宮賜號ノ時ハ、仍ホ此舊跡ニ假屋

ヲ設ケ、帳幕ヲ引キ、其所ニテ勅使發遣ノ式行ハレタリト云フ、

太政官

太政官ハ萬機ヲ親裁シ、諸政ヲ總統スル所ニシテ、即チ國家ノ政府ナリ、大化改
革ノ時、初テ之ヲ置キ、以テ八省百司ヲ統轄ス、天智帝十年、大友皇子ヲ以テ太政
大臣トナス、乃チ太政官ノ大政ヲ總理スル職ナリ、其後孝謙帝、改メテ乾政官ト
曰フ、未ダ幾ナラス、舊ニ復シ、後世仍テ改ムルコトナシ、皇居ト共ニ、奈良ヨリ長
岡ニ移リ、平安京造營ニ及ヒ、大内裏ノ内ニ建設セラル、其地域ハ大内裏朝堂院
ノ東ニ在リ、美福門ヨリ北ニ三町、都芳門ヨリ西ニ三町ニシテ、其西北ニ在リ、南
北四十丈、東西五十六丈、正南ニ大門アリ、大門ノ内正廳アリ、南面ス、正廳ノ巽位
ニ東廳アリ、正廳ノ坤位ニ西廳アリ、東西相對ス、正廳ノ北ニ後堂アリ、各步廊ヲ
以テ相通ス、後堂ノ東ニ別ニ一區域ヲ畫シ、朝所アリ、西面ス、
太政官ノ内ニ別ニ一區域ヲ畫シ、太政官附屬ノ官衙アリ、乃チ其西南ニハ文殿
アリ、後堂ノ西ニハ造曹司アリ、其西ニハ勘解由使アリ、朝堂ノ北ニハ辨官曹司
アリ、是レ其大形ナリ、

正廳

南面、東西榮、瓦屋、東西七丈、南北四丈、中央ヲ正堂トシ、天皇臨御ノ所

トス、東西及北ニ戸アリ、其外壁アリ、南廂アリ、廂外三階アリ、中央及
ヒ東西ニ在リ、級ヲ設クル五階ナリ、大極殿燒亡ノ時ハ、此ニ高御座
ヲ設ク、其荒廢ノ後ハ、即位ノ大禮モ、此ニテ行ハル、東西及北ニ步廊
アリ、以テ東西廳及ヒ後堂ニ通ス、

東廳

南北榮、瓦屋、西ニ向フ、其制正廳ニ同シ、南廂ニ石階二所アリ、以テ正
門ノ片庇廊ニ接ス、

西廳

其制東廳ニ同シ、東ニ向フ、

步廊

正廳ノ左右、東西ニ五丈、南ニ折ル五丈、以テ東西廳ニ通ス、瓦屋廣二
丈、正廳ノ北七丈、後堂ニ通ス、其制相同シ、

後堂

其制正廳ニ同シ、中ニ馬道アリ、西廂ニ藏人所アリ、東面步廊ヲ以テ、
朝所ニ通ス、西面亦步廊ヲ以テ造曹司ニ通ス、

朝所

後堂ノ東ニ別區域ヲ畫ス、東西十六丈、南北十一丈、朝所ハ南北榮、瓦屋廣八丈、東西六丈、其中央ヲ正堂トシ、四方ニ廂アリ、東西ニ階ヲ設クル各三所ニシテ三級、西ノ中階ニ當テ門アリ、

南門

正廳ノ正面ニアリ、南面ス、其制ハ八脚門ニシテ、廣三間、戸一間、南北二丈、瓦屋、

太政官ハ延曆造營ノ後、幸ニ久シク火災ヲ免レシヲ以テ、皇居ノ災アルヤ、長曆三年六月廿七日、長久三年十二月八日、皆太政官朝所ニ火ヲ避ク、然ルニ永承元年二月廿八日、朝所災ニ罹リ、車駕俄ニ大膳職ニ避クル事アリ、其後再造成テ、同三年十一月二日、皇居ノ災アル、又朝所ニ避ク、其後步廊諸門ノ顛倒セシコト有レト、常ニ再造アリテ、保元元年大内裏大修理ノ時、太政官モ亦其中ニアリ、治承元年ノ大火ニハ、其接近ノ朝堂院民部省ノ焼失セシモ、幸ニ太政官ハ免カレタレハ、其後十年後鳥羽帝ハ、官廳ニテ即位ノ大禮ヲ行ハル、此時大極殿ハ、治承災後、再造ナラス、荒廢セシヲ以テ、遂ニ官廳ヲ即位ノ所ト定ム、是ヨリ其例トナリ、南朝諸帝ノ外ハ、後土御門帝ニ至ルマテ、此ニテ即位ス、建仁元年、官廳ノ修理アリシカ、正嘉元年二月二日夜火災ニテ、朝所ト後堂ノ外、一切烏有トナレリ、太政

官ハ延曆造營ノ建物、幸ニ存在セシカ、此ニ及ヒ、一夜灰燼トナリシハ、誠ニ惜ムヘキナリ、其三月大納言四條隆親ニ、安藝國ヲ給ヒ、造營セシメラレ、明年功成ル、百鍊抄、帝王編年記、一代要記、同三年龜山帝ハ、此新廳ニテ即位アリ、南北分裂ニ及ヒ、京師ハ足利氏ノ據有スル所トナリ、延元二年二月廿八日、尊氏光明帝ヲ擁立シ、官廳ニテ即位アリ、正平十一年北朝文和五年八月十四日、大風洪水、官廳顛倒セリ、後深心院關白記、明年造營ノ事始マリ、足利義滿之ヲ造進セシカ、應永十三年八月廿五日、又大風ノ爲メニ顛倒セリ、山科教言卿記ニ其事ヲ記シテ曰ク、廿五日晴、去夜丑刻ヨリ大風、卯一點マテ吹、無是非事也、凡此風ニ、官司顛倒、北山殿總門、花山四足、其外諸家車宿以下對屋等破損、希代事也、トアル是レナリ、官司ハ即テ官廳ニテ、北山殿ハ鹿苑寺、即テ義滿ノ住スル所ナリ、同十四年造營アリテ、十月十日、上棟式ヲ行フ、同廿一年十二月十九日、稱光帝此ニ即位アリ、教行記、同廿二年西廳ノ外顛倒セシヲ、又修造アリシカ、建内記、僅十餘年ヲ經テ、同廿四年八月十四日、曉火災ニ罹リ、燒亡セリ、三寶院滿濟日記ニ、其事ヲ記シテ曰ク、八月十四日、今朝官廳回祿云々、定付火歟、又乞食等所行歟、不思議事也、爲朝家驚入者也、ト以テ當時ノ狀況ヲ見ルヘキナリ、明年正長元年十月廿三日、官廳木造始メアリテ、明年永亨元年十一月廿七日、上棟式ヲ行ヒ、其十二月廿七日、後花園帝此ニ即位アリシカ、

未タ幾年ナラス、嘉吉元年六月六日、大風ノ爲メ、官廳西廊顛倒セリ、此ノ如ク毎
次顛倒スルヲ以テモ、其造營ノ粗造ナルヲ見ルヘシ、然レトモ此ヨリ三十七年
ヲ經テ、寛正六年十二月廿七日、後土御門帝ハ、猶此ニ即位式行ハレタリ、是レ官
廳即位ノ終リナリ、此時王室式微、幕府政令縱弛シ、皇居官府ノ修理モ行ハレス、
其後三年ハ、即チ應仁元年ニシテ、東西ノ合戰、京師焦土トナリ、荒廢ヲ極メ、官廳
モ全ク廢址トハナレリ、看聞御記、嘉
内記、應仁記、

勘解由使

延暦十七年七月之ヲ置ク、官吏遷替ノ時、任中ノ事狀ヲ署録シ、新官
ニ附ス、此ヲ解由ト云フ、即チ今日ノ引繼事務ナリ、此使ハ其引繼事
務ヲ勘案シテ、其當否ヲ審査スル司ナリ、太政官中ニアリテ、其東北
部ニ一區ヲ立ツ

文殿

太政官ノ文書ヲ藏スル所ナリ、勘解由使ノ南ニ在リテ相向フ、延喜
太政官式ニ曰ク、凡太政官及左右文殿、雜書、不得出關外、又曰、凡左右
文殿公文者、史一人永勾當、其預左右史生各二人、毎年二月相替トア
ル是レナリ、此文殿ハ、久シク火災ヲ免カレシカ、嘉祿二年ニ燒失セ

リ、百餘抄ニ曰ク、嘉祿二年八月廿七日、去夜文殿五間燒亡、累代文書
皆爲灰燼、經數百歲、未燒之所也トアリ、

辨官曹司

朝所ノ北ニ在リ、辨官ハ太政官ノ事務官ナルヲ以テ、官中ニ其曹司
ヲ置キ、其事務ヲ辨セシナリ、

造曹司

後堂ノ西ニ在リ、勘解由使ト相并フ、其廳堂七間二面、後堂西廳ト相
接ス、

太政官ハ、正式ノ朝政ヲ聽ク所ナルヲ以テ、別ニ辨官曹司、造曹司、勘解由使等ノ
局曹ヲ置キ、其事務管掌ノ所トセラレシナリ、

中務省

中務省ハ、奈加乃末都利古止乃都加佐ト稱ス、建禮門ノ南、太政官ノ北、
大極殿ノ西ニ在リ、陰陽寮ト東西相并フ、占地東西五十、六丈、南北四十
丈、其西ヲ中務省トシ、其東ヲ陰陽寮トス、其正門南ニ向フ、西門ハ正ニ
朝堂院ノ蒼龍樓ニ對ス、廳堂ハ南面ス、名東廳堂ノ制詳ナラス、蓋シ太政
官廳ノ如キニテ、中ニ身舎ア
リ、又左右舎アリ、大凡一棟ノ制ナル
ヘシ、今類ヲ省テ、一々之ヲ記セズ、中務省ハ侍從獻替禮儀ヲ贊相シ、詔

勅文案、宣旨納表、監修國史、名帳、戶籍、租調帳、僧尼名籍等ヲ掌ル所、中官職、大舍人寮、圖書寮、內藏寮、縫殿寮、陰陽寮、內匠寮、畫工司、內藥司、內禮司ヲ管ス、省内ニ籍御倉アリ、全國戶籍ヲ納ムル所ナリ、

侍從局

內舍人局

中務省ノ北部ニ在リ、共ニ北面ス、

主鑑局

主鈴局

監物局

陰陽寮ノ北ニ在リ、皆北ニ面ス、共ニ中務省ノ被管ナリ、

陰陽寮

中務省ノ東ニ接シ、東西二十六丈、南北二十四丈、南面ス、寮ハ陰陽五行ト筮ノ事ヲ掌レリ、中代已來、陰陽說ノ大ニ行ハレシヲ以テ、本寮ニ關スル事頗多シ、寮ニハ天文伺察ノ爲メ、伺天臺アリ、渾天圖、漏刻ヲ置キ、鐘鼓樓アリ、守護神及ヒ雜舍等アリ、鐘鼓ヲ置キ、天文博士、漏刻博士アリ、其事ヲ掌レリ、中右記ニ、大治二年二月十四日ノ火災ヲ

記セシ條ニ曰ク、火興、誓司小屋、燒陰陽寮、勘解由使廳、宮內省并圍韓神社、神祇官、八神殿、郁芳門等畢、陰陽寮樓鐘皆燒損云々、往代之器、此時滅亡、尤爲大歎者、抑陰陽寮鐘樓、古人傳來云、昔桓武天皇遷都被作渡也、其後未逢火災、至今年三百三十七年、今日燒畢、爲天下爲大歎、歎トアルハ是ナリ、

大舍人寮

侍從所厨

美福門内ノ東、廩院ノ南、雅樂寮ノ西ニ在リ、東西四十丈、南北三十五丈、之ヲ東西ニ中分シ、南ヲ侍從所厨トシ、其門南ニ向フ、北ヲ大舍人寮トナス、其門北ニ向フ、

圖書寮

圖書寮ハ不武乃都加佐ト稱ス、大歌所ノ西、大藏省ノ南、右近衛府ノ東ニ在リ、方四十丈、其門南ニ向フ、累代圖書ヲ藏スル所ナリ、日本紀略ニ、萬壽四年二月廿七日戊戌、右近衛府并圖書寮雜舍等燒亡、累代寶物爲灰燼トハ是ナリ、

內藏寮

内藏寮ハ、久良乃都加佐ト稱ス、皇居ノ乾位、掃部寮ノ東、縫殿寮ノ西ニ在リ、方四十丈、南ニ向フ、御倉不動倉アリ、累代ノ御物ヲ藏スル所ナリ、

掃部寮

掃部寮ハ、加毛利乃都加佐ト稱ス、内藏寮ノ西、大歌所ノ東ニアリ、南北四十丈、東西三十五丈、南ニ向フ、宮殿掃除ノ事ヲ掌ル所ナリ、

縫殿寮

縫殿寮ハ、奴比乃都加佐ト稱ス、皇居ノ北、朔平門外ニ在リ、東ハ梨本院、西ハ内藏寮ニ鄰ス、東西七十丈、南北四十丈、南ニ向フ、其坤隅ニ南院アリ、御物及ヒ衣裳等裁縫ノ事ヲ掌ル所ナリ、南院ハ荷前例幣ノ事ヲ掌ル、故ニ幣殿荷前殿荷前所ノ稱アリ、西宮殿、政事要略、北山抄、拾芥抄

内匠寮

内匠寮ハ、宇知乃多久美乃都加佐ト稱ス、藻壁門内ノ北、右兵衛府ノ南、造酒司ノ西ニ在リ、南北四十丈、東西三十五丈、南ニ向フ、皇宮ニ屬スル、工匠管繕ノ事ヲ掌ル所ナリ、別ニ漆室アリ、之ニ屬ス、
中務厨

御井

典藥寮ノ南、治部省ノ北、豐樂院ノ西ニアリ、方四十丈、東西ニ中分シ、北ヲ御井、南ヲ中務ノ厨トナス、類聚國史ニ曰、天長七年十月乙丑、宮城内御井町内南方半町、給中務省厨地ト、御井ハ日本紀略ニ、大同二年十一月庚子、令修造御井トアリ、元日供御ノ屠蘇ハ、官人藥生ヲ率井テ十二月晦日午時ニ、此井中ニ封漬シ、主水司ニ守ラシメ、元日寅一刻ニ井ニ就キ藥ヲ出シ、獻供スルヲ例トス、御井神、御井守屋アリ、

式部省

式部省ハ能利乃都加佐ト稱ス、朱雀門内ノ東三十丈、民部省ノ南、大舍人寮ノ西ニアリ、東西六十五丈、南北三十五丈、其西部ノ半ヲ式部省トシ、其東部ノ半ヲ式部省、主税民部、主計三寮ノ厨トナス、式部省ハ西及南北ニ門アリ、文武官名帳、考課選敘、禮儀功賞、學校策試等ノ事ヲ掌ル所ニシテ、大學寮、散位寮ヲ管セリ、故ニ選敘ノ事、考試ノ事、釋奠ノ禮等、皆此省ノ管スル所ニシテ、年代久シク行ハレタリ、然レトモ、朝野羣載、嘉保中ノ文書ヲ見レハ、正廳并南門、西門、南面築垣、毀損顛倒、破壞無實ヲ以テ、藤原仲義ニ任國ヲ給シ、修造セシムルコトヲ奏請セシテ見レ

ハ、其荒廢已ニ甚シキヲ知ルヘシ、又後廳錄曹司郡司屋雜舍等アリ、
治部省

治部省ハ、手佐牟留都加佐ト稱ス、刑部省ノ北、豐樂院福成門ノ西、右馬寮ノ東、中務厨ノ南ニアリ、方四十丈、南及東西ニ門アリ、南門ヲ正面トス、南門ノ内、東西ニ立蕃寮、諸陵寮アリ、治部省ハ、姓氏繼嗣、婚姻、祥瑞、葬祭及諸蕃ヲ掌ル所ナリ、雅樂寮、立蕃寮、諸陵寮ヲ管ス、廳舍七間、南ニ向フ、

諸陵寮

諸陵寮ハ、美佐佐岐乃都加佐ト稱ス、治部省南門ノ内ノ西ニアリ、別ニ一區域ヲ爲シ、東西十五丈、南北二十丈、其門南ニ向フ、陵祭、喪儀、凶禮、及諸陵ノ事ヲ掌ル所ナリ、承平三年六月三日燒亡セリ、

立蕃寮

立蕃寮ハ、保字之末、良字止乃都加佐ト稱ス、治部省ノ門内ニ在リ、諸陵寮ト相對ス、占地諸陵寮ニ同シ、佛寺、僧尼、名籍、蕃客ニ係ル事、在京夷狄館舍等ノ事ヲ掌ル所ナリ、

雅樂寮

雅樂寮ハ、宇太末比乃都加佐ト稱ス、大内裏ノ東南隅ニ在リ、方三十五丈、南北門アリ、廳舍及ヒ東西舍アリ、音樂ニ關スル事ヲ掌ル所ナリ、

民部省

民部省ハ、多美乃都加佐ト稱ス、太政官ノ南、式部省ノ北、朝堂院ノ東、宮内省ノ西ニアリ、東西五十六丈、南北三十五丈、四方門アリ、南ヲ正門トス、正廳、諸舍、圖帳倉等アリ、民部省ハ、天下ノ地籍ヲ掌ルヲ以テ、圖帳倉尤多シ、治承大火ニハ、幸ニ免カレシカ、其後盜其倉ヲ穿テ、文書ヲ盜ミ、圖帳ヲ紛失セシ事アリ、民部省ハ、諸國戸口、名籍、賦役、孝義、優復、蠲免、家人、奴婢、道橋、津梁、渠池、山川、藪澤、諸國田ノ事ヲ掌ル所ナリ、主計寮、主稅寮ヲ管ス、俱ニ省内ニアリ、

主計寮

主計寮ハ、加曾布流都加佐ト稱ス、民部省南門ノ内ノ東ニ在リ、調庸雜物ヲ計納シ、國用ヲ支度シ、用度ヲ勘勾スルヲ掌ル所ナリ、

主稅寮

主稅寮ハ、知加良乃都加佐ト稱ス、民部省南門内ノ西ニアリ、主計寮ト相並フ、倉廩、諸國田租、春米ヲ出納シ、及ヒ碾磑ノ事ヲ掌ル所ナリ、

民部省主計主税二寮ノ厨ハ南門ノ前式部省厨ノ北ニアリ、
廩院

廩院ハ民部省ノ東神祇官ノ西宮内省ノ南大舍人寮ノ北ニアリ、方
四十丈倉廩アリ、西宮記ニ廩院在民部省東納諸國廩米トアル
是ナリ、日本後紀ニ延暦十八年三月乙巳朔雷ノ此廩ニ震セシ事ア
リ、延喜式ニ凡諸司諸家所借廩院米一百石以上者、非有奉勅官符莫
以奉行、トアルヲ見レハ、此米ヲ以テ貸附セシテ見ルヘシ、本朝世記
ニ天慶五年東西京賑給ノ時、先例廩米ヲ支給スヘキニ、現米ナキヲ
以テ常平所ノ穀ヲ以テ之ニ給セシコトヲ記セリ、然レハ此際ニ至
テハ、已ニ衰頽セシト見エタリ、

兵部省

兵部省ハ都波毛乃乃都加佐ト稱ス、朱雀門内ノ西三十三丈ニ在リ、西
ハ彈正臺ト接シ、北ハ豐樂院ニ對ス、南北三十五丈東西ハ六十三丈ノ
半ヲ占ム、四方門アリ、南ヲ正門トス、正廳雜舍アリ、射場アリ、内外武官
名帳、考課、選叙、位記、兵士長上名帳、兵士差發、兵器儀仗、城隍、烽火等ノ事
ヲ掌ル所ナリ、兵馬司、造兵司、鼓吹司、主船司、主鷹司ノ五司ヲ管ス、

刑部省

刑部省ハ宇太倍太須都加佐ト稱ス、彈正臺ノ西治部省ノ南、右馬寮
ノ東ニアリ、方四十丈、四方門アリ、南ヲ正門トス、鞠獄、刑名、決讞、良賤名
籍、囚禁、債負等ノ事ヲ掌ル所ナリ、贓贖司、囚獄司ヲ管ス、
判事局

刑部省ノ西部ニ在リ、鞠獄斷定ノ事ヲ掌ル所ナリ、

大藏省

大藏省ハ於保久良乃都加佐ト稱ス、圖書寮ノ北、兵庫寮ノ南、采女司ノ
東ニ在リ、方四十丈、南北及ヒ東ニ門アリ、南ヲ正門トス、正廳、後廳、雜舍
等アリ、諸國ノ調及錢ヲ出納シ、金銀珠玉、銅鐵骨角、齒羽毛漆、帳幕、權衡
度量、賣買估價、諸方貢獻雜物ヲ掌ル所ナリ、

正倉院

南ハ土御門大路ヨリ、東ハ達智門通、西ハ安嘉門通ノ間、南北二町、東
西四町之ヲ大藏省ノ正倉トス、率分藏、長殿皆此ニアリ、
率分藏

東西隅ニシテ、縫殿寮ノ北大宿直寮ノ西ニアルヲ率分藏トナス、方

四十丈、拾芥抄ニ、正倉率分所大藏所納物、割十分之二爲別納、以辨官一人率其事、以主計頭大藏輔大監物等爲勾當云々トアル是ナリ、是ハ國家經濟ノ別藏ナリ、古今著聞集ニ、村上御時南殿出御ありけるに、諸司の下部の年たけたるか、南階の邊に候けるをめて、當時の政道をは世にはいかし申すと御尋ありければ、目出たく候とこそ申候に、但し主殿寮に松明の多くまかりいり、率分堂ニ草候と奏したりければ、御門大にはちおほしめしてけり、させる公事の日にもあらざりけるに、松明のいと申は、公事の夜に入るよしにて侍り、率分堂ニ草のしけるとは、諸國のみつきの参らぬよしなるへし、いみしくも申たりけるとの事也トアリ、其後ニ至テハ、授領任官ヲ以テ、進納セル者ヲモ、率分所ニ納ムルニ至レリ、兵範

長殿

率分藏ノ西ニアリ、東西四十九丈、南北四十丈、長殿其内ニアリ、十四間長殿、東十四間長殿、北長殿等アリ、天徳元年、盜大藏省長殿ヲ穿テ、鉄鉞等ヲ取リシ、日本ユトアリ、長殿ハ、蓋シ諸物ヲ納ムル所ナルヘシ、類聚國史ニ、弘仁十四年十月辛丑十四間長殿失火、勇士三十餘人

北長殿ニ登リ、濕幕ヲ以テ之ヲ撲滅シタル事アリ、又同年十一月壬申ノ夜、巡視ノ舍人カ、盜ノ火ヲ東十四間長殿ニ放ツヲ見テ、之ヲ救ヒシ事アリ、

正倉院

長殿率分藏ノ外、六町ヲ正倉院トス、其内ニ諸倉アリ、野御倉アリ、書物ヲ藏ス、納藥倉アリ、藥品ヲ藏ス、出舉倉アリ、出舉稻ヲ藏ス、別倉アリ、下殿アリ、班幣所アリ、御書所アリ、西亭アリ、其種甚多シ、蓋シ皆大藏省管理スル所ノ物品ヲ藏スル所ナリ、其大藏省ニ管スルヲ以テ、皆之ヲ大藏ト稱ス、

宮内省

宮内省ハ、美夜乃宇知乃都加佐ト稱ス、太政官ノ東大炊寮ノ西、主水司ノ南、廩院ノ北ニ在リ、方四十丈、南ヲ正門トシ、三面各門アリ、正廳七間、四面南ニ向フ、南北ニ廂アリ、南面ノ東西ニ階アリ、東廳西廳ハ、南庭ノ南ニ相對セリ、正廳ノ北ニ後廳アリ、又神院アリ、庫アリ、宮内省ハ諸國調、雜物、春米、官田、及御食産、諸方口味ノ事ヲ奏宣スル事ヲ掌リ、其職制今日ノ宮内省トハ、大ニ相違セリ、此ハ別ニ其説アリ、大膳職木工寮大炊寮主殿寮典藥寮掃部寮、正親

司内膳司造酒司鍛冶司官奴司園池司土工司采女司主水司主油司内掃司管陶司内染司ヲ管ス三代實錄ニ貞觀六年十二月十一日甲子月次祭并神今食祭天皇幸宮内省親奉祭トアリ長元七年八月九日大風ニテ顛倒シ同十九日國充ヲ以テ造營ノ事定マリ左記大治二年二月十四日醫院ノ火ノ爲メ燒亡セシコトアリ

園神

韓神

祭神園神ハ大物主神ヲ祀リ韓神ハ韓神及ヒ少彦名命ヲ祀ル古事談ニヨルニ遷都以前ノ神社ナリ造宮使之ヲ他ニ移サントス時ニ神託アリテ曰ク猶坐此處奉護帝王ト因テ宮内省中ニ鎮祭セリト云フ文德實錄ニ齊衡二年九月名神ニ列シ延喜式ニハ宮内省坐神三座並名神大月次新嘗園神社一座韓神社二座トアリ其地ハ宮内省ノ西北ノ隅ニ在リ別ニ一區域ヲ爲ス其門南ニ向フ神社ハ西ニ在テ東ニ面ス韓社北ニアリ園社南ニアリ其東庭ニ南舍北舍アリ各七間ニ三間南北ニ庇アリ園韓神ハ大内裏荒廢後ニ於テモ其祭事ハ行ハレシカ足利氏ノ時ニ至リ廢絶セリ

大膳職

大膳職ハ於保加之波天乃都加佐ト稱ス待賢門内ノ南大炊寮ノ北主水司ノ東ニアリ南北四十丈東西三十五丈大膳職ハ庶膳羞供具ノ事ヲ掌ル所正廳東西舍アリ又菓餅所雜舍倉等アリ

大膳職座神

御食津神火雷神高倍神竈神嘗神等ヲ祭ル三代實錄ニ貞觀元年正月廿七日大膳職正四位下御食津神ニ從三位ヲ授ケラレシ事アリ延喜式神名帳ニハ大膳職座神三座トアリ今皆廢ス

大炊寮

大炊寮ハ於保爲乃都加佐ト稱ス郁芳門内ノ北宮内省ノ東大膳職ノ南ニアリ南北四十丈東西三十五丈南ノ方神祇官ト相對ス諸國春米雜穀分給諸司食料ノ事ヲ掌ル所ナリ正廳諸舍及ヒ廩アリ日本紀略ニ寬弘二年五月廿三日雷大炊寮廳ニ震セシコトアリ山槐記ニヨルニ元曆ノ頃ハ荒廢セシモノ、如シ然トモ廩庫ハ猶在リシニヤ貞治四年五月廿二日大外記中原師茂大炊頭トナル時幕府ヨリ御教書ヲ下シ山城ハ粟園御稻ヲ寮庫ニ進ムヘキ事ヲ沙汰セ

シコトアリ、外記

供御院

大炊寮ノ西北隅ニアリ、西宮記ニ、供御院在大炊寮中、納饗内御厨、充供御中宮、東宮御飯、爲御生トアル是ナリ、此内ニ收供御米倉、糴御倉アリ、以テ御飯米ヲ納ム、

神社

文德實錄ニ、齊衡二年十二月丙子朔、大炊寮大八嶋竈神云々、并授從五位下、延喜式ニ、大炊寮竈神八座トアリ、貞治四年四月廿九日、神祭ヲ以テ例ノ如ク、犬面三十六、目代彈正忠延兼調進云々ノ事アレハ、此頃マテ猶行ハレシヲ見ルヘシ、外記

主殿寮

主殿寮ハ、止乃毛乃都加佐ト稱ス、達智門内ノ東、大宿直寮ノ北、茶園ノ西ニアリ、東西四十丈、南北三十五丈、供御輿輦蓋笠、綴扇帷帳湯沐、掃洒殿庭、及燈燭松柴炭燦等ヲ掌ル所ナリ、御湯屋釜殿等アリ、

主殿寮座神

延喜式ニ、主殿寮座神二十三座、東家四座、釜殿三座、松山三座、成山十三座、

典藥寮

典藥寮ハ、久須里乃都加佐ト稱ス、豐樂院立德門ノ西、造酒司ノ南、御井ノ北、左馬寮ノ東ニアリ、方四十丈、正廳、東舍、西庫アリ、典藥寮ハ、諸藥物、疾病ヲ療シ、及ヒ藥園ノ事ヲ掌ル所ナリ、其庫ニハ、諸國送ル所、授業師料物ヲ納ル、又典藥寮別所アリ、續日本後紀ニ、承和四年、宮城北園池司地卅二町、内荒廢地二町ヲ以テ、典藥寮ノ別所ニ充ツ、又同六年、東鴻臚院地二町ヲ、典藥寮御藥園ニ充テシ事アリ、乳牛院亦本寮ニ屬セリ、乳牛院ハ、供御ノ牛乳ヲ製スル所ニシテ、北野紙屋川ノ畔ニアリシナリ、

正親司

采女司

上西門内ノ北、大藏省ノ西、漆園ノ南ニアリ、方四十丈、南北ニ中分シ、其東ヲ采女司トシ、西ヲ正親司トス、正親司ハ、於保岐無太知乃都加佐ト稱ス、皇族ノ王籍ニ屬スル者ヲ掌ル所ナリ、采女司ハ、諸國進ムル所ノ采女ノ事ヲ掌ル所ナリ、

造酒司

造酒司ハ、佐希乃都加佐ト稱ス、典藥寮ノ北、内匠寮ノ東ニアリ、方四十丈、釀造ノ事ヲ掌ル所ナリ、正廳及ヒ舍アリ、

造酒司座神

三代實錄曰貞觀九年正月廿七日甲申造酒司從五位下大戸自神等并從四位上無位酒殿神從五位下文德實錄曰齊衡三年九月辛亥造酒司酒甕神從五位下大邑刀自小邑刀自等預春秋祭延喜式神名帳ニ造酒司座神六座大座四座小座二座大宮賣神社四座并大月酒殿神社二座并大新嘗酒彌豆男神酒彌豆女神云々トアル是ナリ大嘗會新嘗會ノ神酒ハ皆此ニテ釀之各其式アリ事ハ延喜式ニ詳ナリ續古事談ニ造酒司ノ大としといふつほ三十石入れ土にふかく掘すゑてわつか二尺はかり出たる中三條院御時大風ふきてかの司たふれけるに大とし小とし次刀自みなうちはりてけりトアリ

警院

西院

主水司

大膳職ノ西宮内省ノ北陰陽寮ノ東西雅院ノ南ニ在リ方四十丈南北ニ中分シ西ヲ西院トシ其東ヲ中分シ南ヲ主水司トシ北ヲ警院トス警院ハ大膳職ニ屬シ主水司ハ宮内省ニ屬セリ

彈正臺

彈正臺ハ太々須都加佐ト稱ス皇嘉門内ノ東ニ在リ兵部省ト相並フ南北三十五丈東西ハ六十五丈ノ半ヲ占ム西方ニ門アリ南ヲ正門トス正廳ハ南面ス東廳西廳アリ彈正臺ハ彈欵糾察ノ事ヲ掌ル所ナリ左近衛府

陽明門内ノ北ニアリ南左兵衛府ト相對ス西ハ職曹司梨下院北ハ内教坊ニ隣ス南北八十四丈東西三十五丈四方ニ門アリ南面ヲ正門トス近衛府ハ近衛大將ニ隸シ宮掖禁衛車駕出入前驅後殿等ノ事ヲ掌ル即チ天皇親衛ノ府ナリ正廳大中少將ノ曹司射場長倉庫等アリ左經記ニ長元七年八月十日丁卯大風除左衛門府之外五衛府應并雜舍大膳掃部等舍屋皆顛倒云々同十九日丙子午刻參内諸卿定申彼是被申云隨損破大少計給爵着本司本府允屬等可令修造歟云々トアリ此時大風ノ爲メ五衛府ノ廳曹概ネ顛倒セシモ造營ノ力ナク官爵ヲ以テ再建ヲ募リシナリ

右近衛府

般富門内ノ北ニ在リ右兵衛府ト相對ス東ハ圖書寮北ハ正親司ニ隣

ス、其他皆左近衛府ニ同シ、

左兵衛府

陽明門内ノ南ニ在リ、南北四十丈、東西三十五丈、南ハ東雅院、西ハ内豎所ニ隣ス、其門北ニ向フ、兵衛ハ兵衛ヲ檢校シ、閤門ニ分配シ、車駕出入、前後ニ分衛スル等ノ事ヲ掌ル、府ニハ、正廳、佐曹、司庫等アリ、

右兵衛府

般富門内ノ南ニ在リ、北ハ右近衛府ニ對シ、南ハ内匠寮ニ隣ス、其他皆左兵衛府ニ同シ、

兵庫寮

兵庫寮ハ、豆波毛乃乃久良乃都加佐ト稱ス、安嘉門内ノ西ニアリ、南ハ大藏省、西ハ漆室ニ隣ス、南北三十五丈、東西四十丈、兵仗ノ事ヲ掌ル所ナリ、内兵庫司ヲ管ス、廳及ヒ戎具倉アリ、

鼓吹司、舊ト西隣漆室ノ地ニ在リ、蓋シ寛平八年廢セシ後、漆室トナリシナルヘシ、鼓吹司ノ在リシ時ハ、此ニテ鼓吹司生ノ試業ヲ行ヒシ所ナリ、事ハ貞觀儀式ニアリ、

左馬寮

右馬寮

左馬寮ハ、比多里乃牟万乃都加佐ト稱シ、右馬寮ハ、美岐乃牟万乃都加佐ト稱ス、談天門内ノ南北ニ在テ相向フ、各南北八十四丈、東西三十五丈、南北ニ門アリ、左馬寮ハ南ニ面シ、右馬寮ハ北ニ面ス、共ニ馬乗ノ事ヲ掌ル所ニシテ、諸國ノ御牧ヨリ貢スル所ノ御馬ヲ此ニ養フ、所謂寮ノ御馬トハ是ナリ、神社アリ、生馬神ヲ祭ル、廳及ヒ御廄舍アリ、

一本御書所

外記廳

侍從所

内豎所

酒殿

釜殿

皇居ノ東西、雅院ノ北、職曹司ノ南、左兵衛府ノ西ニアリ、方四十丈ニシテ、南北ニ中分シ、西ノ南十五丈ヲ一本御書所、其次八丈餘ヲ侍從所、西北ノ十五丈餘ヲ外記廳トシ、東ノ南十九丈ヲ内豎所トシ、其北ヲ中分シ、西ヲ釜殿、東ヲ酒殿トス、

一本御書所

西宮記ニ曰ク、一本御書所云々、有公卿辨、別當預書手云々、世間書一本進公家云々、其本ヲ納ムル所ナリ、日本紀略ニ、康保元年十月十三日乙卯、年成一、本御書所清書二百廿二卷、遷納大藏省野御倉トアリテ、其奉進スル所ノ書籍ヲ收藏スル所ナリ、鳥羽帝久壽二年、天皇行幸ノ事アリ、平治ノ亂、藤原信賴カ後白河法皇ヲ幽シタルハ此所ナリ、

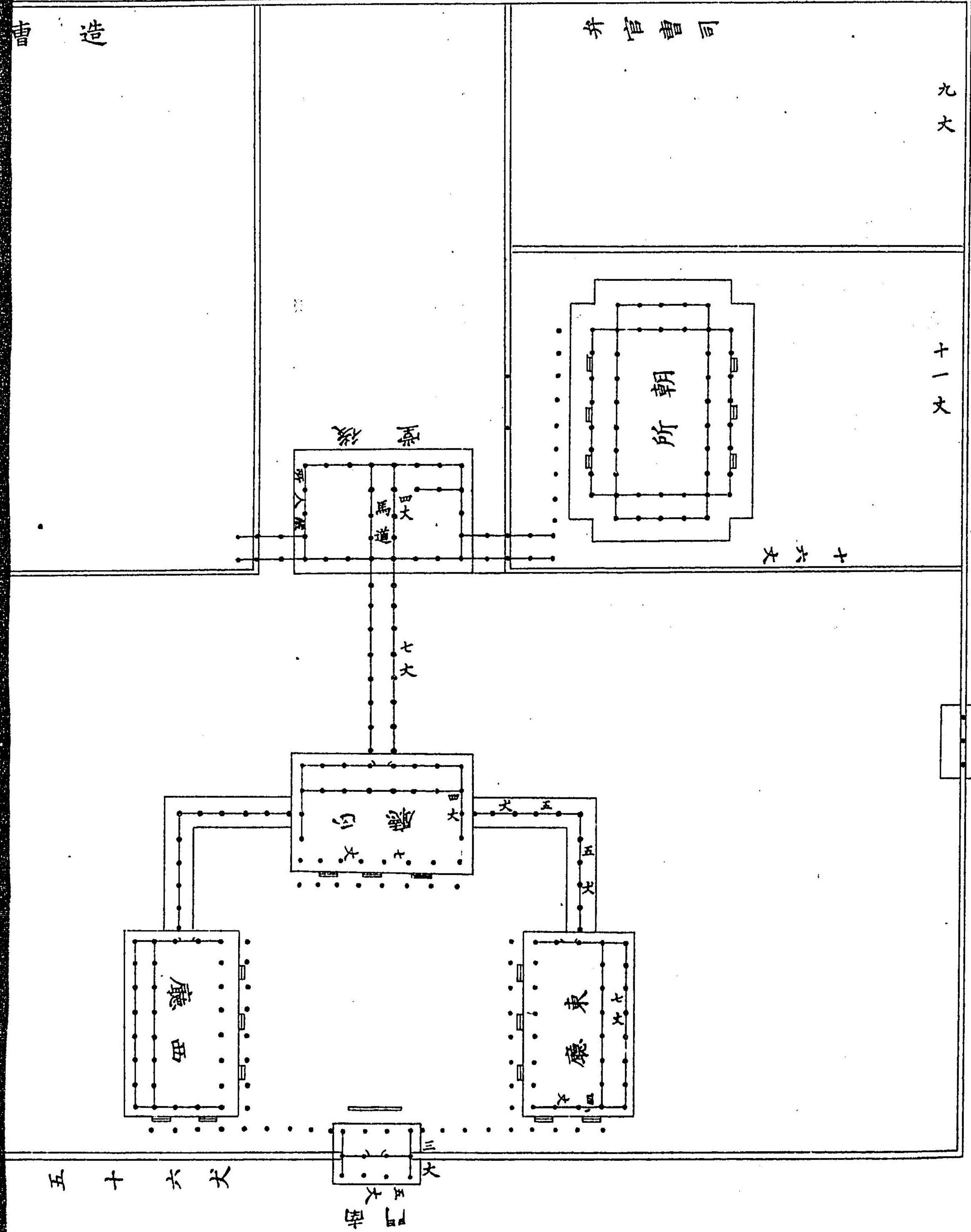
外記廳

外記ノ局曹ニテ、其職務ヲ行フ所ナリ、中古以來、大臣職ヲ怠リ、政務ノ事ハ所謂官務家ノ專業ノ如クナリシヨリ、經理ノ務ハ外記職ノ掌トル如キ勢トナレリ、故ニ外記廳ノ事ハ當時最モ重要ノ職務ニシテ、其關係最重シ、外記廳ハ或ハ外記曹司應ト曰ヒ、太政官候應ト曰ヒ、外記候應ト曰ヒ、外記局ト曰ヒ、其稱一ナラサルカ如シ、三代實錄ニ、貞觀十五年十一月壬戌朔三日甲子、太政官候應成、此廳在帝宮建春門東、大臣以下聽尋常政之處也、始置之後、積代破損、命木工寮加修理、先是、大臣以下於太政官曹司應視事、今日始就候應、公卿會飲、五位以上并侍、終日酣飲、極歡而止、以厨家及大藏省錢給預席者各有差トアリ、之ニ因テ中古

ノ記録此廳ノ記事尤モ多シ、然レトモ大抵末節ニ涉リテ、經理ノ實ヲ記セシ者ナシ、多クハ其衣紋進退ニ止マルノミ、

正廳ハ七間二面ニシテ南ニ向フ、南ニ廂アリ、廂ノ西ニ渡廊アリ、以テ結政所ニ通ス、結政所又南舎ト稱ス、東西榮十三間、北面シ正廳ト相對ス、是レ外記ノ政ヲ行フ所ニシテ、大臣以下之ニ臨ミシナリ、結政之ヲ可多奈之ト稱ス、公事根元ニ、上卿已下位次の公卿あるをりもあり、宰相の廳につく、これよりさき、卿辨少納言外記史かたなしにて事をおこなふ、續後拾遺和歌集ニ、外記廳の結政座に、古宮のはしらのいまにのこれるをまつりことについてに見てよめる、中原師光朝臣、いにしへの、ならのみやこの宮柱、このかたなしになほのこるかなトアル、是ナリ、此建物ハ平城ヨリ移シタルカ、數百年ノ久シキ猶存セシナリ、侍從所

侍從所ハ侍從ノ局曹ニテ、左右侍臣ノ居ル所、頗ル親密ノ地タリ、續日本後紀ニ曰ク、嘉祥二年閏十二月庚午、公卿以下於侍從所宴飲歌舞、殊有勅賜侍從已上内外諸大夫等祿有差、文德實錄ニ曰ク、天安二年三月丙子、有勅令相模介從五位下滋野朝臣安成、講老莊於侍從所、令文章生



大政官畧圖

四 十 丈

學生等五人預聽之三代實錄ニ曰ク貞觀十四年十一月八日甲戌通夕
 雪未止左大臣以下參議以上於侍從所賞雪會飲詔以內藏寮綿賜之各
 有差侍從五位已上亦預賞焉ト其親密恩遇ノ狀想フニ堪ヘタリ其正
 廳ハ五間三面ニシテ身舎ニハ大臣以下ノ座ヲ設ク廂アリ庇アリ又
 小舎アリ花木多シ、

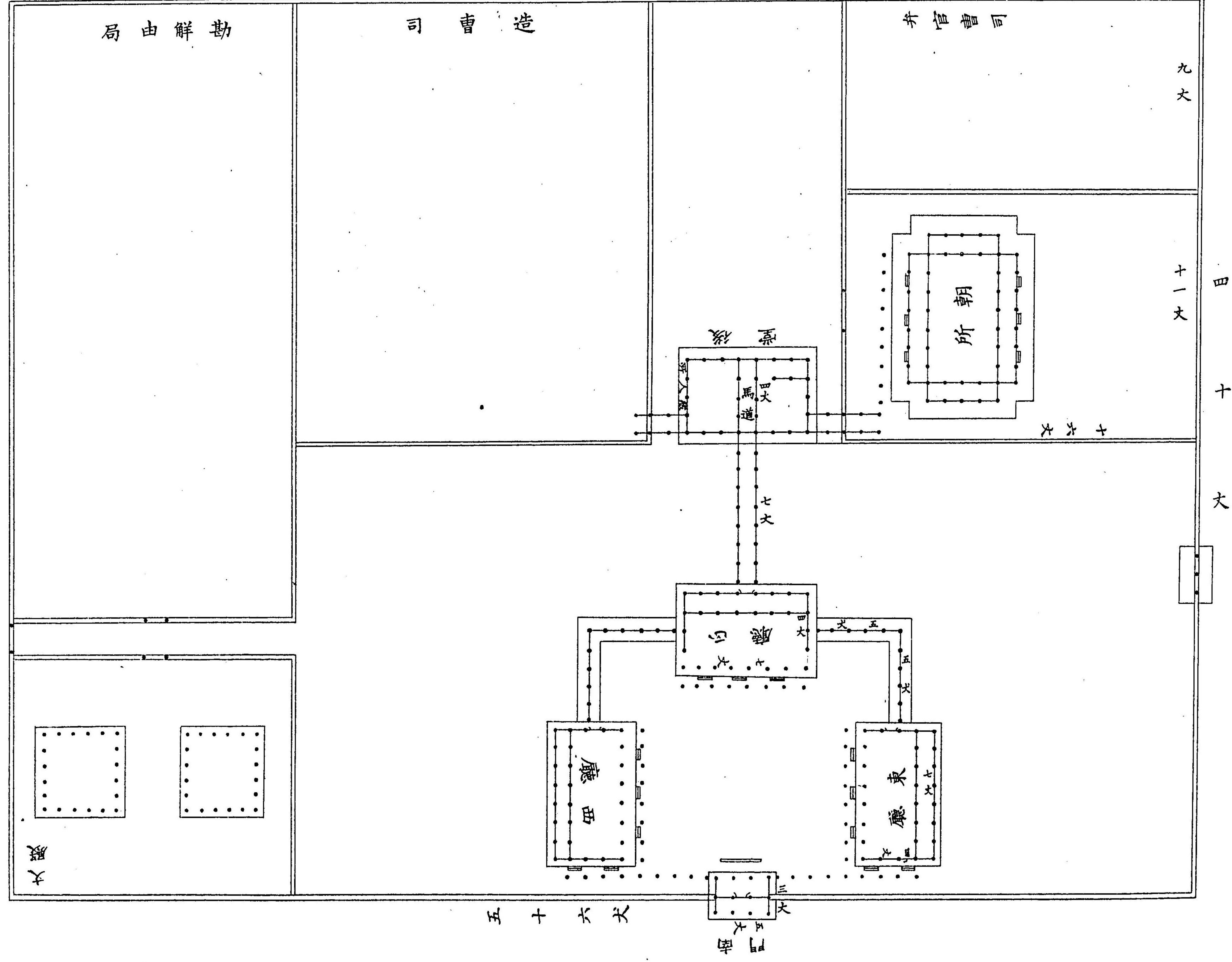
大歌所
 大内裏皇居ノ西北掃部寮ノ西圖書寮ノ東ニ在リ其占地ハ方四十丈
 ニテ其中ニ在リ大歌ノ事ヲ掌ル所ナリ、

大宿直所
 主殿寮ノ南梨本曹司ノ北ニ在リ方四十丈大宿直ノ人ノ居ル所ナリ
 源賴政ノ人しれぬ大内山の和歌ハ此所ニテ詠セリト云フ、

内教坊
 上東門内ノ北大宿直寮ノ東茶園ノ南ニアリ南北四十丈東西三十五
 丈南ニ面ス女樂ヲ教授シ舞妓ヲ養成スル所ナリ、

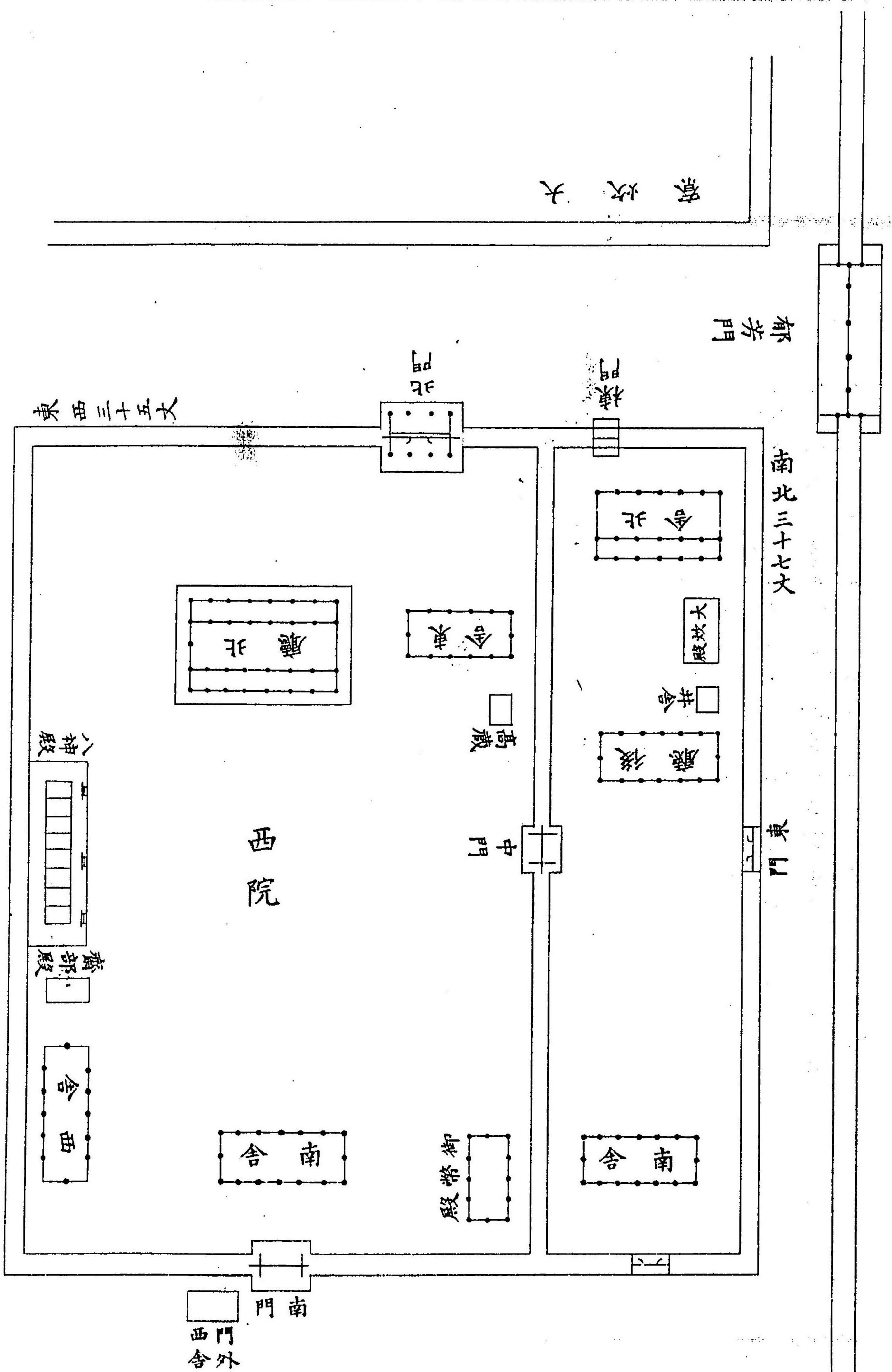
茶園
 大内裏ノ東西隅ニ在リ方一町供御ノ茶圃ナリ、

大政官畧圖

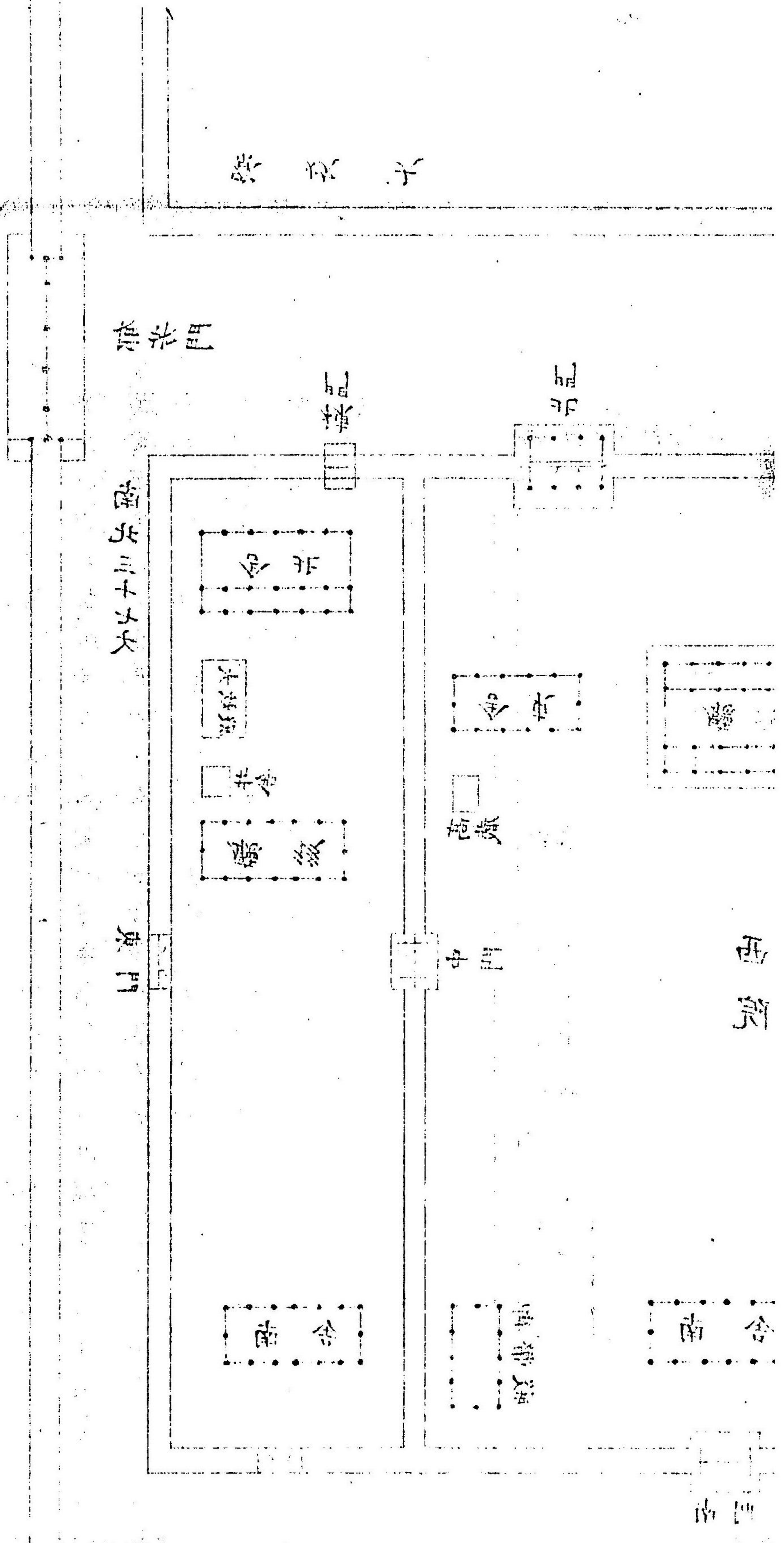


茶園
 丈南ニ面ス、女樂ヲ教授シ、舞妓ヲ養成スル所ナリ、
 大内裏ノ東西北
 大内裏ノ東西隅ニ在リ、方一町、供御ノ茶園ナリ、

神祇宮圖



轉錄官圖



漆室

舊ト鼓吹司ノ地ナリ後廢シ漆室トス

平安通志卷之七

平安通志卷之八

第一編

里内裏

湯本文彦等編

里内裏ハ、皇城ノ外ニ別ニ設クル所ノ皇居ヲ曰フ。桓武帝延暦十三年都ヲ奠メ、大内裏造營アリシヨリ、續日本紀村上帝天德四年ノ災、始テ車駕冷泉院ニ幸シ、造營成ルヲ俟テ還御ス、然レトモ未タ里内裏ノ稱アララス。圓融帝貞元元年五月ノ災、帝之ヲ桂芳坊ニ避ケ、又職曹司ニ徙リ、尋イテ太政大臣公季、公季堀川ノ第二幸シ、日本紀略、榮花物語、百鍊抄、皇年代略記居ルコト殆ト一年、是ヲ里内裏ノ始トス、明年七月内裏造營成ルニ及ヒテ還御ス、百鍊抄、日本紀略天安元年再ヒ災スルニ及ヒ、帝復堀川後院ニ遷御シ、永觀二年、遂ニ位ヲ皇太子ニ此ニ讓ル、日本紀略其後皇城ノ災アル、又ハ方忌怪異等ノ事アル、必ス權門ノ邸第ニ幸シ、短カキハ經宿長キハ數閱月乃至踰年ニ至リ、其幸スル所土御門殿、閑院殿、富小路殿、一條殿、三條京極殿、二條東洞院殿、小六條殿、堀川殿、近衛殿、大炊殿、高陽院殿等枚擧ニ違アララス、里内裏ヲ大内ニ模造セシハ、蓋シ鳥羽帝ノ土御門殿ヲ造營アリシヨリ始マリシモノ、如シ、高倉帝ノ時、閑院ヲ皇居ト爲シ、順德帝ノ時ニ及ヒ、後鳥羽上皇御製ノ指圖ヲ下シテ、

大内ニ模造セシメラレシハ、里内裏ノ内ニテ、最も廣大ニシテ、最も整備セシ構
造ナリ、其廢後更ニ富小路殿ヲ以テ皇居ト爲シ、花園帝ノ時ニ至リテ、又大内ニ
準シ造營セラレ、後醍醐帝延元元年、兵燹ニ罹リテ亡フ、是等幕府ノ造進スル所
ニシテ、其結構ノ幾分ハ大内ノ制度ニ效ヒ、規模差小ナルノミ、然ルニ其他ニ至
リテハ、巨宇大厦ト雖モ、固ヨリ普通人臣ノ私第ニ過キス、且ツ方忌災異ノ爲ニ、
一時皇居ト爲シタルモノナレハ、今之ナ里内裏ノ部ニ收メスシテ、舊跡ノ部ニ
詳ニシ、此ニハ大内ニ模造アリシ土御門、閑院、富小路、三殿ニ就キ、順次其沿革起
原ヲ叙ス。

土御門内裏

土御門内裏ハ、土御門ノ南、鳥丸ノ西ニ在リ、拾芥抄〇今上長者町ノ南、室町ノ東、鳥丸ノ西ニ同志社病院ノアル地、其舊跡
レ、鳥羽帝永久五年二月二日始テ之ヲ造ラシメ、廿六日造營事始メ、七月廿六
日、上棟式ヲ行ヒ、同十一月十日、功成ルヲ以テ、參議信通ノ三條第ヨリ之ニ遷幸
ス、殿舎ノ結構、畧ホ大内ニ準シ、紫宸殿、清涼殿等ヲ建造アリ、但シ承明門ニ擬ス
ヘキ門ハナカリシト云フ、古今著聞集、百鍊抄、國大曆、此地ハ舊ト師時中原ノ所領ナリシカ、
讚岐守顯能重任ノ功ヲ募リテ造進セリ、百鍊抄、是ヨリ先永久三年八月廿五日、
六條皇居ヨリ土御門内裏ニ遷御ス、同四年八月十七日、皇居大炊御門殿燒亡ス、

天皇右大臣土御門第ニ御セシコトアリ、百鍊抄此事ハ永久五年以前ニアリテ、已
ニ内裏ト書シタレハ、其制内裏ノ造營ニ擬セシ如クナレト、是ハ蓋シ右大臣雅
實ノ私第ニシテ、後世内裏トナリシヨリ、追記セシモノト考ヘラル、保安四年正
月廿八日、帝位ヲ皇太子ニ土御門内裏ニ讓ル、太子立ツ之ヲ崇徳帝トナス、大治四
年正月朔日、帝土御門ノ南殿ニ元服ス、百鍊抄此年後宮殿舎狹隘ナルヲ以テ、新ニ
殿舎ヲ増築シ、十一月廿七日、事始メ、中右記十二月八日、帝避忌ヲ以テ三條京極院
ニ遷ル、長秋記明年三月四日、増築功成リ、帝三條京極第ヨリ之ニ遷御ス、越中守
顯長ノ造進ニヨル、長承二年十二月、帝二條東洞院宮ニ遷ル、百鍊抄四年二月廿四
日、二條東洞院火ク、帝小六條殿ニ遷御ス、伊賀守光房遷任ノ功ヲ募リテ、土御門
内裏ヲ修造ス、四月乃チ小六條殿ヨリ之ニ遷御ス、十一月廿四日、土御門内裏
火ク、帝又小六條殿ニ遷ル、五年八月七日、土御門内裏造營事始メ、十一月二日、上
棟式ヲ行ヒ、明年十一月四日成功ス、因テ之ニ遷御ス、百鍊抄永治元年十二月、帝位
ヲ皇太子ニ土御門殿ニ讓ル、太子立ツ之ヲ近衛帝トナス、百鍊抄、皇康治二年五
月五日、鴨川内裏ヲ侵シ、北陣ヨリ清涼殿ノ東庭ニ汎濫シ、南庭ノ馳道ニ滿チ、蒼
波渺々タリ、頃者攝政忠通、鴨水ヲ決シテ近衛亭ノ庭中ニ湛フ、是ニ於テ堰堤忽
チ潰エテ、汎濫セルヲ以テナリ、台記久安四年六月廿六日、土御門内裏火ク、帝攝政

忠通近衛第二避ケ、尋テ四條東洞院ノ第二幸ス、仁平二年三月十九日土御門
内裏造營ノ日時ヲ定メ、六月二日造營雜事ヲ制シ、十月三日殿舎諸門ノ上棟式
ヲ行フ、本朝世紀、三年九月廿日新造南殿未タ全ク成ラヌシテ、大風ノ爲ニ倒ル、
後二年ヲ經テ、未タ竣功セス、是ニ於テ後白河帝、高松殿ニ踐阼シ、保元元年ニ
至リ之ヲ再造セントセシモ、高松殿ヨリ方忌金神ニ當ルヲ以テ、蓋シ之ヲ停メ
タリ、兵範記、此後土御門内裏ノ事聞エス、鳥羽帝永久五年ヨリ久安四年ニ至リ
三十年、鳥羽崇徳近衛三帝ノ皇居タリ、其間災ニ罹ルコト二回、是ニ於テ廢セラ
ル、凡ソ里内裏ヲ大内裏皇居ノ制ニ摸スルモノハ、土御門内裏ヲ以テ始トス、

閑院内裏

閑院内裏ハ、本ト閑院殿ノ地ニシテ、藤原冬嗣ノ第ナリ、二條ノ南、西洞院ノ西ニ
在リ、東西一町、南北二町、其林泉ハ巨勢金岡ノ壘ム所ナリト云フ、拾芥、弘仁中
四月、及十又傳ヘテ關白基房之ヲ領シ、高倉帝ノ時、之ヲ以テ皇居ト爲ス、光親初メ六
條帝仁安元年十一月廿日、僧正禎嘉壇所燒ク、帝因テ閑院殿ニ御ス、清原三年正
月廿九日、又攝政房ノ閑院第二行幸ノ事アリ、玉海、兵二月十九日、皇太子七條殿
ヨリ入テ侍ス、此日帝位ヲ皇太子ニ讓ル、是ヲ高倉天皇ト爲ス、三月十一日、新帝

閑院殿ヨリ遷リテ大内ニ御シ、玉海、抄廿一日大極殿ニ即位ス、皇年代、七月十
六日、閑院ニ幸シ、十一月十三日、大内ニ御ス、大嘗ヲ以テナリ、兵範記、嘉應元年正
月十三日元會諸禮畢ルヲ以テ、十三日復タ閑院ニ移御ス、抄、百自後加冠其他大
禮アル毎ニ、大内ニ幸シ、常ニ閑院ヲ以テ皇居ト爲シ、兵範記、玉海、抄承安四年十
二月朔日、京官ノ除目ヲ里内ニ行フ、愚昧、治承元年六月十二日、閑院ヲ修理スル
ヲ以テ、八條院ニ幸シ、十一月修理成リ、閑院ニ移御ス、百鍊抄、玉海、四年六月、平清
盛帝ヲ奉シテ都ヲ福原ニ遷ス、海、玉是ニ於テ人心恟々、物議紛然タリ、十一月、遂ニ
舊都ニ復シ、百鍊抄、吉還テ五條内裏ニ御ス、明月記、養和元年四月、復タ閑院ニ御
ス、百鍊抄、壽永二年六月廿五日、平宗盛帝及ヒ神器ヲ挾ミテ西海ニ奔ル、海、玉八月
廿日、高倉帝第四皇子、閑院ニ踐阼ス、皇年代、是ヲ後鳥羽帝ト爲ス、元暦元年
七月廿八日、大極殿ニ幸シ、即位ノ禮ヲ行ヒ、抄、百鍊八月、閑院ニ還御ス、玉海、山十一
月、官廳ニ幸シテ大嘗ヲ行ヒ、海、吉、畢テ還幸ス、文治元年六月廿日、地大ニ震
シ、玉、七月九日、又震シ、抄、百鍊閑院中殿西廊釜殿等顛倒シ、殿舎破壊ス、東鑑、百鍊、廿
二日、之ヲ修營ス、九月、伯耆國ニ課シテ清涼殿ヲ造ラシム、山、初メ車駕ノ閑院
殿ニ遷御シ、皇居トナルヤ、大厦タレトモ、然レトモ、其結構私第二過キス、建保ノ
新造ニ至リテ、始メテ大内皇居ノ制度ニ摸擬ス、古今著、則チ此ニ所謂清涼殿ハ、

特ニ第中ノ一舎ヲ呼ヒナセルナルヘシ治承修營ノ際ノ如キハ僅ニ傾倒ヲ起シタルニ過キスシテ清涼殿ト稱スルモノハ蓋シ修理ノ功ヲ終ヘサリシナルヘシ東鑑ニ曰ク文治三年五月十三日閑院皇居去去年七月大地震動之時破壊可被加修造之由有其沙汰而彼時顛倒殿舍同冬比被引直之處清涼殿東西六箇間役難被充參河守無沙汰而參向關東之由有傳申二品之者仍乍浴朝恩懈緩國役太無謂可有罪科之由以此次被仰參州殊恐申今度造營之時可斷微力云々トアリ十二月修理成リ帝遷御ス文治三年五月源賴朝ニ勅シテ閑院皇居ヲ修造セシム七月十三日賴朝大江廣元ヲ遣シテ之ヲ奉行セシム八月十二日帝大炊殿ニ行幸シ十一月十三日功成ル乃々閑院内裏ニ徙御シ海奉行以下造營ノ功ヲ賞セント欲ス賴朝固ク辭シテ受ケス東後二十二年土御門帝承元二年十一月廿七日閑院災ス百練抄明月記帝火ヲ避ケテ大内ニ徙御ス百練抄順德帝建曆二年二月後鳥羽上皇閑院内裏御製指圖ヲ下シ源實朝ニ勅シテ之ヲ造營セシム光親卿記實朝乃々相模國ヲ以テ造營國ト定メ七月廿七日功ヲ起シ十二月二日上棟ヲ行フ國太曆光親卿記明年建保元年二月廿七日帝三條殿ニシテ七條殿ノ第ト爲スヨリ新造皇居ニ遷幸シ造國司及行事ヲ賞シ百練抄實朝ヲ正二位ニ叙ス堀院ノ結構紫宸殿アリ清涼殿アリ宜陽殿校書殿アリ日華月華等ノ諸

門ヲ建テ軒廊對屋弓塲陣坐等大抵大内裏ノ制度ニ準シ而シテ規模差小ク便宜ニ隨テ斟酌セル所アリ光親卿記古光親卿記建曆三年二月廿七日ノ條ニ今日自三條殿遷御新造内裏也即閑院内裏去年有沙汰被仰實朝卿被造營春比被下指圖七月事始十二月上棟三個月之内忽終成風之功予自最前奉行事付公付私不可不悅中指圖今度多被摸大内但南庭猶有池池也仁山智水可以備聖覽者歟紫宸清涼宜陽校書殿日華月華等門軒廊射塲殿等大略不違或縮間數或減寸法隨便宜有斟酌不能勞記記錄之美豈以可及乎ト見え又古今著聞集ニ南殿賢聖障子は寛平御時かムれける中其銘いつの比よりかムれすなりにけるか當時は見ぬず色紙形はかりを侍りつる承元に閑院皇居焼け即ち造内裏ありけるに本は尋常の式の屋に松殿作らせ玉へりけるを此度あらためて大内裏に摸して紫宸殿清涼殿宜陽殿校書殿弓塲陣坐など宴饗の所々たてそへられける土御門の内裏のかムりけるとそきこぬし地形せはくて紫宸殿の間數をしよめられける時賢臣の影もちいさくとよめられにける中大内裏にてはこの障子をみなはなちおかれて公事の時はかり立られける御祕藏の儀にて侍りけるにや建曆に閑院にうつされて後はとりはなたるよことなしトアリ以テ其結構ノ一斑ヲ知ルニ足ル四條帝嘉禎三年六月一日地震シ閑院内裏ヲ損ス秋

ニ至テ修理ス、皇年代記、百鍊抄乃テ帥卿隆親冷泉萬里小路亭ヲ以テ皇居ト爲ス、土木ノ功遷延年ヲ踰ユ、是ニ於テ前大相國教實作事ヲ奉行シ、日ナラスシテ功ヲ終ヘ、曆仁元年二月十一日帝遷御シ、因テ修理ノ功ヲ賞ス、百鍊抄後嵯峨帝寛元元年六月又關東ニ命シ閑院内裏清涼殿ヲ改造セシム、增鏡、百鍊抄初メ四條帝幼沖好テ嬉戲ヲ爲シ御所ノ板敷ニ滑石ノ粉末ヲ塗り、近昵女房ヲシテ顛倒センメテ調笑セント欲シ、反テ自ヲ誤テ顛倒ス、御犬遮繞シテ之ヲ吠ユ、人以テ不祥ト爲ス、適禁中數、怪異アリ京間亦數見ル、幾モナクシテ帝崩ス、是ニ至テ此命アリ、五代物明年七月廿一日功成ルヲ以テ遷幸シ、中宮モ亦同シク行啓ス、百鍊抄後深草帝寶治二年八月廿二日、里内内膳屋燒亡シ、御寵神ヲ損ス、明年寶治三年三月二月一日、閑院内裏炎上、主上大相國冷泉富小路亭ニ行幸ス、經後和記、百鍊抄建保元年造營ヨリ此ニ至テ三十七年、宮殿廊屋盡ク灰燼ス、増鏡ニ寶治二年十月二十二日ニ宇治ニ御幸シ、二十三日還御アリシコトヲ記シ曰ク、此御するのほとに、二條油小路に火出來テ、閑院殿のつかきの内なれば、内膳の屋もやけて、神代よりつたはれる御かまもやけそとなはれける、中寶治三年二月一日の夜、常より九重の宮の内人すくなにて、大かた世もしつかなるに、子の時はかりに、閑院殿の二條おもての對より、火いてきて、棟へもぬいつるほとに、えはしめて見つけた

中承元に燒にし後は、久しくこの四十餘年はなかりつるに、去年の冬御かまやけそんして、又かく打つゝけぬるは、いとあさましうおほすト見エタリ、四月四日幕府使ヲ遣シ里内造營ノ雜事ヲ奏ス、明年建長二年七月十三日造營日時ヲ定メ、百鍊抄廿四日事始國太三年正月十日上棟ス、百鍊抄此役幕府天下ノ諸大名及ヒ家人等ニ命シ、殿舎廊屋牆垣橋梁、其分ニ隨ヒ功ヲ分テ役ニ就カシメ、其用途モ亦天下神供佛領ノ田ヲ除クノ外、盡ク所課ヲ加徴セシメ、乃テ深澤山城前司俊平、中山城前司盛時等ヲ遣シ、奉行ト爲シ、專ラ工ヲ董サシム、東東鑑ニ建長二年三月一日、丁造閑院殿雜掌事爲被進覽京都云、本役人云、始被付分、今日悉被注、細之深澤山城前司俊平、中山城前司盛時等爲奉行云々、其目錄様

霜臺東

備後前司

掃部寮戸尾

綱嶋左衛門入道

閑院殿造營雜掌

紫宸殿

相模守

清涼殿

甲斐前司

仁壽殿

修理權大夫跡

宜陽殿
 校書殿
 春興殿
 五節所
 小御所
 鈞殿
 記錄所
 陣坐并東屋
 軒廊
 弓塲殿
 北對
 北御臺盤所 被用御
 西對
 西二對
 御厨子所 自出納小
舍人坐
 御臺盤所

陸奥守
 筑後入道跡
 遠江入道跡
 秋田城介
 足利左馬頭入道
 前右馬權頭
 隱岐入道跡
 大友豐前々司跡
 佐々木三郎兵衛入道跡
 近藤中務丞跡
 葛西壹岐入道跡
 足助太郎
 千葉介跡
 宇都宮入道
 中條出羽前司跡
 小栗次郎

藏人所
 釜殿 付並屋
 日華門
 月華門
 東四足左衛門陣
 西四足右衛門陣
 東棟門左兵衛陣
 西棟門右兵衛陣
 縫殿陣土平門
 押小路面土平門
 油小路面土平門
 行事所屋 五間二面
 築地八十八本 垣形十八本
 重築地百九十二本 垣形十七本
 二條面二十本
 油小路面三十一本

攝津前司 字佐美也
 土屋入道跡
 近江入道跡
 矢野和泉前司跡
 佐原遠江前司跡
 足立左衛門尉跡
 草野大夫跡
 大宰少貳
 但馬次郎左衛門尉跡
 內藤左衛門尉跡
 伊賀式部入道

押小路面二十本

二條面西洞院東廿本

二條面油小路西十六本

同 北十六本

自二條北油小路面廿本

自押小路面自西洞院西十八本

自押小路南自油小路西十一本

自二條北西洞院面東廿本

河堰二百三十八丈

西緒

東緒

橋河堰 二所

裏築地 十一本

前太政大臣因テ之ヲ監督シ、造作舖設等一ニ先規ニ准シ、大内ノ制ニ摸ス、經後
解記六月廿七日功ヲ竣フ、帝乃チ富小路亭ヨリ新造内裏ニ遷幸シ、經後
解記因テ造内裏ノ功ヲ賞シ、將軍藤原賴嗣ヲ從三位ニ、執權平時賴ヲ正五位下ニ叙

シ、其他各差アリ、東正元元年五月廿二日賊火ヲ里内ニ放ツ、五代帝王物語ニ、同
元正元 五月廿二日、閑院又回祿あり、最勝講の御裝束用途を行事官が下人あまた
私用して、日は近くなる、いかにもすへきやうなくて、火をつけたる、末代の作法
力なしと申しながら不思議の事也、其下手人ハ禁獄せられたりしかとも、いふ
かひなき事にてありしと見ユ、王室ノ式微、政道ノ壞亂、亦甚シト謂フヘシ、變
忽卒ニ起リ、主上腰輿ニ駕シ、三條坊門ノ第二行幸シ、遂ニ萬里小路殿ニ遷御ス、
抄百 建長三年、造營ヨリ僅ニ九年ニシテ放火ノ爲メ焦土ニ歸セリ、初メ高倉帝
ノ此ヲ以テ皇居ト定メラレシヨリ、九代九十一年ニ及ヒ、回祿ノ災ニ罹ルモノ
三回、是ニ至テ復タ造營セス、

富小路内裏

富小路内裏ハ、富小路ノ東二條ノ北方一町ニ在リ、給二條富小路殿ト稱ス、其
冷泉ノ南ニ在ルヲ以テ又冷泉富小路殿トモ稱ス、川下同、大同、所同、其同、址同、ナリ同、
初メ後深草帝建長元年二月朔、閑院内裏災ス、乃チ此殿ヲ以テ假ニ皇居ト爲ス、
是富小路ヲ皇居ト爲スノ始ナリ、此時前太政大臣西園寺實氏ノ私第タリ、冷同、泉同、
抄五代帝王物語ニ、閑院は寶治三年二月一日、炎上ありしかば、富小路殿冷同、
内裏になる、この御所は、小川の右衛門督入道親兼の家にてありしを、北山大相

國西園寺の殿となして、今皇居とはなれりトアリ、三年六月廿七日、閑院内裏造營成ルニ及ヒテ遷御ス、百鍊抄、國太曆其後嵯峨上皇屢祇園會方避等ニ因リテ此路殿ニ移御シ、數閱月、皇太弟禪ヲ受ケテ亦此殿ニ御シ、百鍊抄、皇代尋テ五條大宮ニ徙御ス、百鍊抄此後大覺寺ノ流、後宇多帝以下ハ、多ク二條高倉殿ニ御シ、持明院ノ流、伏見帝以下皇太子ハ常ニ此富小路殿ニ御シ、或ハ以テ皇居ト爲ス、辨鏡、皇代蓋シ當時西園寺家外戚ノ權ヲ藉リ、且ツ深ク北條氏ニ結托シ、以テ持明院ノ流ヲ擁シ、而シテ此殿ハ即チ西園寺家ノ所領ナリシヲ以テナリ、辨鏡、花園帝ノ時ニ至リテ、始テ富小路殿ヲ内裏ト定メ、乃チ正和二年六月二日造營數地ヲ評定シ、十一月廿四日造營事始メアリ、國太曆三年閏三月四日、石清水神人神與ヲ奉シ富小路殿ヲ犯スヲ以テ、帝之ヲ常盤井殿ニ避ク、歷代四年二月十日、上棟ヲ行ヒ、文保元年四月十八日、新造内裏造營功成ルヲ以テ遷幸ス、國太曆是時ニ當リテ、大内裏罹災十數回ニ及ヒ、承久以後僅ニ荒跡ヲ存スルノミ、而シテ正元ニ閑院内裏焼亡セシヨリ、常ニ權家ノ私第ヲ以テ皇居ニ充ツ、實ニ龜山帝ヨリ六代五十八年ナリ、國太曆、百鍊抄、皇代是ニ至テ幕府之ヲ造進ス、辨鏡其結構閑院内裏ノ時ノ如ク、一ニ大内裏ノ制ニ從フ、辨鏡、徒然草徒然草ニ、今の内裏つくり出されて、

有職の人人に見せられけるに、いつくも難なしとして、ずてに遷幸の日にちかく成けるに、玄輝門院後深草帝御らんして、閑院殿のくしかたの穴はまるくふちもなくてそありしと仰せられける、いみしかりけり、これはぬふのいりて木にて縁をしたりければ、あやまりにて、なほされにけりトアリ、是ヨリ先キ、後照念院關白冬平竹臺ノ吳竹ヲ獻ス、新拾遺、和歌集其後醍醐帝又仁壽殿ノ北面ノ壺ニ松ヲ植エ、常ニ蹴鞠ヲ翫ハル、遊庭抄元亨元年八月十五日、安福殿釣殿ニ御シテ月ヲ觀侍臣ニ命シテ歌ヲ奉ラシム、辨鏡十二月、太上法皇後宇多帝萬機ヲ帝ニ委ス、皇代帝初テ記録所ニ出御シテ訴訟ヲ聽ク、神皇正統記、太平記元弘元年八月廿四日、帝北條高時ヲ滅サント謀リ、事顯ハレ潜ニ南都ニ幸シ、笠置ニ入ル、是ニ於テ皇太子量仁親王、高時ノ爲メニ立テラレテ、紀傳、南方内裏ニ遷幸アリ、辨鏡尋テ土御門東洞院、皇居ニ徙御ス、爲秀是ヲ光嚴帝ト爲ス、明年三月、後醍醐帝隱岐ニ遷サル、南方紀三年四月、高時誅ニ伏ス、六月、隱岐ヨリ還幸シ、先東寺ニ入り、尋テ富小路内裏ニ還御ス、方入らせ給ひて、事ともきためらる、中略こたみ内裏へ入らせ給ふへき儀、重降などにてあるへけれとも、壺の箱を御身にそへられは、只遠き行幸の還御の儀式にてあるへきよし定めらる、中略六月六日、東寺より常の行幸のさまにて、内

裏へそ入らせたまひけり、めてたしとも言の葉なし、中界先陣は二條富小路の内裏につかせ給ひぬれと、後陣の兵は猶東寺の門までつよきむかへたるとそきこほしつアリ、其後延元元年正月十日、足利尊氏闕ヲ犯シ、帝叡山ニ幸ス、細川定禪入リテ火ヲ京師ニ放ツ、是ニ於テ富小路内裏遂ニ兵燹ニ罹リ燒亡ス、南方紀傳文保元年、造營ヨリ此ニ至リテ、纔ニ二十年、一朝烏有ニ歸シ、其後帝吉野ノ行宮ニ幸シ、尊氏光明院ヲ擁立シ、東洞院土御門殿ヲ以テ皇居ト爲シ、富小路内裏ハ復營セス、神皇正統記、太平記、

平安京沿革

平安京ハ延暦十二年正月其地ヲ相シ、同三月勅シテ宮城ヲ造營セラレ、同十五年大極殿成リ、同帝ノ晩年ニ至リ、全部落成セリ、其造營全圖年表等ハ、各々其章ニ詳ナリ、夫レ平安京ハ、桓武帝ノ最モ叡念ヲ盡シテ造營アリシ、萬世不遷ノ帝京ナレハ、其規模ノ壯大ナル、制度ノ周密ナル、以テ加フルナク、開國以來、前後未曾有ノ名都タリ、其後數代ハ、王政隆盛ノ時ナレハ、政令能ク行ハレ、修理怠ナク、時々火災アルモ、速ニ修造アリ、別宮、甲邸、神社、佛閣、益壯麗ヲ競ヒ、人烟富庶、建築輪奐タリ、然レトモ、貞觀八年五月、京中空閑ノ地ヲ民ニ賜ヒ、耕種以テ永業トナスコト、三代實錄ニ見エタリ、已ニ空閑ト云ヒ、又永業トアレハ、此時ニ於テ已ニ京中空閑無人ノ地アリテ、永業田ト爲スニ至レルヲ見ルヘシ、延喜式ニ、凡京中不聽營水田、但大小路邊及卑濕之地、聽植水葱、芹、蓮之類、不得因此廣溝、迫路、又凡京中閑地者、不論貧富、量力播種、時營作、並加勸課、令盡地利等ノ條アリ、此等ハ多ク右京ノ地ヲ指セシモノナルカ如シ、之ヲ要スルニ、右京ハ其規畫ノミニシテ、全ク人烟稠密ノ市街トハ成ラサリシナルヘシ、京都ノ古事、大抵左京ノ地ニ係リ、右京ニ屬スルモノハ極テ稀ナルヲ見テモ、證スヘキナリ、天德以來、皇宮屢災シ、乘輿毎ニ別宮又ハ外家ニ御ス、其地ハ概ネ左京ニ在テ、三條以北ニ多シ、故ナ

以テ皇族大臣時ノ有力者争ヒテ東北ニ其居ヲ營ミタリ其地勢ヨリスルモ西南ハ卑濕ニシテ東北ハ高爽鴨川ノ水流ニ接シ東山ノ翠光ヲ挹シ固ヨリ幾籙ノ勝レル者アルヲ以テ漸ク其勢ヲ偏重シ右京ハ自然ニ索莫ノ郷トナレルナルヘシ古書中ニツキ其實況ヲ記セシ者ヲ求ムルニ慶滋保胤カ池亭記ヲ最モ詳ナリトス因テ其要ヲ撮シ此ニ掲ク

予二十餘年以來歴見東西二京西京人家漸稀殆幾幽墟矣人者有去無來屋者有壞無造其無處移徙無憚賤貧者是居或樂幽隱已命當入山歸田者不去若自蓄財貨有心奔營者雖一日不得住之往年有一東園華堂朱戶竹樹泉石誠是象外之勝地也主人有事左轉屋舍有火自燒其門客之居近地者數十家相率而去其後主人雖歸而不重脩子孫雖多而不永住荆棘鎖門狐狸安穴夫如此者天之亡西京非人之罪明也東京四條以北乾良二方人々無貴賤多所羣聚也高家比門連堂小屋隔壁接簷東隣有火災西隣不免餘炎南宅有盜賊北宅難避流矢南院貧北院富富者未必有德貧者亦猶有耻又近勢家容微身者屋雖破不得葺垣雖壞不得築有樂不能大開口而笑有哀不能高揚聲而哭進退有懼心神不安譬猶鳥雀之近鷹鷂矣何況轉廣門戶初置第宅小屋相并小人相訴者多矣宛如子孫去父母之國仙官謫人世之塵其尤甚者或至以挾

上滅一家愚民或卜東河之畔若遇大水與魚鼈爲伍或住北野之中若有苦旱雖渴乏無水彼兩京之中無空閑之地歟何其人心之強甚乎且夫河邊野外非雷比屋比戶兼復爲田爲畠老圃永得地以開畝老農便堰河以溉田比年有水流溢隄絕防河之官昨日稱其功今日任其破洛陽城人殆可爲魚歟竊見格文鴨河西唯免耕崇親院田自餘皆悉禁斷以有水害也加以東河北野四郊之二也天子迎時之場行幸之地也有人縱欲居欲耕有司何不禁不制乎若謂庶人之遊戲者夏天納涼之客已無漁小鮎之涯秋風遊獵之士又無臂小鷹之野夫京外時爭住京内日陵遲彼坊城南面荒蕪眇々秀麥離々去膏腴就穉确是天之令然歟將人之自狂歟中略天元五載孟冬十月家主保胤自作自書本朝文粹此記ハ圓融帝天元五年ノ作ニシテ平安建都ヲ距ルコト百八十九年其勢已ニ此ノ如シ此後藤原氏大政ヲ擅ニシ倭佛營寺之ノ事トシ御堂關白ノ法成寺ヲ營スル宇治關白ノ法性寺ヲ建ツル公卿ヲ使役シ國費ヲ浪費シ甚シキハ宮殿ノ基礎ヲ毀テテ以テ之ヲ用ユルニ至ル白河鳥羽ノ院政ヲ行フヤ效テ益甚シク其六勝寺ヲ營スル國力之カ爲ニ竭キ鳥羽殿ヲ創スル宮闕灰燼ニ委シテ顧ミス故ヲ以テ佛寺離宮ハ益其美ヲ増スト雖モ平安京ハ愈荒廢ニ就ケリ此時ニ當テハ白川最モ繁華ノ區トナリ京白川ト併稱セリ治承大火ニハ左京殆ト

焦土トナリ、繼クニ福原遷都ヲ以テス、宮殿ヲ撤シ、屋舎ヲ毀テ、淀川ヨリ浪華ニ運シ、之ヲ兵庫ニ致ス、幾千萬ヲ知ラス、其跡ハ皆荒墟トナリシカ、未タ幾月ナラス、還幸アリト雖モ、其荒殘已ニ甚シ、此時京職ニ勅シ、京都戸口ヲ注セシメ、又檢非違使ニ命シ、京中民屋ヲ毀テ、賣ルコトヲ禁セシコトアリ、然レトモ軍國多事、人心洶擾、何ヲ以テ能ク爲ス所アラシヤ、初メ平氏專權、居テ六波羅ニ營シ、殆ト鴨東ノ地ヲ專ラニス、後白河法皇法住寺ヲ營シ、壯觀ヲ極ム、續テ源賴朝池殿ニ居リ、承久以後、北條氏兩六波羅ヲ建ツ、榮花物語、日蓮抄、源平盛衰記、方丈記、玉海、東鑑等參取、故ヲ以テ東山ノ下、鴨水ノ東ハ、能ク其繁華ヲ維持シタリ、南北分爭、京師寧歲ナク、足利義滿室町幕府ヲ室町頭ニ營スルニ及ヒ、幕下ノ諸僚、各其近地ニツキ、第宅ヲ營スルヲ以テ、東北ノ隅、益繁華ノ地トナレリ、應仁以來、九陌戰塵ニ暗ク、御溝碧血ヲ漂ス、京師荒殘、復タ之ヲ何トカ謂ハン事ハ、第三編ニ詳ナリ、永祿ノ季年、織田公京師ニ入ルニ及ヒ、首トシテ皇居ヲ營シ、且ツ京都ヲ再造シ、以テ離散ヲ招徠ス、其市中ニ令スル狀ニ曰ク、

- 一如毎々之可令遷住之事、
- 一陣取免除之事、
- 一非分課役不可申掛事

一地子錢免除之事、

但シ追テ申出候條、其以前何方ヘモ不可能納所事

一私宅造畢之間、人足免除之事

文龜四年彈正忠信長 京都市古文書

此文書ヲ見テモ、其心ヲ撫字綏懷ニ盡セシヲ見ルヘシ、是ニ於テ京都ハ始テ恢復ノ機運ニ向ヘリ、抑此數百年來ノ變遷、一々記スルヲ得ヘカラサルモ、概シテ之ヲ謂ヘハ、單ニ荒廢ト稱スヘク、唯舊來ノ規制年々ニ殘破セシノミニテ、舊ヲ改メ新ヲ起シタル事ハ、アラサリシナリ、豐臣氏織田氏ニ代ルニ及ヒ、更ニ京都ヲ完聚シ、市街ヲ整頓セント欲シ、所司代前田玄以ニ命シ、其事ヲ司ラシメ、市中佛寺ヲ京極ノ東面ニ移シ、鴨川ヲ背ニシ、上ハ鞍馬口ヨリ、下ハ五條ニ至リ、以テ京都ノ東ヲ限リ、又大ニ外郭ヲ築ク、北ハ紫竹鷹峯ヨリ、南ハ九條ニ至リ、東ハ鴨川ニ臨ミ、北ハ北野ヲ包ネ、延袤七千六百六十三丈、以テ浴ノ内外ヲ別テ、大ニ京都ノ規模ヲ弘大ニセリ、皇居ヲ造リ、聚樂邸ヲ營シ、大佛殿ヲ建テ、天下ノ匠工役夫ヲ招集シ、諸大名皆來リテ役ヲ助ケ、四方廣集、京都益繁華ヲ成セリ、豐臣氏ノ初メ、市邑蕭條、上京ニ五十餘町、下京ニ五十餘町、其他合シテ百數十町ニ過キサリシナリ、豐臣氏富庶雄大ノ力ヲ以テ、其完聚ヲ務メ、德川氏之ヲ承ケ、板倉勝重

父子ニ任スルニ京師ノ政ヲ以テシ、大ニ其保護ノ術ヲ行ヒ、下京ハ兩本願寺ノ爲メニ繁華ヲ増シ、慶長ノ末、元和ノ初、ニ及ヒテハ、東ハ鴨川寺町ヨリ、西ハ大宮北ハ上立賣、南ハ七條ニ及ヒ、市街交通、人烟稠密ノ地トナレリ。太閤記、大佛造營、大土居明細圖、慶長、元和、京師、元、和、京、師、圖、取、其、後、昇、平、百、年、休、養、生、息、戶、口、增、加、出、町、口、南、ノ、土、居、ヲ、毀、テ、土、手、町、ヲ、立、テ、頂、妙、寺、開、名、寺、等、ヲ、二、條、ノ、東、ニ、移、シ、新、市、街、ヲ、立、テ、祇、園、新、地、六、條、新、地、七、條、新、地、祇、園、町、等、ヲ、開、キ、東、山、ノ、下、繁、華、ノ、地、ト、ナ、リ、西、北、ハ、大、宮、ヨ、リ、北、野、ニ、接、シ、上、立、賣、ヨ、リ、鞍、馬、口、廬、山、寺、通、ニ、接、シ、全、ク、市、街、ト、ナ、レ、リ、以、テ、德、川、氏、ノ、時、ヲ、經、過、シ、王、政、維、新、ノ、際、ニ、及、ヒ、幕、府、倒、レ、テ、所、司、代、其、他、幕、府、ノ、官、衙、廢、シ、二、條、城、近、傍、俄、ニ、衰、殘、ヲ、現、ハ、シ、車、駕、東、幸、公、卿、東、京、ニ、移、リ、九、門、內、其、觀、ヲ、改、メ、タ、リ、明、治、十、年、京、阪、鐵、道、通、シ、同、廿、三、年、疏、水、工、事、成、リ、此、ヨ、リ、交、通、大、ニ、開、ケ、益、京、都、ノ、繁、華、ヲ、加、ヘ、タ、リ、其、市、坊、道、路、水、理、肆、店、ノ、規、制、ハ、建、都、以、來、各、其、法、ア、リ、延、喜、式、ニ、詳、カ、ナ、リ、其、後、王、政、衰、頽、ニ、從、ヒ、一、時、廢、絶、セ、シ、カ、德、川、氏、ニ、及、ヒ、稍、規、則、ヲ、設、ケ、維、新、後、法、規、秩、然、加、フ、ル、ニ、道、路、ノ、修、營、地、方、稅、ニ、資、セ、シ、ヨ、リ、砥、平、ノ、廣、街、并、然、交、通、殆、ト、延、曆、ノ、舊、制、ヲ、今、日、ニ、見、ル、ニ、至、レ、リ、其、戶、口、增、減、ハ、第、二、編、ニ、在、リ、

京都古圖

京都古圖ハ、清竊眼抄載スル所ノ圖、拾芥抄ノ圖、神泉苑所傳圖等數種アリ、此他裏松光世大内裏圖考證引用スル所ノ圖、藤原貞幹六種圖考及好古小錄記スル所ノ舊圖ノ中、神泉苑所傳圖、京兆圖、東寺所傳圖、南都一乘院所傳圖、南都所傳圖、醍醐理觀院所傳圖、妙法院所傳圖等數種アリ、然レトモ皆維新前後、散逸シテ原圖ヲ見ルニ由ナシ、世間在ル所ノモノハ、森謹齋製スル所ノ圖數種、秋里湘夕京ノ水ノ附圖、藤原廣前ノ大内裏圖考證附圖ノ類ニ過キス、其間精疎得失アリト雖トモ、概チ古書ニヨリ舊記ニ徵シ、其所在ヲ認メテ、之ヲ配當セシモノニ過キス、因テ今清竊眼抄拾芥抄神泉苑所傳ノ三圖ヲ寫シ之ヲ附シ、其他見聞スル所ノ京都古圖ハ、其目ヲ掲ケ、其作者年度所在等ノ知ルヘキ者ハ之ヲ記シ、以テ他日參案ノ資ニ供セントス、

清竊眼抄所載安元大火圖

拾芥抄所載東西京圖

異本拾芥抄所載圖

神泉苑所傳左右京圖

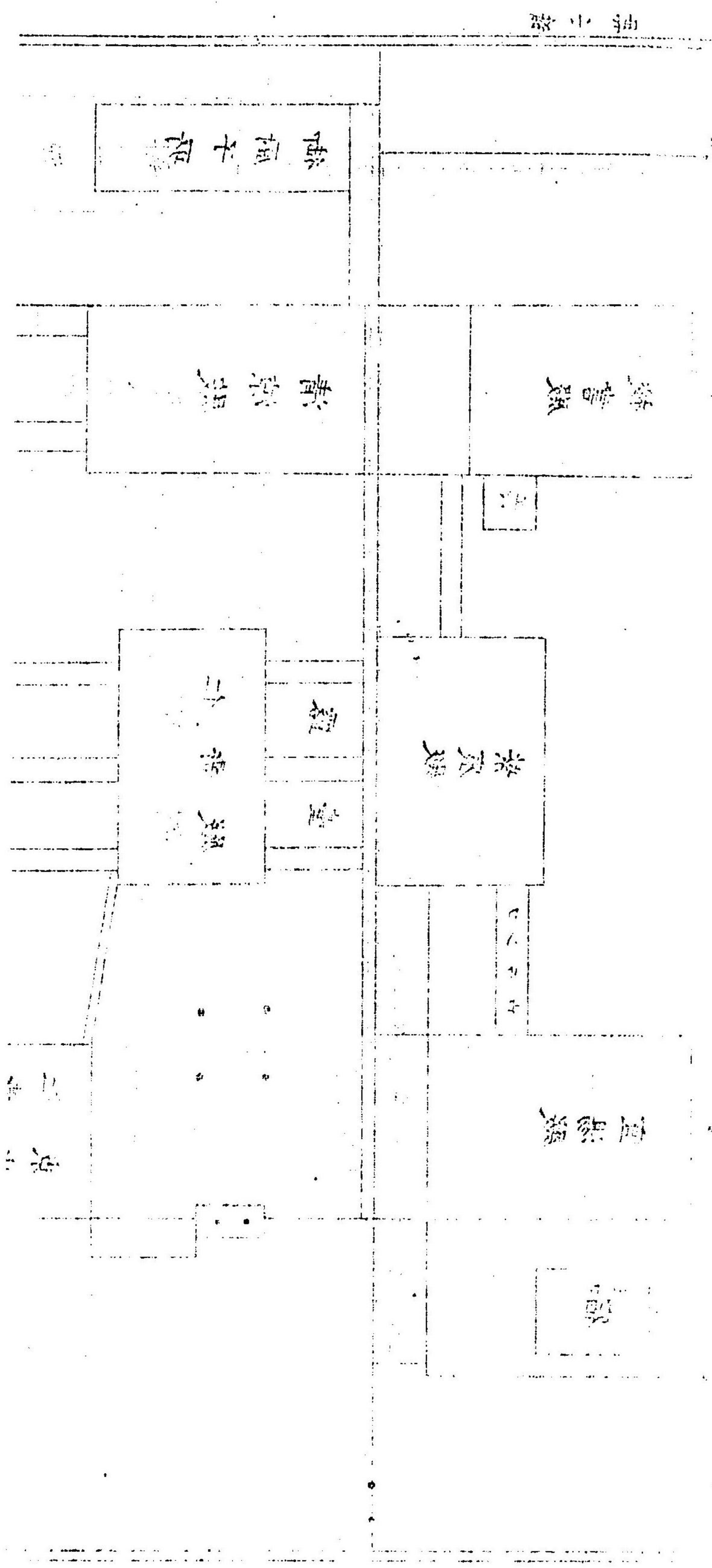
以上寫シテ之ヲ掲ク

東寺所傳京圖
 南都二條法印所傳圖
 京兆圖
 妙法院所傳京圖
 平安京全圖
 中昔京都內外圖
 花洛往古圖
 中昔京圖
 應仁前京都圖
 應仁後京都圖
 京白川圖
 慶長年間京圖
 伊藤東峯平安京全圖
 元和年間京圖
 寬永分間京都大圖

或云、原圖今御物トナレ、東寺ニ
 寫本アリシカ、今所在詳ナラス、
 在原圖所
 在原圖所
 在原圖所
 詳寫本アリ、
 藤原廣前製スル所大内裏圖考
 證ノ附圖、板本ナリテ行ハル、
 者及ヒ考説
 記入ナキモ、
 藤原廣前製スル所七圖ノ
 一、今寫本ナリテ存ス、
 全上
 全上
 全上
 全上
 全上
 全上
 東嶽製圖、今其家ニ傳フ、蓋シ制
 度通ノ爲ニ製セシ者ナルヘシ、
 板本、大澤敬之所有、
 大畧、長圖ニ同シ、
 力一丈餘ノ大圖ニシテ、一々間數ヲ
 所司代ノ手ニテ製シテ、一々間數ヲ
 殿寮出候所ニテアリ、
 今宮内省主

此他寬永以來ノ圖ハ、數種アレト之ヲ略ス、

平安通志卷之八



西館大額
三十一

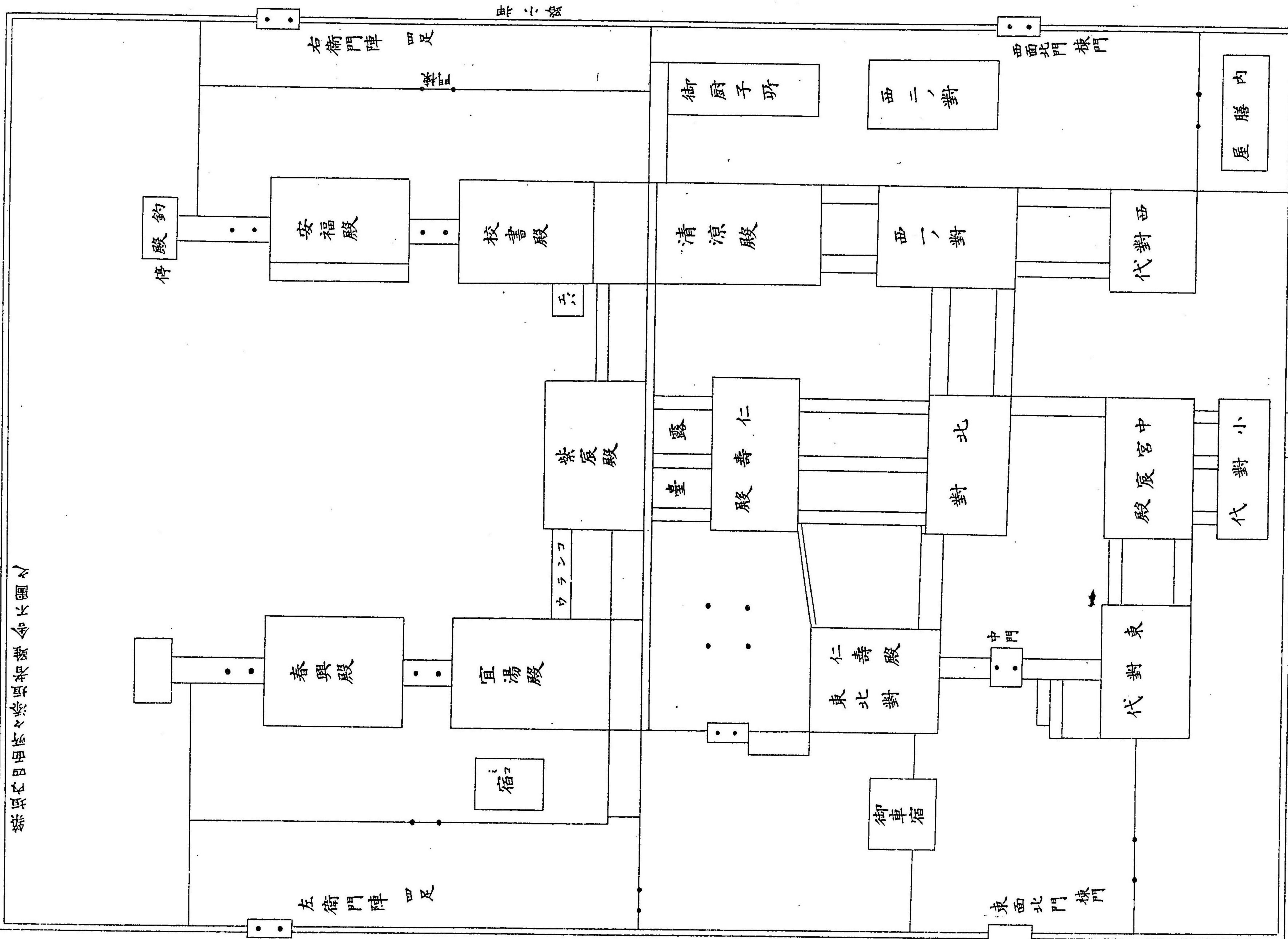
開院内裏圖

西考證載スル所、
宝泉院古圖

四十丈

門平棟

八十四丈



西國院大路
廿二丈

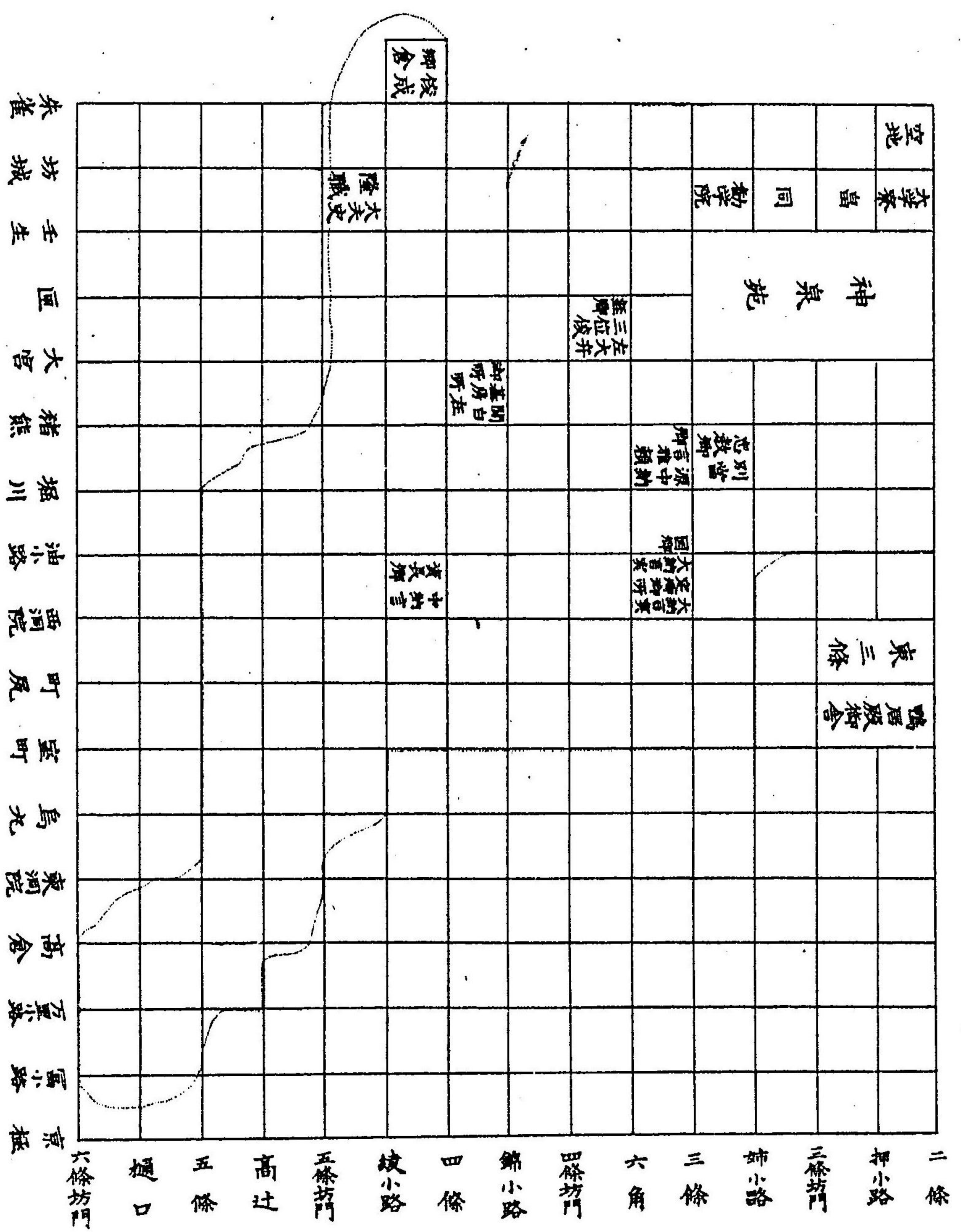
川邊 廿二丈

開院内裏圖

四十丈

治承三年四月廿八日焼亡圖

清經眼抄所載番〇番中記入ノ方向
ハ皆原番ニ依ル以下皆之ニ準ス



平安通志

四

110
2
60

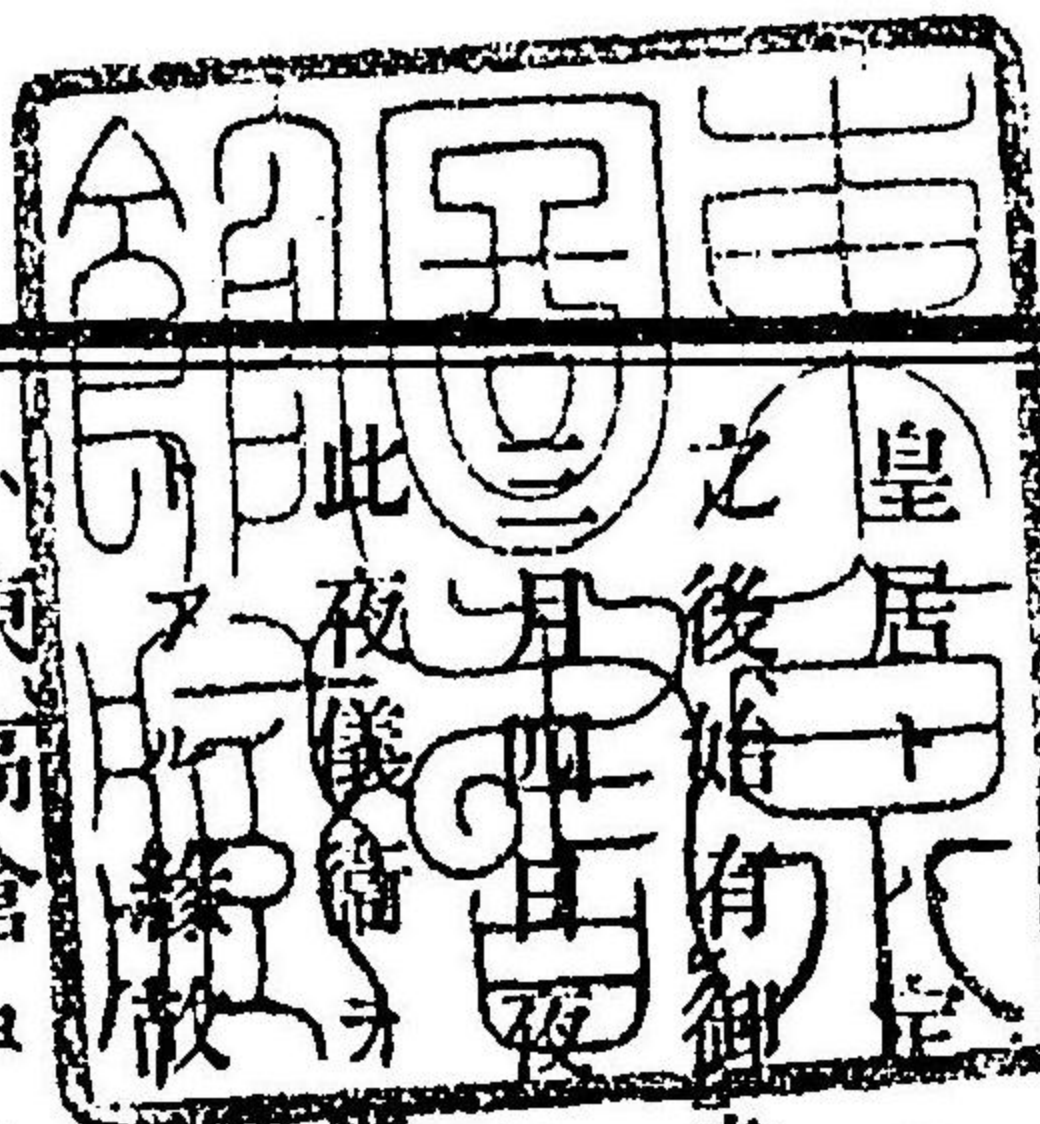
館書圖京東					
二	六	二			
〇	〇	〇			
冊	號	架	函	類	門

平安通志卷之九

第一編

京都皇居

湯本文彦等編



京都皇居ノ初ヲ釋ヌルニ所謂東洞院土御門殿ニシテ南北分裂ノ頃ヨリ初テ
 皇居ト定マレル者ノ如シ此地ハ山槐記ニ治承四年三月四日今夜新院遜位
 之後始有御幸土御門亭土御門北東洞院東前大納言那嚴島御幸記ニ治承四年
 四月廿四日此夜儀備ヲ備へ閑院内裏ヨリ此ニ遷御アリ是ヨリ先キ巳ニ仙院トナリシコ
 東高倉ヨリハ西方四十丈ノ地ニテ藤原氏世々傳領セシカ後源季實ノ家ト
 ナリ又大納言藤原邦綱ノ第トナリ其間時々上皇ノ仙洞ニ充テラレシコトア
 リ其ヨリ後專ラ朝廷ニ屬セシモノ、如シ承明門院宜陽門院陽德門院ハ之ヲ
 住所ト定メラレ後嵯峨帝ハ此ヲ潛邸トシ遂ニ天位ニ登リ後宇多帝ハ此ニテ
 降誕アリ伏見帝ハ火災ノ爲メ花園帝ハ受禪ノ爲メ此ニ遷御ノ事アリ中右記
 玉海、山槐記、明月記、増鏡ニ東宮光嚴院の陽德門院の土御門東洞院殿へ行啓は

玉海、山槐記、明月記、増鏡ニ東宮光嚴院の陽德門院の土御門東洞院殿へ行啓は

しめありト記セシモ此院ノ事ナリ園大曆ニ文保二年二月廿六日後醍醐帝受
 禪ノ事ヲ記セシ條ニ廿四日抑明後日爲行讓位節會幸土御門殿東洞院准后御所也廿六
 日今日讓位也土御門東洞院被行節會劔璽渡御トアルハ花園帝此ニテ後醍醐
 帝ニ讓位アリシ時ノ事ナリ然レトモ後醍醐帝ハ冷泉宮小路殿ヲ皇居ト定メ
 ラレタリ元弘元年帝ノ笠置ニ蒙塵アルヤ其九月廿日北條高時皇太子量仁親
 王ヲ奉シ東洞院土御門殿ニ即位ス皇年代十月六日賊帝ニ還リ得ル所ノ偽器
 ナ此ニ奉ス元弘元年此ヨリ一時閩主ノ皇居トナリシカ三年五月長慶帝廢
 セラレタルモ後醍醐帝ハ猶冷泉宮小路殿ニ御シ此宮ニハ臨御ナシ延元二年
 足利尊氏反シ帝叡山ニ蒙塵アルニ及ヒ尊氏正慶帝ノ子豐仁親王ヲ奉シ帝位
 ニ即ク是ヨリ南北分裂正位ノ天皇ハ南山ニ偏安シ京都ノ皇居ハ北朝ノ據ル
 所トナレリ是ヨリ五十餘年ノ間南北分爭官軍京師ヲ取ル數回ニ及フト雖ト
 モ之ヲ有スル能ハス元中九年閏十月五日後龜山帝神器ヲ後小松帝ニ讓ルニ
 及ヒ此皇居始テ正統天皇ノ宮トナレリ太平記、關太曆、應永八年二月廿九日火
 災ニ罹リ天皇之ヲ足利義滿室町第二避ケ皇年代其八月三日内裏造營ノ事始
 マリ同九年十一月十九日新造内裏へ還幸アリ足利義滿ノ造進スル所ナリ諸
 國ニ段錢ヲ課シテ造營セリ嘉吉三年九月廿三日夜日野有光南朝皇孫ヲ奉シ

内裏ヲ襲ヒ火ヲ放テ皇居燒亡ス名器文書烏有トナリ僅ニ四足門ト東門ヲ遺
 スノミ天皇右大臣近衛房嗣ノ第二避ク近衛氏第、近衛十月内裏造營ノ爲メ
 費用課當ノ事始マル然レトモ輒ク行ハレス十二月祇園祠官神告ト稱シ皇居
 ナ舊ニ仍リ土御門殿ノ跡ニ造ラルヘキ旨ヲ奏セシ事アリ日記文安三年七月
 三日東南垣ヲ築キ十二月三日御渡殿ノ柱立アリ東寺長其ヨリ數年ヲ經テ康
 正二年四月十一日紫宸殿柱立アリ其年七月二十日新造内裏ニ遷幸アリ續神
 統其ヨリ後十年ハ應仁元年ニテ正月十八日ニハ戰亂ヲ避ケ俄ニ室町第二行
 幸アリシカ幾日ナラス還幸ナリシモ八月二十三日ニハ又俄ニ行幸アリテ京
 師ハ戰區トナリ甲第巨室神社佛閣擧テ灰燼トナリシモ宮闕ハ幸ニ免カレタ
 リ然レトモ戰亂息マス干戈日ニ尋キ僅ニ室町幕府ニ寓シテ還幸ノ期ヲ待ツ
 十餘年ニ及ヒ其間室町幕府モ災シ俄ニ足利氏小川第二又北小路第二遷御シ
 幾年ナラス北小路第三又災シ僅ニ藤原政資一條ノ第二避ケ皇居ノ成ルヲ待
 ツコト年アリ文明九年東西軍散シ京都始テ兵塵ヲ免レ皇居造營ノ議始マリ
 其十一年三月廿六日事始メ行ハル重長記長興記ニ内裏土御門殿造營事始
 也清涼殿黒戸春興殿并ニ東西北等所々御門新造總用一万千餘貫武家奉行飯
 尾大和守云々トアリ此歲造營成リ十二月七日新造内裏ニ還幸アリ應仁元年

車駕宮ヲ出テシヨリ此ニ及ヒ十二年ヲ經テ初テ還幸アリシナリ然レトモ後
 法興院殿記ニ據ルニ曰ク文明十一年十二月七日今夜天皇遷幸土御門内裏每
 事省畧也云々抑今度内裏修理事清涼殿黒戸對屋一字大破之外一向不及御修
 理春興殿御門等如形有假葺云々之ニ據テ考フル時ハ此時造營ハ一時補修ニ
 止マリシヲ知ルヘシ當時ノ皇居ノ區域ハ親長記ニ據ルニ明應元年正月十六
 日節會ニ内裏ノ四至ヲ記シテ東ハ高倉西ハ東洞院北ハ正親町トアレハ其南
 ハ記セサレト方四十丈ノ一區ナルヲ知ルヘシ又四脚門東洞院而トアレハ西
 面ニ正門アリト察セラル晴富宿禰記ニ明應四年九月九日内裏四圍可被構堀
 之由被仰出此間懸仰町夫昨日此邊觸仰飯尾大和守奉行云々トアレハ内裏外
 圍ニ周壕ヲ作りシ事アリシナルヘシ果シテ成就セシヤ否ヤヲ知ラス應仁ノ
 役ハ古今無比ノ大亂ニシテ京師糜亂九陌墟ト爲リ後土御門帝ヨリ後奈良帝
 ニ至ル百年間ハ皇室式微ノ極ニシテ其慘然ノ狀記スルニ忍ヒサル者アリ其
 荒頽顛倒スルヤ時々少シク修理行ハルモ皆一時ノ苟且ニ止マルノミ永正
 十七年ニハ大風ニテ禁中所々破壊シ更ニ修理行ハル大永元年三月廿三日後
 柏原帝ハ紫宸殿ニ即位アリ里内裏ノ紫宸殿ニテ即位アルハ之ヲ始メトス
 天文四年二月五日夜大風日華門等顛倒六月三日日華門造營木造始メ且即

位ノ爲メ内裏ヲ修理セラル天應同五年二月廿六日後奈良帝紫宸殿ニテ即位
 アリ後柏原後奈良二帝ハ資用無キヲ以テ踐阼ノ後即位ノ禮久シク行ハレス
 數年ヲ經過セシ後僅ニ之ヲ行フヲ得タリ同十年ニハ大風ニテ宜陽殿廻廊月
 華門等皆顛倒シ十四年ニハ土一揆禁中ニ迫リ強訴ヲナス幕府兵ヲ以テ之ヲ
 護ルニ至ル永祿三年正月廿三日正親町帝即位アリ是亦百方經營僅カニ其資
 用ヲ得テ之ヲ舉ク二水記、親長記、殿助記、百繼此時衰頽式微ノ極即位ノ禮モ容
 易ニ行ハレス皇宮ノ修理モ固ヨリ及フ所ニアラスシテ殆ト風日ヲモ蔽ハサ
 ルニ至レリ立入宗繼万里小路惟房ニ説キ密勅ヲ織田信長ニ賜ヒ托スルニ興
 復ノ大計ヲ以テス帝之ヲ聽キ宗繼ヲシテ使命ヲ傳ヘシム時ニ永祿七年ナリ
 同十一年信長兵ヲ舉ケ京師ニ入り首トシテ勅旨ノ三事ヲ奉行ス是レ皇居再
 造ノ始メナリ祖事ハ第三編ニ在リ信長日乘上人村井貞勝ヲ以テ其事ヲ董
 サシメ皇居ヲ修理シ三年ニシテ功ヲ奏ス太田牛一ノ信長記ニ禁中既ニ御廢
 頽就無正體御修理之儀御冥加爲被思召先年日乘上人村井民部丞爲御奉行被
 仰付三ヶ年ニ出來紫宸殿清涼殿内侍所昭陽舍此外御局々無殘所令造畢云々
 又洛中ナシテ内裏築地ヲ築カシムル事ヲ記セリ足利氏ノ末世ヨリ久シク衰
 頽荒殘セシ皇居此ニ及ヒ初テ一新セリ又二條新殿ヲ修理シ之ヲ誠仁親王ニ

奉シ轉退ノ公卿ヲ復シ家祿ヲ給シ又離散セル市人ヲ完聚ス此ニ於テ密勅ノ
 三事各々其緒ニ就ケリ既ニシテ豊太閤織田氏ニ代リ大權ヲ執リ更ニ皇居ヲ
 造營セリ此時正親町帝春秋已ニ高シ皇嗣誠仁親王年三十三過ク豊公其讓位
 ノ事アラシ爲メ先ツ仙院ヲ造營アリ前田玄以ヲ以テ其事ヲ董サシム梵舜日
 記ニ天正十三年二月十七日新内裏院之御所築地有之拙子令見物也云々同十
 二月十六日内裏院二三日棟上也予見物也トアリ天正軍記ニ院の御所を建御
 即位とのおこなはれまつ院の御所さうをいなし奉る云々トアル是ナリ然レ
 トモ其翌十四年七月誠仁親王未タ受禪ニ及ハスシテ薨シ其十一月七日皇孫
 周仁親王ニ讓位アリテ同廿五日織田氏造進ノ紫宸殿ニテ即位ノ式行ハレタ
 リ此歲豊公大ニ内野ニ聚樂第ヲ營シ同十六年四月十四日此ニ行幸アリ之ヲ
 聚樂行幸ト謂フ古今ノ壯觀ヲ極メ儀衛ノ美ヲ盡シタリ事ハ第三編ニ詳ナリ
 初メ織田氏ノ皇居ヲ造營スルヤ猶未タ完全ニ至ラス此ニ及ヒ豊臣氏更ニ之
 ナ造營ス天正十八年前田玄以ヲ以テ奉行トナシ秀吉躬ヲ臨シテ其工事ヲ檢
 知シ造營功成テ十二月廿六日新造内裏ニ遷御アリ同十九年十一月紫宸殿上
 棟明年文祿元年九月秀吉參内清涼殿ニ於テ謁見ノ事アリ此時舊來ノ地盤ヲ
 東北ニ拓出シテ舊時ノ伏見土御門萬里小路殿等ヲ包ネ大凡南北百二十一間

東西百十五間半ノ地盤トナセリ太閤記、豐臣、皇年代記、晴豐記、光豐老人雜話ニ信
 長の知行なとつけられ造作なと寄進ありし故に、少し禁中の居なしよくなり
 たり、禁中信長の時より興隆すと雖とも、太閤の初めまでは、また微々也トアリ
 テ天正造營ノ時ニ至リ初テ荒蕪ヲ一新シ皇居ノ體ヲ成シタルヲ知ルヘシ德
 川氏大政ヲ執ルニ及ヒ慶長十一年先ツ諸大名ニ課シ皇居内外ノ築地ヲ築カ
 シメ結城秀康ヲ以テ之ヲ督ス外部ノ築地四百三十四間内部ニアルモノ六十
 間ニシテ豊臣秀頼以下間ヲ分テ之ヲ築造セリ安政内裏造營誌ニ此時皇居ノ
 地域ヲ記シテ曰ク東ヨリ西ニ亘ル南ノ築地百十五間半但シ六尺五寸間也東表百三
 間西表百十五間此ヨリ北ニ亘レル築地ハ仙洞ノ地域ニ屬セリト此時造營ノ
 宮殿ハ紫宸殿清涼殿常御殿御學問所記錄所御清所女御御殿東西對ノ屋其他
 雜舎ニ至ルマテ大凡全備セリ安政内裏造營誌是徳川氏皇居造進ノ始ナリ此時豊臣
 氏造營ノ宮殿ハ毀撤シテ紫宸殿ハ仁和寺清涼殿ハ南禪寺ニ賜ヒ今尙存セリ
京都府志仙院ハ皇居ノ北ニ並ヒ東西七十九間南北百二間六尺五寸ノ地域ヲ以
 テ之ヲ造營セリ慶長十六年三月廿七日後陽成帝位ヲ讓リ仙洞ニ遷御シ後水
 尾帝四月十二日ヲ以テ新宮紫宸殿ニテ即位アリ此時ノ皇居ハ足利時代ノ制
 ナ受ケ更ニ擴張セシ者ニシテ其規模ハ頗ル廣クナリシモ其制度ハ中古苟且

ノ制ナリ紫宸殿ノ東ニ春興殿アリ西ニ宜陽殿アリ紫宸清涼二殿ノ間取モ古
制ニアラス常御殿ハ紫宸殿ノ北ニアリシナリ東福門院入内ニ及ヒ皇居ノ東
北ニ於テ其宮殿ヲ營シタリ明正帝ノ時更ニ内裏ヲ修造シ寛永十九年ニ上棟
式行ハル二十年讓位アリテ後光明帝ハ十一月廿一日ヲ以テ新宮ニ即位アリ
此時ノ造營ハ小堀政一其事ニ任セシト見エテ松永昌三カ撰セシ政一ノ碑文
ニ大徳寺孤蓬
庵ニ在リ其後有帝闕營構之命累日積月經之營之其宮室也體象乎天地經
緯乎陰陽玉鎮居楹金壁飾鏤紫宸清涼日華月華殿堂門廡崔嵬炤爛殊形詭制不
可殫論トアリ當時ノ造營ハ苟且ニシテ正式ニハ合ハサリシモ建築ニ有名ナ
ル政一ノ經畫ニ出テシヲ知ルヘシ同帝承應二年六月廿三日京師火アリ延テ
内裏ニ及ヒ後水尾法皇明正上皇東福門院ノ宮盡ク焼亡セリ天皇火ヲ關白一
條教輔ノ第二避ケ以テ假皇居トナス幕府諸司代板倉重宗ニ命シ永井尙長ヲ
總奉行トシ皇居其他ヲ造營セリ同三年三月十二日事始アリ九月二十日天皇
假皇居ニ崩御アリ其年十一月十日皇弟良仁親王新宮ニ御シ二十八日踐阼ア
リテ明年正月二十三日即位ノ式行ハル是ヲ後西院天皇トス同帝萬治四年正
月十五日皇居及ヒ三院皆災ス天皇關白近衛基熙ノ第二御シ假皇居トス幕府
所司代牧野親成ニ命シ其事ヲ董シ諸大名ニ命シ役ヲ助ケ皇居ヲ造營ス其年

十一月五日上棟三年正月讓位行ハレ四月廿七日靈元帝新宮ニ即位アリ同帝
寛文十三年五月八日夜鷹司家失火シ皇居及ヒ仙洞院後西本院明正女院東福ノ
宮盡ク焼亡ス天皇又近衛基熙ノ第二御ス幕府皇居及ヒ其他ヲ造營シ所司代
永井尙庸其事ヲ董ス延寶三年十一月十六日上棟廿七日ヲ新宮遷御ノ日ト定
メシニ其二十五日一條油小路失火シ延テ假皇居近衛氏ノ第本院ノ御所ニ及
ヒ大半焼亡シ天皇俄ニ火ヲ吉田社ニ避ク然レトモ幸ニ新宮ハ恙ナカリシヲ
以テ治定ノ如ク十一月廿七日ニ新宮ニ遷御アリ東山帝延寶五年三月八日三
條油小路失火シ延テ皇居仙洞靈元女院上皇ノ中宮幸子内東宮慶仁女一宮皇女
秋子内ノ御所盡ク焼亡セリ天皇火ヲ賀茂社ニ避ケ後近衛家熙第二御シ假皇
居トス幕府皇居其他ヲ造營ス此時所司代ハ松平信庸ニテ總奉行ハ建部政守
ナリ其年九月二日木造始メ六年正月六日普請始メアリ六月廿一日假皇居ニ
テ讓位行ハレ中御門帝踐阼アリ七月廿六日上棟式十一月五日新造内裏ニ遷
幸アリ此ヨリ七十餘年ヲ經テ光格帝天明八年正月晦日建仁寺町團栗ノ園子
ヨリ失火シ狂風簸蕩火勢延蔓京師大半焦土トナル皇居仙洞櫻町大女院青絲
會女院院恭禮門女一宮後桃園ノ御所盡ク焼亡セリ安政内裏慶長造營ヨリ此ニ
及ヒ五回ノ造營アルモ大抵慶長ノ舊ニヨリ規制ヲ失スル事少カラス此時光

格帝睿聖ニシテ復古ノ叡志アリ、裏松光世カ考定スル所ノ皇居ノ古制ヲ天覽アリテ、内旨ヲ幕府ニ傳ヘラル、大將軍徳川家齊乃々老中松平定信ニ命シ、造營ノ事ヲ總裁セシム、定信學問該博、古典ニ通シ、時ノ首相タリ、深ク皇居造營ニ力ヲ盡シ、紫野邦彦等ニ命シ、時ノ有識博士ト考究討論シ、殿堂門廡ヨリ、畫障窓櫺ノ細ニ至ルマテ、古實ヲ考ヘ舊規ヲ存シ、住吉土佐兩家ニ命シ、其圖ヲ製シ、勅裁ヲ仰キ之ヲ定ム、其工費モ入札法ヲ用井、其最高額ノ者ニ命シテ之ヲ造ラシメ、以テ姑息苟且ノ弊ヲ去リ、有司ヲ戒メ、工匠ヲ督シ、百事怠リナク、各々其業ヲ勉メ、寛政元年三月廿七日地築始メ、七月四日木造初メ、八月十三日礎柱立式、廿六日上棟式、同二年九月廿六日ヨリ七ケ日間、新殿安鎮ノ御祈、天台座主眞仁法親王勤修セラル、十月十五日地鎮祭、十一月四日所司代太田資愛成蹟ヲ檢シ、其翌五日之ヲ朝廷ニ致ス、此日遷幸日時定陣儀アリ、十一月二十二日正午、車駕儀衛ヲ備ヘ、聖護院假皇居ヨリ新造皇居ニ遷幸アリ、廿六日、太上皇、十二月四日女院共ニ還御アリ、此時紫宸殿、清涼殿、宜陽殿、及ヒ内侍所、承明門、玄暉門、朔平門、并ニ崇政、青瑣、敷政等ノ諸掖門、軒廊、陣座、南庭ノ回廊、皆古制ニ復シ、賢聖障子、其他殿上ノ繪畫等ニ至ルマテ、皆古實ニ據テ之ヲ更正シ、外廷ノ式ハ、古昔大内裏ノ時ノ制ニ復シタリ、常御殿ヲ東北ニ移シ、其間取テ改メ之ヲ廣メ、其前ニ園池ヲ築

キ、其他擴張改修スル所甚多シ、是ヲ寛政御造營ト稱シ、官闕興隆ノ盛事トス、帝深ク之ヲ嘉シ、宸翰五言長篇ノ詩ヲ大將軍ニ賜ヒ、其功ヲ賞シ、太上皇亦御製ノ歌ヲ賜フ、第三編ニ詳ナリ、寛政内裏造營記、外紀抄、弘記、神嘉殿ハ、寛政二年假リニ之ヲ造營シ、文化十三年之ヲ修造シ、皇后御殿ハ、安永元年中興アリ、天明災後、寛政五年舊ノ如ク、皇居ノ北ニ造營アリテ、其年十二月落成、六年三月、後園桃帝ノ皇女欣子内親王入内、皇后冊立ノ禮行ハル、爾後相繼キ、皇后御殿トナレリ、御三間御獻ノ間ハ、寛政造營ノ時ハ、省キテ造營ナシ、其後朝儀行ハレ難キ故ヲ以テ、寛政十二年、先ツ御三間造營アリテ、御獻ノ間ニ及ヒ、其年十二月落成ス、御學問所ハ、是亦寛政造營ニ之ヲ省キシカ、文化元年八月、造營アリテ、十月ニ落成シ、東宮ハ寶永災上ノ後、享保十二年五月造營アリ、天明災後、寛政造營ノ時ハ、皇太子ナキヲ以テ之ヲ省キ、文化六年二月、恭禮門院ノ舊殿ヲ移シ、常御殿ノ北ニ建築シ、東宮中宮ノ御所トナス、其年四月落成、同十四年三月、東宮受禪、新宮ニ遷御アリ、同十五年九月、改テ花御殿ト稱ス、泉殿代ハ、文政十三年七月二日、京師大ニ地震ス、因テ禁苑内ニツキ、之ヲ造營シ、以テ乘輿避難ノ所トナス、天保元年閏十一月落成ス、是レ嘉永災前ノ造營ニ係ル宮殿ナリ、安政元年四月六日、午時後院ノ北殿ヨリ失火ス、時ニ東風飄忽、後殿ニ移リ、遂ニ皇居准后御殿ニ延ヒ、悉ク烏有トナル、

天皇火ヲ下鴨社ニ避ケ、聖護院ニ移リ、遂ニ桂宮ニ遷御シ、以テ假皇居トナス、幕府老中阿部正弘ヲ以テ總裁トナシ、以テ新宮ヲ造營ス、正弘ハ江戸ニ在リ、遂ニ其事ヲ督シ、所司代脇坂安宅、勘定奉行石河政平、川路聖謨、京都町奉行兼御作事奉行淺野長祥等專ラ其事ヲ掌レリ、公卿ニテハ、前大納言橋本實久、大納言德大寺公純、中納言萬里小路正房、造内裏御用係トナリ、大納言中山忠能、三位大原重德、前左大辨裏松恭光、修理職奉行タリ、其年五月、關白應司政通ヨリ所司代ニ命シ、幕府ニ照會セル狀ニ曰ク、

今度禁裏御造營速ニ被仰進、御滿悅之御事ニ候、天明度彼是御模樣替御再興之儀、被仰進候、通被成進、紫清兩殿ヲ始メ、夫々御出來相成候處、何分御再興取調之廉モ多端ニ付、其節之御差圖、少々宛御都合惡キ廉モ有之、且火除地モ無之、少シ被廣度叙慮被爲在候、得共、當時外夷渡來ヲ始メ、諸般御事多之御時節ニ候者、被察御時勢、御好等之儀、不被仰出候間、御元形通、殿舍無相違至、神嘉殿迄、速ニ御造營被成進候者、叙慮不斜可被思召、此等之趣、可然御取計有之候、樣宜敷可申入旨、關白殿被命候事、五月、幕府ヨリ所司代ニ命シ、回答セン狀ニ曰ク、今度禁裏御造營速ニ被仰進、御滿悅之御事ニ候、天明度彼此御模樣替御再興

之儀、被仰進候、通被成進、紫清兩殿ヲ始メ、夫々御出來相成候處、何分御再興御取調之廉モ多端ニ付、其節之御差圖、少々宛御都合惡キ廉モ有之、且火除地モ無之、少シ被廣度叙慮被爲在候、得共、當時外夷渡來、諸般御事多之御時節ニ候得者、被察御時勢、御好等之儀者、不被仰出候間、御元形通、殿舍無相違至、神嘉殿迄、速ニ御造營被成進候者、叙慮不斜可被思召、此等之趣、可然取計候、樣、關白殿被命候、由關東へ相達及言上候處、御厚キ叙慮之趣、御領承被遊、御安心被思召候段、被仰出候、此旨關白殿へ御兩卿ヨリ御物語被置候、樣、年寄共ヨリ申越候事、六月、

此時外患已ニ萌シ、國事漸ク般ナルヲ以テ、宸衷憂念、皇居ノ造營モ、頗ル抑損ヲ事トセラレ、概ネ寬政造營ノ舊規ニ仍ル事トナリ、其變更及ヒ新規ニ係ル事ハ、唯皇居南面ノ二隅ヲ方形ニ擴ケ、坤角ヲ火除地トシ、巽角ニ職事預藏ヲ移シ、神嘉殿ノ棟屋ヲ檜皮屋トナシ、常御殿ノ北ニ御書室ヲ築キ、花御殿ノ北ニ皇子女ノ殿ヲ築キタル等ノ數十事トス、此時皇居ノ區域ハ、安政造營誌ニ、南側百二十五間半、東側百六十二間五尺、西側百八十間半トアリ、此ヨリ北ハ女院御所ニ屬セリ、安政二年三月十八日、木造始地、四月八日礎柱立、六月十七日關白政通工事ヲ巡視シ、八月廿四日上棟、十月二日新宮地鎮祭執行、二十二日後宮地鎮祭執

行十一月一日所司代脇坂安宅其成功ヲ巡檢シ三日之ヲ朝廷ノ職員ニ引渡シ、
 四日關白新宮ヲ巡檢シ十一月廿三日車駕假皇居ヨリ儀衛ヲ備へ新造内裏ニ
 還幸アリタリ之ヲ安政内裏造營ト曰フ其工匠ハ百四十萬八千五百五十人ニシ
 テ其費用ハ金貳拾七萬六千二百十三兩三分餘銀八千五百二十八貫百八十五
 匁米二萬千三百九石九斗七升タリ實ニ幕府ヨリ皇居ヲ造進セシ最終ニシテ
 卽チ現在ノ宮殿是ナリ此時淺野長祚旗本ニシテ將領トシテ京都町奉行ヲ以テ御
 作事奉行ヲ兼ネ終始其事ヲ董シ造營一切ノ事ヲ編シ安政内裏造營誌十卷ヲ
 作ル記事詳密徵スルニ堪ヘタリ文久慶應ノ際ニ及ヒ天下多事將軍上洛諸侯
 參朝屢々謁ヲ殿中ニ賜ヒ慶應三年大政復古ニ及ヒ太政官代ヲ宮中ニ設ケ天
 下ノ大政國家ノ機務皆此ニ決ス初メ王室衰微大權武臣ニ歸セシヨリ此ニ及
 ヒ七百餘年ニシテ天下ノ政朝廷ヨリ出ル事トナレリ嗟盛ナリト謂フヘシ明
 治二年車駕東幸ノ後宮闕空虛トナリ一時ハ之ヲ開キ博覽會社ニ貸附スルニ
 至リシカ同十年車駕西巡久シク皇居ニ駐輦アリ千歲舊京ノ宮殿荒廢セシコ
 トヲ恐レ更ニ維持ノ策ヲ講シ岩倉贈相國殊ニ力ヲ其間ニ盡シ初メ大内保存
 係ヲ置キ十六年十月更ニ保存ノ道ヲ擴張シ保存係ヲ廢シ宮内省支廳ヲ置キ
 十九年支廳ヲ廢シ主殿寮出張所ヲ置キ其職員ヲ備へ章程ヲ定メ明治十年ヨ

リ同二十一年マテ毎年内帑ノ金四千圓ヲ給シ以テ舊觀ヲ失ハサル様維持保
 存スヘキ旨ヲ達セラレ其不急ノ建物ニ至リテハ概ネ之ヲ毀撤シ或ハ東京ニ
 移シ又ハ神社ニ賜ヒ必要ノ宮殿ノミハ大ニ修理ヲ加ヘ洒掃ヲ嚴ニシ開閉ヲ
 慎ミ監督ヲ嚴ニシ以テ永遠維持ノ方法ヲ立テ之ヲ京都皇居ト號ス皇室典範
 ヲ定メラルニ及ヒ卽位ノ禮大嘗ノ典ハ必ス此皇居ニテ行ハル事ヲ規定
 セラレタリ維新志科、太政官日誌、官報、
 京都府志、憲法、通解、御取

皇居

皇居ノ地域ハ南面東西百三十七間半東面南北二百四十六間餘西面南北二百
 四十六間餘北面東西百三十三間ニシテ當初ハ方四十丈ノ區域ナリシカ數百
 年ヲ經テ豐臣氏ノ時更ニ之ヲ廣メ徳川氏三百年ノ間漸々擴張シ數十年前其
 東北隅ヲ廣メテ今日ノ形ヲ成セリ其正門ハ南ヲ建禮門東ヲ建春門西ヲ宜秋
 門北ヲ朔平門ト曰フ其他清所御門皇后宮御殿御門アリ南部ヲ皇居トシ北部
 ヲ皇后宮御所トス建禮門ノ内ニ承明門アリ回廊アリテ之ニ屬シ其東ニ日華
 門西ニ月華門アリ紫宸殿ハ承明門内ニアリ南面ス櫻橋樹其階ノ東西ニ相對
 セリ清涼殿ハ紫宸殿ノ乾位ニ在リ東面ス公卿ノ間ハ清涼殿ノ坤位ニ在リ神
 嘉殿ハ諸大夫間ノ南ニ在リ南面ス今廢ス御車寄ハ諸太夫間ノ北ニ在リ西面

ス此ヨリ宜秋門ニ出ツヘシ宜陽殿ハ紫宸殿ノ東ニ在リ其間ニ軒廊左近衛陣東北廊有リ御輦舎内侍所ハ宜陽殿ノ東ニ在リ小御所ハ紫宸殿ノ良位ニ在リ御學問所ハ小御所ノ北ニ在リ三間御殿ハ御學問所ノ北ニ在リ御獻ノ間之ニ隣ス常御殿ハ三間御殿ノ良位ニ在リ天皇常御ノ正寢ニシテ宮中第一ノ大殿ナリ迎春ノ御殿ハ常御殿ノ北ニ在リ御涼殿ハ迎春御殿ノ北ニ在リ聽雪ノ御茶亭ハ其北林泉ノ中ニ在リ曲廊ヲ以テ相通ス花御殿ハ常御殿ヨリ北ニ赴ク廊ノ北ニ在リ黒戸御湯殿ハ其廊ノ西ニアリ參内殿ハ内ノ御車寄ノ内ニアリ長橋局ハ參内殿ノ良ニアリ別ニ錦臺及ヒ泉殿代アリ共ニ殿東林泉ノ中ニ在リ參内殿ハ内ノ御車寄ノ内ニ在リ麝香ノ間八景ノ間水鳥ノ間林和靖ノ間錦雞ノ間議奏ノ詰所傳奏部屋非藏人所對屋女孺部屋其他倉庫雜舎棟宇相屬シ檐軒連亘皆通スルニ長廊ヲ以テス是レ安政造營皇居ノ大形ナリ其詳細ニ至リテハ能ク記スル所ニアラサルナリ車駕東幸ノ後頗ル存廢アリト雖トモ其重要ノ部分紫宸清涼宜陽ノ諸殿ヨリ古式ニ據リシ建物ト常御殿御學問所小御所諸門等ニ至リテハ一モ變更スル所ナシ皇居ノ事ヲ記シタル書籍數多アレトモ淺野長祚ノ安政造營誌ヨリ精密ナルハナシ今本志ニ據リ其時造營アリシ宮殿ヲ記シ以テ其他ニ及ヒ其當時ニアリテ今時ニ無キモノハ其下ニ其

由ヲ注シ以テ之ヲ別ツ先ツ外門ヨリ始メ宮殿ニ及ヒ其雜舎ニ至リテハ多ク其名ノミヲ記シテ記事ハ之ヲ略セリ

建禮門

南面ノ正門ナリ櫻木造皆同門柱間三間一尺梁行二間三尺六寸化粧屋根裏屋根檜皮葺棟獅子口簷菊輪違積ニテ軒繁垂木打越破風兩妻三ツ斗六組雲板内之方菊御紋外之方彫物中央臺股太平椗内外虹梁上臺股軒廻滅金飾金物打腰長押六葉釘隱等打軒高サ石口ヨリ冠木下迄一丈五尺五寸軒出九尺六寸車駕行幸還幸ノ時此門ヲ開ク

建春門

東面柱間三間一尺梁行二間四尺八寸化粧裏屋根檜皮葺棟獅子口簷菊輪違積ニテ軒繁垂木内外唐破風兩妻打越破風柱上中央共三ツ斗六組兩妻二重虹梁間三ツ斗四組臺股太平束内外中央虹梁共臺股太平束梓肘木實肘木共繪様軒廻破風登共滅金飾金物打高サ石口ヨリ冠木ノ下迄一丈五尺三寸唐破風出端八尺九寸

宜秋門

西面柱間三間一尺梁行二間三尺六寸化粧屋根裏屋根檜皮葺棟獅子

口緒菊輪違積ニタ軒繁垂木打越破風兩妻三ツ斗六組中央共二重虹梁太平束梓肘木蓋股繪様軒廻破風共滅金飾金物打軒高サ石口ヨリ冠木下迄一丈五尺五寸軒出端一丈五寸傍軒七尺五寸
朔平門

北面柱間二間五尺梁行二間一尺化粧屋根裏屋根木賊葺棟獅子口緒菊輪違積鎖鈺附ニタ軒繁垂木柱上虹梁中央蓋股兩妻三ツ斗虹梁太平束笈形打越破風懸魚鱗唐戸腰長押高サ石口ヨリ冠木下迄一丈三尺五寸軒出端茅負外迄七尺

以上四方ノ正門トス

清所御門

西面柱間二間三尺梁行二間二尺化粧屋根裏屋根瓦本葺棟獅子口緒菊輪違積ニタ軒中繁垂木化粧木舞布裏板打越破風兩妻雲板上三ツ斗冠木上太平束三ツ斗二組内之方扣柱上大斗繪様肘木虹梁木鼻繪様刻アリ軒高サ石口ヨリ冠木下迄一丈四尺軒出端裏甲外迄六尺八寸

皇后宮御門

西面柱間一丈五尺七寸梁行一丈五尺化粧屋根裏屋根瓦本葺棟獅子口緒菊輪違積ニタ軒中繁垂木化粧木舞布裏板打越破風兩妻雲板上三ツ斗冠木上太平束平三ツ斗二組内之方扣柱上大斗肘木虹梁木鼻繪様刻軒出端五尺五寸傍軒出五尺五寸高サ石口ヨリ冠木下迄一丈三尺

以上合シテ皇居六門ト曰フ

諸掖門

建禮門ノ東ニアル掖門ヲ道喜門ト曰フ川端道喜ノ獻資シテ開キン所ナリト云フ其他諸掖門ハ之ヲ略ス

紫宸殿

寛政造營ノ時故實舊規ヲ調査シ中世苟且ノ制ヲ改メ古代大内裏ノ舊觀ニ復セラル安政造營之ニ仍ル其式大内裏記事ニ詳ナリ檜白木造桁行十六間六尺梁行十一間三尺五寸外側柱上手先組物東西入側平三斗組物三軒繁垂木但三重目アハヲ木舞四隅階隱垂木無シ屋根檜皮葺欄軒並四隅軒付段違兩妻破風入母屋造妻飾二重虹梁前包蓋股扱首束扱首棹升形舟肘木裳羽目板内廻總化粧屋根裏大虹梁八通

側繫虹梁、柱間每平虹梁上、雲板升形舟肘木、二重虹梁上、扱首束、扱首棹、升形肘木、化粧棟等、内室造、軒高二丈五尺九寸、軒出端一丈六尺、但簀子御椽、高サ地ヨリ御椽上迄七尺八寸、壇上高一尺八寸、葛石内叩土御帳臺

母屋ノ中央ノ北位ニ設ク、即チ高御座ニシテ、天皇御殿ノ正位ナリ、總高八尺五寸、幅一丈四方、濱牀高一尺、柱七尺五寸、八角造、十二本立、臘色塗、小組天井、幸菱紋綾ニテ張ル、金銅金物、帳内粧飾御倚子、御褥御机、狛犬等、各其式アリ、夏ノ御帷ハ、表生絹、銀泥ヲ以テ、秋草ヲ畫キ、裏ハ白張平絹、冬ノ御帷ハ、表裏白張平絹、蘇芳摺朽木形ヲ繪ク、紐ハ黒ト紅トノ絹ニシテ、蝶鳥ヲ寫ス、

賢聖障子負文龜

事ハ大内裏皇居ノ記事ニ詳ナリ、寛政造營ノ時、古實舊記ニヨリ改訂アリテ、古式ニ復セリ、

額

豎四尺五寸、幅三尺三寸、輪廓彫繪彩色、古様字ヲ以テ、紫宸殿ノ三字ヲ書ス、安政造營ノ時、書博士賀茂保考勅ヲ奉シ之ヲ書セリ、

左近櫻

右近橘

舊制ノ如シ、

承明門

紫宸殿ノ前建禮門ノ内ニアリ、瓦屋東西榮五間、扉三間、白壁丹楹、額ヲ掲ク、其製紫宸殿額ト同シ、賀茂保考ノ書スル所ナリ、豎三尺八寸三分、幅二尺七寸四分、

桁行八間四尺、梁行三間五尺、化粧屋根裏、二軒、繁垂木、打越破風、柱上大斗、舟肘木造、二重虹梁、雲板扱首束、扱首棹、兩妻内外軒高一丈九尺四寸、軒出端一丈二寸、段上高サ内之方一尺八寸、外之方二尺四寸、丸柱直徑一尺五寸、

日華門

南庭ノ東、宜陽殿ノ南ニアリ、瓦屋南北榮三間、扉一間、其他承明門ニ同シ、

月華門

南庭ノ西ニアリ、瓦屋南北榮三間、扉一間、其他日華門ニ同シ、

長樂門	永安門	右掖門	左掖門	內衙門	恭禮門
宣仁門	敷政門	明義門	仙華門	神仙門	無名門
左青瑣門	右青瑣門	以上諸掖門トス			

廻廊

長八十間一尺梁行二間承明門東西各十四間一尺五寸承明門ノ左右ヨリ各々北ニ折レ、東方宜陽殿ニ接シ、西方清涼殿ノ南ニ接ス、二重長廊中隔櫺子瓦屋白壁丹樓、

軒廊

紫宸殿ノ東南階ヨリ、宜陽殿ニ赴ク土廊ナリ、軒廊ノト、此ニテ行ハル、陣座

紫宸殿ノ東北階ヨリ宣仁門ニ赴ク板廊ニテ、左近衛ノ陣ト曰フ、李將軍ノ障子此ニ在リ、

明義門土廊

仙華門南廂

紫宸殿ト清涼殿ノ間ニアリ、

清涼殿

紫宸殿ノ乾位ニアリ、紫宸殿ノ北椽ヨリ階ヲ下リ、長橋ノ渡廊ヲ渡レハ、本殿ノ小板敷ニ至ル、殿東面ス、屋根檜皮葺、南北榮其大小構造間取一切、大内裏皇居ノ清涼殿ニ同シ、
檜木造、桁行十間半、梁行七間四尺五寸、北廂桁行四間四尺、梁行一間半、北取合桁行三間、梁行一間三尺五寸、二軒繁垂木、屋根檜皮葺、兩妻破風、入母屋造、妻飾虹梁前包葺、股、我首束、我首棹、升形舟肘木束、葺羽目板破風、懸魚、内廻大虹梁、側繫虹梁、柱間每平虹梁、雲板升形肘木、化粧棟共、内室造、軒高二丈二尺二寸、但北廂軒高北取合軒高一丈七尺、軒出端一丈、軒出八尺八寸、北取合軒出九尺七寸、

簀子御椽高地ヨリ御椽上迄三尺、廣廂北拭板間六寸五分、

本殿ノ記事ハ、巳ニ大内裏ノ部ニ詳ナレハ、此ニ略ス、其變更シタル所ハ、東ニ仁壽常寧ノ諸殿ナキヲ以テ、東庭ノ舊時ニ比シ、甚タ廣大ナルト、後涼殿ナキヲ以テ、西部ノ朝餉壺臺盤所壺等ノナキト、此等ノ類少シク異ナル所アルノミ、其他殿中ノ粧飾、御帳臺、晝御座、夜御殿、石灰壇、朝餉間、臺盤所ノ札、櫛形、弘徽殿、上局桐壺、上局萩戸二間、荒海障子、年中

行事障子、鳴板、小板敷、殿上間、殿上札等ニ至ル迄、皆故實ニヨリ舊式ニ則リテ之ヲ設ケラレタリ、

殿上ノ襖繪モ、故實ニ據リ之ヲ寫シ、絹地錦綾金泥彩色、時ノ名工ヲ擇ミ之ヲ命セラル、其上ニ色紙形ヲ押シ、和歌ヲ題セラル、御製又ハ時ノ公卿ノ詠セシ所ニテ、特ニ名筆ヲ撰ミ之ヲ書カシメラル、其詳細ハ之ヲ畧ス、

温明殿 内侍所

殿ハ神鏡奉安ノ所ニシテ、賢所又内侍所ト稱ス、宜陽殿ノ東ニ在リ、桁行七間半、梁行四間半、二軒繁垂木、屋根檜皮葺、兩妻破風、入母屋造、妻飾前包、扱首束、扱首棹、升形船肘木、費羽目板、御内陣折上小組格天井、御外陣小組格天井、上段内室造、軒高二丈一尺六寸、軒出端一丈六寸、床高八尺五寸七分、壇上高一尺八寸、葛石内叩土、

四方ニ椽アリ、南ノ面ニ階アリ、北ニ廊アリ、以テ諸殿ニ通ス、殿内ヲ三分シ、其南ヲ外陣トシ、東ニ上段アリ、北ノ東ヲ内々陣トシ、拭板敷之ヲ神座トス、其西ヲ内陣トス、

温明殿ハ、明治廿二年八月、檀原神宮創立ノ際、該宮ニ移サレ、其東方

ナル刀自詰所、及ヒ長廊ハ、此ヨリ先キ已ニ毀タレタリ、

神嘉殿

天明七年、内侍所修理ノ時、假殿ヲ造營アリシカ、同八年ノ大火ニ焼亡シ、寛政造營ノ後、更ニ假殿造營アリテ、其後文化十三年、假殿ノ材ヲ用井修造アリテ、柿葺ヲ改メ檜皮葺ト爲ス、其後嘉永焼亡ノ後、造營アリシカ、明治廿二年八月、之ヲ檀原神宮ニ移サレタリ、紫宸殿ノ西、清涼殿ノ西南、月華門外ニ在リ、東西榮、南面檜皮葺、檜木造、中央ノ東ヲ神殿トシ、其西ヲ御座ノ所トシ、其西ヲ御湯殿トシ、四方ニ廂アリ、廂外ニ簀子アリ、軒外捨柱アリ、神殿ノ南ニ正階アリシナリ、

小御所

清涼殿ノ北廊ヨリ東ニ折レ、長廊ヲ以テ相通ス、南ハ紫宸殿、温明殿、宜陽殿ニ通シ、北ハ御學問所ニ通シ、皆架スルニ長廊ヲ以テス、殿ハ南北榮、東面、兩下四阿、檜皮葺、檜木造リ、中央ノ北ヲ上段トシ、其南ヲ中段トシ、又其南ヲ下段トス、各十八帖、東ニ二間ニ十二間ノ東廂アリ、南北及ヒ西ニ各一間ノ廂アリ、廂外ニ椽アリ、高欄ヲ施シ、東面及ヒ南北ニ木階アリ、殿中襖障子、紺青引極彩色、古式又ハ名所風流ヲ畫キ、各色紙形

ヲ押シ和歌ヲ題ス其上段ニハ豊樂院雅樂ノ圖アリ御製ノ歌ニ愛良
太麻留年之端姿免能餘呂古飛遠空耳加沙奴流廣半田農記努本殿ハ
幕府ノ使臣所司代等ニ謁見ヲ賜フ所ナリ近世參内ノ諸侯モ多ク此
ニ謁見セリト云フ小御所ハ梁行七間桁行十二間二軒アハラ木舞物
屋根檜皮葺棟包獅子口兩妻破風切妻狐格子懸魚側化粧桁船肘木造
上段二重折上並中段共格天井小組下段格天井板違四方廂化粧屋根
裏繫虹梁雲板升形之實肘木共軒高一丈七尺九寸
出端九尺八寸御椽高三尺二寸

御學問所

小御所ノ北ニ在リ長廊ヲ以テ之ニ通シ此ヨリ又長廊アリテ御三間
御殿ト常御殿トニ通ス殿ハ南北榮東面檜皮葺檜木造リ其北ヲ上段
トシ床并ニ違棚アリ次ヲ中段トシ二重棚アリ次ヲ下段トス各十二
帖半上段ノ西ニ菊御間アリ東ニ違棚アリ次ニ山吹ノ御間次ニ雁ノ
御間アリ三方ニ内椽アリ廣一間其外ニ外椽アリ高欄ヲ施シ東南二
方ニ木階アリ西ハ長廊ニ接ス此殿ハ天皇講學ノ御所ナリ其襖地沙
子泥引極彩色上段ニハ十八學士登瀛洲圖ヲ寫ス其他蘭亭岳陽樓花
鳥等ノ畫アリ

常御所

御學問所西廊下取込梁行八間桁行九間半西北取合廊下之内一四半
三四半
東取合御間三四半東廊下折廻共一四半御學問所屋根檜皮葺二軒ア
ハラ木舞物切妻破風狐格子三ツ花懸魚鱗彫物廊下共舟肘木造屋
根檜皮葺西取合廊下西流詰番所取合共屋根上柿葺所々縫破風有之
木口椽階段高欄登リ高欄共有之御學問所之分軒高一丈七尺六寸軒
出端九尺床高三尺廊廊下共軒高一丈三尺五寸軒出端五尺床高三尺
常御所
宮中第一ノ大殿ニシテ天皇常在ノ正寢ナリ又常御殿ト稱ス古代ニ
於テハ仁壽殿ヲ常御殿トシ其後清涼殿永ク常御所トナリシカ足利
時代ヨリ別ニ常御殿ヲ營シ所謂寢殿造リヲ取交へ古制ノ宮殿ト其
體ヲ別ナタル者ノ如シ
常御所ハ東西榮兩下四阿檜皮葺ニシテ東南角ニ角屋アリ檜木造リ
長廊ヲ以テ御學問所ニ通ス西南ノ角ヨリ御三間御殿ニ通シ北ノ長
廊ヨリ御涼所等ニ通ス中央ヲ御寢ノ間トス十八帖其東ヲ御清ノ間
トシ其南ヲ御上段トシ次ヲ中段トシ次ヲ下段トス各々十八帖西ニ
向フ上段ノ東ヲ劔璽ノ御間トス其東ニ御小座敷二室アリ其北ニ一

ノ御間アリ、其北ニ二ノ御間アリ、其ヨリ西ニ折レテ三ノ御間アリ、次ニ申口ノ間アリ、其南ニ亦申口ノ間アリ、御寢ノ間ノ西ニ當ル、御寢ノ間、御清ノ間、劔璽ノ間、御小座敷ニハ各々牀或ハ棚、又ハ袋戸ノ設アリ、四面内椽アリ、其外ニ外椽アリ、高欄ヲ施シ、南面ト東面ニ木階ヲ設ク、北方ニ長廊アリ、御涼所ニ通ス、長廊ノ東西ニ小階ヲ設ク、南庭ハ長廊ト土屏ヲ以テ、別ニ一壺ヲ爲ス、東庭ハ林泉ニ對セリ、本殿ハ常ノ御在所ナルヲ以テ、構造莊宏ニシテ、裝飾最モ華麗ナリ、

常御殿、梁行十二間二尺五寸、桁行十五間五寸、南差出落長押間一四四尺、三四尺、五寸、西御椽座敷一間四尺、十寸、二軒アハラ木舞物、屋根檜皮葺、兩妻破風、狐格子前包須覆、三花懸魚鱗椽座敷下段共、内室舟肘木造、上段二重折上、小組格天井、劔璽之間中段折上、小組格天井、御寢之間一之間共格天井、御清間御小座敷、二之間三之間次之間、申口之間、落長押之間、共猿頬天、井軒高石口ヨリ桁上端マテ一丈八尺六寸、軒出九尺七寸、椽高三尺二寸、

御涼所

常御殿ノ北ニ在リ、北ノ長廊ヨリ別ニ東ニ廊アリ、斜ニ折レテ本殿ニ

通ス

御涼所ハ、天皇納涼ノ御殿ニシテ、別ニ之ヲ建ツ、東西檼木賊葺、檜木造リニシテ、東面ス、北ニ九帖ノ一室アリ、牀アリ、之ヲ正殿トナス、其南ニ一室アリ、七帖半、其西ニ四帖半ト六帖ノ二室アリ、東南二方ニ椽アリ、繼クニ五帖ノ内椽アリ、襖繪ハ、志賀春色、嵐山秋景、花鳥遊魚等ノ畫ナリ、

御三間御殿并御獻間

常御殿ノ坤位、御學問所ノ北ニアリ、常御殿ノ西南角ヨリ長廊ヲヘテ西スレハ、右ヲ御三間トシ、左ヲ御獻間トス、

御三間御殿ハ、東西檼、檜皮葺、檜木造リ、南面ス、東ヲ上段トス、十帖牀并ニ棚アリ、次ヲ中段トシ、次ヲ下段トス、共ニ十二帖半、南廂アリ、外椽アリ、高欄ヲ施シ、中央ニ木階ヲ設ク、東西及ヒ北並ニ廊アリ、襖地總雲取砂子泥引極彩色ニシテ、上段ニハ大極殿朝賀ノ圖ヲ寫ス、住吉内記筆ナリ、其他賀茂祭羣參、駒引、花鳥、人物等ノ圖アリ、御獻間ニハ、嵐山ト高雄ノ圖アリ、

御三間御殿、梁行五間半、桁行九間半、御獻之間、二間ニ四間、二軒アハラ

木舞物御獻ノ間屋根御三間御殿屋根葺下シ一間アハラ木舞物屋根
檜皮葺兩妻破風狐格子前包須覆三花懸魚鱗船肘木造上段格天井折
上小組中段其外猿頬天井軒高石口ヨリ桁上端マテ一丈七尺軒出八
尺御獻之間四尺牀高三尺四寸外側柱創立六寸四方入側五寸五分四
方

迎春御殿

常御殿ヨリ御涼所ニ赴ク長廊ノ東ニ在リ孝明帝ノ時新ニ造營アリ
シ小殿ニシテ十帖ト四帖ニ廻リ椽アリ東ニ向フ額ハ迎春ノ二字ニ
テ東軒ニ掲ク

聽雪御亭

御涼所ノ北翠樾泉石ノ間ニアリ清流ニ曲廊ヲ架シ以テ相通ス四帖
半二間三帖一間水屋茶棚等皆備ハル皇宮中ノ茗室ニシテ清楚風雅
ヲ極ム是ハ孝明帝ノ時特ニ皇室ノ經費ヲ以テ新ニ造營アリシ所ナ
リ額ハ聽雪ノ二字ニテ其南軒ニ掲ク

泉殿代

常御殿ノ御庭ノ内ニアリ文政十三年京都大地震ノ時避難ノ爲メ造

營アリシ所ナリ雅朴清楚ノ構造ニシテ御園内ノ小亭ナリ禁池ノ橋
ヲ渡リ之ニ赴ク今在ル所ハ安政造營ノ建物ナリ

錦臺

常御殿ノ辰位禁池ノ東假山楓林ノ中ニアリ清楚ナル小亭ニシテ觀
楓ニ宜シ故ニ錦臺ト號ス其南ニ接シ小御所ノ林泉御覽ノ物見所ア
リ

花御殿

寶永燒亡ノ後享保十二年造營アリシカ天明燒亡寛政造營ノ時ハ東
宮未タアラサルヲ以テ造營ナシ文化六年恭禮門院舊地ノ宮殿ヲ移
シ今ノ所ニ造營シテ東宮中宮ノ御所トス嘉永燒亡後今ノ建物ヲ造
營アリシナリ
常御殿ヨリ女院御所ニ通スル長廊ノ北ニ在リ東宮御所ヨリ梁行六
間桁行七間南北榮東面檜皮葺檜木造中ヲ四間ニ分ケ東南ノ間ヲ御
座ノ間トス四方ニ廂アリ東北ニ椽アリ東西ニ階ヲ設ク其他之ヲ略
ス

御車寄

宜秋門ノ内ニ在リ、西ニ面ス、長廊ヲ以テ南ハ公卿ノ間ニ通シ、北ハ東ニ折レテ諸殿ニ通ス、
公卿ノ間、諸太夫ノ間

御車寄ノ南ニアリ、東、西、榮、檜皮葺、檜木造、第一ヲ虎ノ間、次ヲ鶴ノ間、櫻ノ間トス、東ヨリ西ニ至ル、櫻ノ間、最モ西ニアリ、諸太夫ノ間ト云、虎ノ間ノ東ニ一室アリ、其ヨリ渡廊ヲ經テ、清涼殿ノ殿上ノ間ニ至ル、虎ノ間、鶴ノ間ノ北ニ廊アリ、東、西及ヒ南面ハ外椽アリ、南椽外ノ廣庭ハ、神嘉殿ノ在リシ所ナリ、

参内殿

内ノ御車寄ノ内ニ在リ、上皇御所御幸ノ時、此所ヨリ入御アリ、年首参賀ノ時、皇族大臣皆此ヨリ参入ス、千壽萬歳猿舞三月三日開雞等、此庭ニテ行ハル、其時天皇此殿ノ上段ニ臨ミ御覽アルヲ例トス、殿ハ梁行四間、桁行八間、南北榮、檜皮葺、檜木造リ、其南ヲ上段トシ、次ヲ中段トシ、共ニ十二帖半、其次ヲ下段トス、十五帖、西ニ椽座敷アリ、十九帖半、南面ニ外椽アリ、西ニ御車寄アリ、東ニ一間ニ五間ノ椽座敷アリ、其ヨリ二重長廊ヲ以テ遙ニ常御殿ニ至ル、

御湯殿

常御殿ヨリ北ニ赴ク長廊ノ西ニアリ、上段十帖、下段拭板敷、

黒戸

御湯殿ノ北ニ在リ、六帖ト五帖ナリ、

八景ノ間

林和靖ノ間

水鳥ノ間

錦鶏ノ間

議奏候所

御學問所ノ西ニアリ、

麝香ノ間

小御所ニ至ル長廊ノ左ニアリ、舊時將軍入朝ノ時、此ニ祇候スルヲ例トス、

傳奏部屋

錦鶏ノ間ノ西ニアリ、

長橋局

參内殿ノ東ニアリ、舊時長橋局ノアリシ所ナリ、

御文庫

禁池ノ東及ヒ其他所々ニ在リ、歴世皇室ノ記録此ニアリト云フ、

御馬見所

皇居ノ東北隅ニ馬場アリ、南北ニ通ス、其西ニ御馬見所アリ、東ニ向フ、
舊時ハ此他後房、舍局、曹司ヨリ、雜舍、倉庫ニ至ルマテ、棟ヲ連ネ、軒ヲ
接シ相續キシカ、維新後外廷内朝ノ正殿諸舍ヲ初メ必要ノ部ノ外
大抵毀撤セラレタリ、今已ニ毀撤ニ係ル者ハ、之ヲ除キテ記セス、其
舊皇后宮御殿ニ於ケルモ亦然リ、獨リ温明殿、神嘉殿ノ類ハ、今已ニ
之ヲシト雖トモ、特ニ之ヲ記セリ、其詳細ハ安政造營志ノ類ニ就キ
テ之ヲ見ルヘシ、

皇后宮御殿

皇居ノ北部ニ在リ、朔平門内別ニ一區ヲナス、舊ト殿舍疊沓セシカ、今ハ
其要部ヲ存シ、他ハ大抵毀撤セラレタリ、寛永造營ノ時ハ、上皇ノ仙院ナ
リシカ、其後皇后宮御所トナレリ、此御所モ、皇居ト同シク、屢火災ニ罹リ
シカ、現今ノ宮殿ハ、安政造營ノ時ノ建物ナリ、

玄暉門

朔平門ノ内ノ迤東ニ在リ、大内裏ノ時此門ハ貞觀殿ノ前ニ在テ、朔平
門ト相當ル、後宮ノ正門ナリ、故ニ寛政造營ノ時、故式ヲ考ヘ再興アリ、
其後之ニ仍ル、

常御殿

常御殿ハ、梁行十間、桁行十間、西指出七間半ニ一間半、南面ス、南北檼、檜
皮葺、檜木造、垂木二軒アハヲ木舞物、東西妻破風、狐格子、懸魚、鰯物、六
葉菊座、樽鉾有リ、瓦棟、獅子口、鑄釣、鐵物、銅鎖、共、軒高一丈六尺七寸、軒
出端八尺、御床高三尺六寸七分、御椽幅五尺、
中央ヲ御寢ノ間トス、袋棚アリ、其東ヲ上段トシ、御牀アリ、其南ヲ中段
トシ、其西ヲ下段トス、上段ノ北ニ御小座敷アリ、西ニ御牀袋棚アリ、其
北ヲ二ノ間トス、其西ニ御化粧ノ間アリ、其西ニ一ノ間、二ノ間アリ、下
段ノ西ニ御次ノ間アリ、其西ニ申口ノ間アリ、東ト南北ニ廂アリ、廂外
ニ椽アリ、各欄干アリ、東ト南ニ階ヲ設ク、北ニ廊アリ、飛香舍代ニ通ス、
飛香舍

玄暉門ノ内ニ中門アリ、圓楹、檜皮屋、檜木造ニシテ、古式ノ建築ナリ、西

南ナ母屋トシ、其東ヲ東廂トシ、其東ニ孫廂アリ、北ヲ北廂トシ、三面ニ椽アリ、欄ヲ設ク、西方廊ヨリ常御殿及ヒ其他ニ通ス、東及ヒ南北ニ築垣アリ、

舊若宮及姫宮御殿

飛香舍代ノ西ニアリ、北面ス之ヲ東西ニ分テ、各上段、次ノ間、二間、三間ニ分テ、各内廂アリ、西ト北トニ椽アリ、安政造營ノ時、若宮、姫宮ノ御所ノ爲メニ設ケシ所ナリ、

此他舍屋多ク有リシカ、近年皆毀撤セラレタリ、

御苑

御苑ハ舊時ノ所謂九門内ニシテ、維新已來之ヲ擴張シ、東ハ寺町通ヨリ、西ハ烏丸通ニ至リ、北ハ今出川通ヨリ、南ハ太町通ニ至ル、北方ニテ東西三百七十七間、南方ニテ東西三百八十五間、東方ニテ南北七百五間、西方ニテ南北七百三間五分ノ地盤ヲ占メ、其面積大凡二十六萬八千二百二十四坪餘アリ、之ヲ大内裏ノ時ニ徵スルニ、東ハ京極西ハ烏丸北ハ一條ヨリ凡二町ノ北、南ハ春日通ニ至リ、北邊桃花銅駝ノ三坊ト一條以北ノ地ニ亘レリ、皇居ノ東洞院土御門殿ト定マリシヨリ、皇居ヲ中ニシ、仙洞、皇后宮、皇族公卿ノ宮殿邸宅四面ニ相連リ、年代ヲ逐ヒ漸々其區域ヲ廣メタリシモ、維新前マテハ猶狹隘ニシテ、皇居ノ體制ヲ得サリシカ、明治ニ至リ、車駕東遷、皇族公卿皆東京ニ移リ、或ハ他ニ轉居シ、其址ハ屋宅ヲ毀テ、邸地ヲ夷ラケ、一面ノ平坦トナシ、四周ニ石壘ヲ築キ、一切伏芝ト爲シ、花木ヲ分栽交植シ、廣衢ヲ通シ、輦路ヲ開キ、清泉ヲ引キ、池水ヲ蓄ヘ、總テ之ヲ稱シテ御苑ト曰フ、皇居ハ其中央ニ在リ、仙洞御園ハ皇居ノ東南ニ在リ、大宮御所ト相鄰ス、久邇宮ハ皇居ノ西南ニ在リ、桂宮ハ皇居ノ北ニ在リ、祐井ハ桂宮ノ東南ニ在リ、舊中山家邸址ニシテ、其井ノ名ハ孝明帝ノ賜ヒシ所ナリ、碑アリテ、其由ヲ記セリ、又ハ京都府知事横村正直ノ撰ニシテ、故從一位中山忠能公ノ

建ツル所ナリ、主殿寮諸陵寮出張所ハ御苑ノ西南隅ニ在リ、宮内省官吏出張シテ皇居及ヒ山陵ノ事ヲ掌ル所ナリ、京都博覽會場ハ仙洞ノ南ニ在リ、年々開設新古ノ工藝品ヲ陳列スル所ナリ、京都美術工藝學校其東ニ在リ、京都測候所ハ博覽會場ノ西ニ在リ、宗像神社白雲神社ハ久邇宮ノ南北ニ在リ、北ニハ近衛邸ノ舊園アリ、南ニハ九條邸ノ舊園アリテ、別ニ一區ヲ畫シ、林園泉石皆舊態ヲ存セリ、苑内已ニ廣ク、地氣最モ清シ、加フルニ近來益、其保存修理ノ方ヲ立テラレ、年々花樹ヲ増植シ、梅林ニハ數千ノ梅樹アリ、蓮池ニハ滿池ノ芙蓉アリ、綠柳青松、絳桃白櫻、柯ヲ交ヘ枝ヲ連ネ、岩曉タル金闕、參差タル玉樓、其間ニ相映ス、賞花ノ遊觀月ノ興、夏夜涼ヲ逐ヒ、冬曉雪ヲ愛ス、四時ノ觀盡クル時ナシ、獨リ内地ノ人ノミナラス、外邦萬里ノ客モ共ニ來リテ俱ニ樂ム所ナリ、御溝水ハ遠ク鴨川ノ上流ヲ引キ、南流シテ相國寺中ヲ過キ、今出川ニ至リ、御苑ノ内ナル舊近衛邸ノ園池ニ注キ、分カレテ一ハ朔平門ノ東ヨリ皇居ニ入り、宮殿ノ下ヲ環流シ、禁池トナリ、南ニ出ツ、一ハ築地外ノ石渠トナリ、皇居ヲ繞リテ二分シ、西ハ烏丸ニ出テ、京都府廳ノ池水ニ入り、一ハ白雲神社ノ蓮池ト大銀杏樹下ノ池水トナリ、久邇宮ノ南ナル方池ニ入り、又南シテ主殿寮出張所ノ池ニ入り、南流シテ市中ニ出ツ、皇居ノ東ノ渠水ハ、大宮御所ノ角ニ至リ、二分シテ一

ハ仙洞ノ前ヨリ、南流舊九條邸ノ池ニ入り、又南流シテ市中ニ出ツ、一ハ大宮御所ノ北ヲ過キ、大宮御所ト仙洞トニ入り、共ニ仙洞ノ池ニ落ツ、御苑ノ東ノ小渠ハ、南流シテ仙洞ノ水ト合シ、京都博覽會場ノ池ニ入り、更ニ南流シテ市中ニ出ツ、近年大ニ修理アリテ、渠ヲ廣メ石ヲ築キ、處々石槽ヲ造リ、以テ水ヲ通シ、鱸々ノ流、潺々ノ響、人ノ耳目ヲ清クシ、大ニ御苑ノ觀ヲ増セリ、

仙洞舊院

仙洞舊院ハ、御苑ノ東ニ在リ、大凡北ハ上長者町通ヨリ、南ハ下立賣通ニ至リ、東ハ寺町通ヨリ、柳馬場ニ至ル、其面積二萬二千五百六十二坪ニシテ、其外ニ大宮御所五千三百十三坪餘之ト相接シ、其西北隅ニ在リ、此地ハ、大内裏ノ時、桃花第四坊ニ屬シ、蓋シ藤原氏ノ土御門殿京極殿ノ地ニ係レリ、舊大江匡衡ノ第地ナリシト云フ、拾芥抄ニ土御門ノ南、京極ノ西、南北二町、東西一町、其南一町ハ道長ノ第トアル所ナリ、藤原氏外家ノ親ト大政ノ權トニヨリ、私門王室ヨリ盛ニ、后妃概ネ其門ヨリ出テ、後一條、後朱雀、後冷泉ノ三帝ハ、皆藤氏ノ外孫ニシテ、此地ニテ降誕アリ、歷代編年集成ニ、後一條天皇寬弘五年戊申九月十一日戊辰午時誕生於京極殿トアリ、百鍊抄ニ、寬弘六年十一月廿五日、中宮於左大臣上東門第

降誕第三皇子ト、是レ後朱雀帝ノ降誕ヲ云フ、上東門第トハ此ノ第ノ事ニテ、土御門ハ即上東門ナルヲ以テ此稱アルナリ、榮花物語ニ長和二年七月二日、こゝにうまれ給ひ云々、是レハ後冷泉帝ニテ、皇母ハ中宮妍子、即上東門院ナリ、故ニ同書ニ、このつちみかと殿に、いくそたひ行幸あり、あまたの后いていらせ給ひぬらんと、よのあはれものなきこぼつへきとのなり、これを勝地といふなり、けり、これを榮花といふにこそト書ケリ、其林泉は、紫式部日記ニ、土御門殿のありさま、いはんかたなくおかし、池のわたりの木すゑとも、やり水の邊の草むらさのかし、色つきわたりてトアリ、千載集ニ、京極前太政大臣ハ、京極の家ニテ、十種供養し侍りける時、白川院御幸せさせ給ふて、又の日ならせ給ふけるに、櫻花おほくの春に逢ぬれと、きのふけふをや、ためしにはせん、赤染衛門集ニ、京極殿の池にかゝり火ともして、人人小舟にのりてあそぶ、藏人爲資かちとりしたるにや、波さわく、風にまかせて、ゆく舟の、ほかけにみゆる、かちとりやたれ、其他猶有レト之レヲ畧ス、此等ニ依リテモ、其館舎宏壯、林泉雅勝ナリシヲ想見ルヘシ、又紀貫之カ櫻町ノ家等ハ、其西南隅ニ在リシナルヘシ、其後數百年間ノ久シキ、幾回其主ヲ換ヘシナルヘケレト、今詳カナラス、天正中、豊太閤正親町帝ノ爲メ、仙洞ヲ營セントセシカ、未タ幾ナラス帝崩御ニ際シ、其工事ヲ果サス、豊臣

ノ高臺院夫人ノ第此地ニ在リシトノ説アレト、未タ詳ナラス、慶長中、徳川家康後陽成帝ノ爲メニ仙洞ヲ營セシハ、今ノ舊女院御所ノ地ニシテ、皇居ノ北ニ一區ヲ爲セリ、徳川氏後水尾帝ノ英邁ヲ忌ミ、早ク其外孫ヲ大位ニ即カシメント欲シ、寛永三年ニハ、二條行幸ヲ請ヒ、天下ノ侯伯ヲ會シ、武成ヲ表シタリ、其五年ニハ、二條城ナル行幸殿ヲ毀テ、之ヲ此ニ移シ、仙洞ヲ營シタリ、此時帝聖算僅ニ三十、且未タ皇子アラズ、則其仙洞ハ、何ノ爲ニ營セシヤ、其意已ニ知ルヘキノミ、果シテ其明年即寛永六年十一月ニハ、遽ニ讓位行ハレ、平安京ニ古例モナキ、女主ヲ立テ、天子ト爲シ、方ニ強壯有爲ノ聖齡ヲ以テ、此ニ脱履アリ、仙洞ハ、初ノ地ニテ、東臨門院ノ宮ハ、其北ニ在リシトノ説アレト、未タ詳ナラス、其跡ニツキ之ヲ見ルニ、自カラ掩フヘカラサル者アリ、徳川氏其志ヲ隠然ノ内ニ成セシト雖トモ、其意蓋シ、歉然タルヲ免カレズ、故ニ此ニ土木ノ巧ヲ盡シ、以テ仙遊ノ所トシ、且更ニ御料ヲ増加シ、又外ニ修學院離宮ヲ造リ、以テ力メテ帝ノ歡心ヲ買ヒ、世ノ耳目ヲ瞞セント爲シ、者ノ如シ、仙院ハ、櫻町ニ、櫻町ハ、大内裏ノ桃花第四坊ニ在リ、中納言成範ノ第ニテ、櫻ノ如シ、仙院ハ、櫻町ニ、櫻町ハ、大内裏ノ桃花第四坊ニ在リ、中納言成範ノ第ニテ、櫻ノ如シ、在ルヲ以テ、櫻町宮ト號ス、承應二年六月、皇居災シ、後光明帝此院ニ幸シ、明年九月、此ニテ崩御アリ、延寶元年五月、皇居及仙院共ニ災シ、同三年、幕府ヨリ皇居ト共ニ造進セリ、延寶八年、法皇崩御アリ、其後暫ク東山帝東宮トナリシカ、貞享元

年四月五日寺町ヨリ出火シテ回祿ニ罹リ更ニ幕府ヨリ造進シ同四年靈元帝位ヲ譲リ仙洞ニ遷御アリ寶永五年三月八日油小路ヨリ出火シ皇居東宮女院准后ノ御所一切烏有トナリシカ其後更ニ造營アリ靈元法皇享保十七年八月六日崩御空院トナルコト四年同二十年三月中御門帝位ヲ譲リ此ニ遷御シ僅ニ三年ニシテ崩御アリ其後櫻町帝延享四年五月二日俄ニ此ニ行幸アリテ即日位ヲ桃園帝ニ譲リ此ヲ仙洞トセラル此時冷泉爲村ニ勅シ仙洞十景ヲ撰ハシメラル其十景ハ

仙庭十景

- 醒花亭櫻 醒花亭前ノ水汀ノ櫻ナリ
- 古池款冬 阿古瀬淵ノ山吹ナリ
- 壽山早苗 壽山ハ北方鎮守社ノ山ニテ其北ナル稻田ノ早苗ナリ
- 釣殿飛螢 中島ノ南ニ舊址アリ
- 瀧殿紅葉 中島ノ北ニ舊址アリ
- 悠然臺月 東南隅ノ高臺ナリ
- 茅葺時雨 何レニ在リシカ詳ナラス
- 止々齋雪 止々齋ハ天保中修學院離宮ヨリ移サレシ由ナレトモ十

景ニ入リシハ其以前ニ在リシカ如シ猶考フヘシ

鑑水夕照

中島ノ東ニ其舊址アリ即チ鑑水亭ナリ

神祠夜燈

壽山ノ鎮守社ナリ

是蓋シ寛延ノ初メナルヘシ未タ幾年ナラス上皇崩御空院トナルコト數年明和八年後櫻町帝讓位アラントスルヲ以テ幕府更ニ諸大名ニ課シテ大ニ修理ヲ加ヘ造營已ニ成リ後櫻町帝位ヲ後桃園帝ニ譲リ此ニ遷御アリ天明八年正月晦日ノ災仙洞亦烏有トナレリ幕府ハ皇居ヲ古制ニ復シ仙洞モ新ニ造營シテ之ヲ進メシカハ後櫻町上皇ハ青蓮院ノ假宮ヨリ還御アリ此時造進ノ功ヲ嘉ミシ殿つくりみかきたちたるうれしきの心を見する大和ことのはノ御製ヲ將軍家齊ニ賜ヘリ文化十四年光格帝脱屣ノ後此ニ遷御アリ此時又大ニ修造アリシト云フ此ヨリ二十餘年ノ久シキ益修理アリシカ天保十一年上皇崩御ノ後久シク空院トナリ安政元年四月六日失火ニヨリ悉ク焼亡セリ此時空院ナリシヲ以テ幕府ハ其外垣ヲ修メシノミニテ復造營ノ事ナシ洞中ハ冷泉爲村ノ記ニ御殿ともかはほりのす多く御苑の木たちにはふくろふの聲あやしく蓬萊の島は名のみにて蓬の袖に狐のみわれはかほならん御やすらひ所はいしすゑのみ芝生のそこによこもらん今は老檜聲かなしむのみト記セシ

如ク、自然荒行シカ、維新後大ニ修理ヲ加ヘ、近來益、其保存ヲ厚クセラル、ナ以テ、大ニ其觀ヲ更メタリ、宮殿ハ、目下廢址タルヲ以テ、寛政内裏記ニ據テ、舊時ノ大略ヲ記スルノミ、林泉ハ、毎年博覽會開設ノ際、特ニ衆人ノ拜觀ヲ許サル、ナ以テ、雉兔藪蕘ノ徒モ、幸ニ其梗概ヲ識ルヲ得タリ、豈聖代ノ餘澤ナラスヤ、歴代圖書集成、百鍊抄、紫式部日記、千載集、赤染衛門集、豐饒、度弘記、聞、二條城記事、冷泉爲村、桐仙洞十景記、寛政進賢記、京都府文書部取、

林泉

林泉ハ、仙洞ノ東部ニアリ、大凡南北三町、東西一町、中ニ大池ヲ穿テ、東ニ深林ヲ負ヒ、西ニ向ヒテ之ヲ造レリ、常御殿ノ東庭ナル舊芝ノ御茶屋ノ洞門ヨリ東ニ出ツレハ、池水ノ西涓ナリ、其ヨリ池ニ沿ヒ左折スレハ、池上ニ長橋ヲ架ス、舊ト八橋ト曰フ、左右欄干ヲ設ケ、上ニ藤架ヲ結フ、花時紫雲ヲ穿テ、虹橋ヲ渡ルノ思アリ、橋ヲ過キ中島ニ至ル、島ハ葭島、及ヒ蓬萊島ト曰フ、左ニ小亭アリ、瀧殿ト曰ヒシカ、今廢ス、東北ニ池水ヲ隔テ、老岩奇石、疊層トシテ斷崖ヲ爲シ、懸ルニ飛泉ヲ以テス、亭址正ニ之ト相對セリ、島ノ南涯ニ釣殿及舟屋アリ、今廢ス、南迄ニ醒花亭ニ對ス、島ノ中央小榭アリ、御腰掛ト稱ス、亦今廢ス、蠟石ノ大燈籠アリ、其側細渠アリ、石橋ヲ架ス、島中四望、風光最モ佳ナリ、苑内第一ノ所トス、更ニ木橋ヲ渡リ東ニ進ム、舊ト鑑水ノ御茶

屋アリ、左右深潭ニ臨ム、故ニ號ク、今廢ス、其東ニ水中ヨリ石階ヲ築キ、以テ艤舟ノ所トス、其ヨリ亂石ノ間ヲ穿テ、藤蔓ヲ潜リ、蟠根ヲ跨リ、山ニ登リ、溪ニ下リ、大石橋ヲ渡リ、更ニ洲崎ヲ經リテ北スレハ、大石相駢ヒ、水涯ニ迫ル、大サ數人ヲ坐セシムヘシ、下ハ碧潭ニ臨ミ、上ハ飛瀑ニ對ス、玉飛ヒ珠跳リ、人ノ心耳ヲ清カラシム、岩間ヲ攀テ小阜ニ登リ、飛瀑ノ上流ヲ渡リ、斜ニ北シテ高橋ヲ渡ル、橋頗ル高ク、水頗ル遠シ、池中東西ノ山突出相迫マル所ニ架セリ、橋南ハ先ニ渡リシ藤架ノ長橋ヲ見、北ハ決然別ニ一泓ヲ爲ス、境益幽ナリ、橋ヲ過ク、楓樹多シ、紅葉山ト曰フ、楓樹ノ間ヲ穿テ、更ニ北スレハ、亂石點々、蘇鐵林ヲ爲ス、蘇鐵山ト曰フ、櫻花棣棠左右相映ス、茶亭アリ、衙門深ク鎖シ、疎林掩映、茅檐低窓、清雅ヲ極ム、又新亭ト曰フ、此地ハ、曾テ修學院離宮ノ止々齋ヲ移シ、築カシメラレシ所、齋廢シ、近年此亭ヲ設ケラル、又池ニ沿ヒ斜ニ東ス、老柳陰森、石梁渠ニ架ス、梁北別ニ一潭ヲ爲ス、築クニ惟石奇岩ヲ以テス、阿古瀬淵ト曰フ、蓋シ古ヨリノ稱ナリ、淵北新ニ紀貫之古跡碑ヲ建ツ、西三條知季ノ篆額ニシテ、碑文ハ、渡忠秋ノ撰スル所、和文ノ長篇ナリ、碑北石谿アリ、近年新ニ水路ヲ開ラキ、此渠ヲ山溪間ノ體ニ造リ、水ヲ激シテ池中ニ入ル、渠ヲ渡ル、阜アリ、壽山ト曰フ、鎮守社アリ、西ニ向フ、祠宇

華表深翠中ニ隱見セリ、舊時祭儀常ニ行ハレ、毎月法樂アリト云フ、社南稻田アリ、畦疇交錯、渠水縱橫、舊時ハ御料ノ民、入リテ耕作セリト云フ、思フニ此地蓋シ攝政忠仁公ノ農民ヲ召シ、耕作ノ業ヲ作サシメ、以テ文德帝ノ御覽ニ供セシ所、今宮禁中稻田アルヲ見、深ク懷古ノ情アラシム、祠南小逕ニ沿テ東シ、南ニ折ル、池水迫ル所、一島アリ、古藤老樹叢生ス、南北橋アリ、懸ル、今廢ス、更ニ南ニ向ヒ、或ハ躋リ、或ハ降り、行クコト數百步、細溪潺々、即チ飛瀑ノ上流ナリ、渡リテ一山ヲ踰エ、鑑水亭舊址ノ上ニ出ツ、路岐レ二トナル、右ハ池ニ沿ヒ、左ハ山ニ傍フ、左ニ行ク數百步、地益高シ、其盡頭ニ臺アリ、築クニ石ヲ以テス、苑ノ東南隅ニ當リ、高サ屏垣上ニ出ツ、登臨遊眺ノ所ナリ、悠然臺ト號ス、亭廢シ臺存セリ、西ニ下リ水涓ニ出ツレハ、亭舎アリ、醒花亭ト曰フ、北ニ向フ、芭籬板屋細竹苔石、極メテ清雅ナリ、亭上遠ク池水ニ對シ、長橋ヲ隔テ、飛泉ヲ望ム、風光最モ深遠ナリ、又池ニ沿ヒ斜ニ北ス、水涓ニ小石ヲ平敷シ、點々基石ノ如ク、其上ニ櫻樹ヲ駢植ス、左ハ古木老苔、陰森日ヲ隔ツ、其西ハ乃チ常御殿ノ舊址ナリ、夫レ仙洞ノ地タル、廣大深幽、其池水ノ廣サモ、二千八百七十餘坪ニ及フ、實ニ平安京第一ノ大園ナリ、其樹ハ老幹磊柯、枝葉繁鬱、蟠蜿蛟龍ノ如ク、地ヲ拔キ石ヲ抱キテ起ル者相屬ス、其石

ハ巨大平ヲ藏スニ足ル者アリ、磊々落落、其間ニ點綴セリ、地廣勢雄、人工ノ跡已ニ去リテ、居然天造地設ノ象アリ、其内ニ入ル、塵緣消盡、神靜ニ心定リ、自カラ深山幽谷ノ想アラシム、竊ニ禁苑ヲ拜觀シテ之ヲ評センニ、二條ハ雄麗ヲ以テ勝レ、桂ハ奇巧ヲ以テ勝レ、修學院ハ快豁ヲ以テ勝レ、而シテ仙洞ハ自然ヲ以テ勝ル、蓋シ幾回修造ヲ經ルト雖トモ、其由來スル所、遠キニ在ルヲ以テナリ、

宮殿

宮殿ハ、舊仙洞ノ西南部ニ在リシカ、安政元年ノ火災ニ燒亡シ、今空シク廢址ヲ存セリ、當時南面ニ正門アリ、其内御車寄アリ、公卿ノ間、諸大夫ノ間、殿上ノ間、御休息所、攝政候所等、其内ニ相連ナリ、其ヨリ長廊アリテ、東ノ方南殿ニ至ル、又長廊ヲ經テ北ニ折レ、東北ニ進ミ、常御殿ニ至ル、其北ハ遙ニ大宮御所ニ連ナレリ、小御所ハ、常御殿ノ南ノ東ニ在リ、其南ニ舞臺アリ、其他諸舎雜宇、其内ニ充悞セリ、安政災後ハ、其外垣ヲ修造シ、其正門ヲ西面ニ改メシノミニシテ、宮殿ハ造營ナシ、

南殿

南面ニ之ヲ建ツ、上段ノ間、朝餉ノ間、臺盤所、南廂等アリ、蓋シ大内ノ清涼殿

ニ擬セラレシナルヘシ

常御殿

東方ニアリ東面シ、別ニ南面ヲ開ク、常御所、夜御殿、御坐ノ間、御上段、御盃ノ間等アリ、東庭ハ、遙ニ林泉ニ對シ、其前ニ芝ノ御茶屋並ニ圓池等アリ、

小御所

小御所、御上段、御書院、御息所等アリ、東面ス、南庭ニ舞臺アリ、遙ニ樂屋ニ接ス、寛政造營圖

其他之ヲ略ス

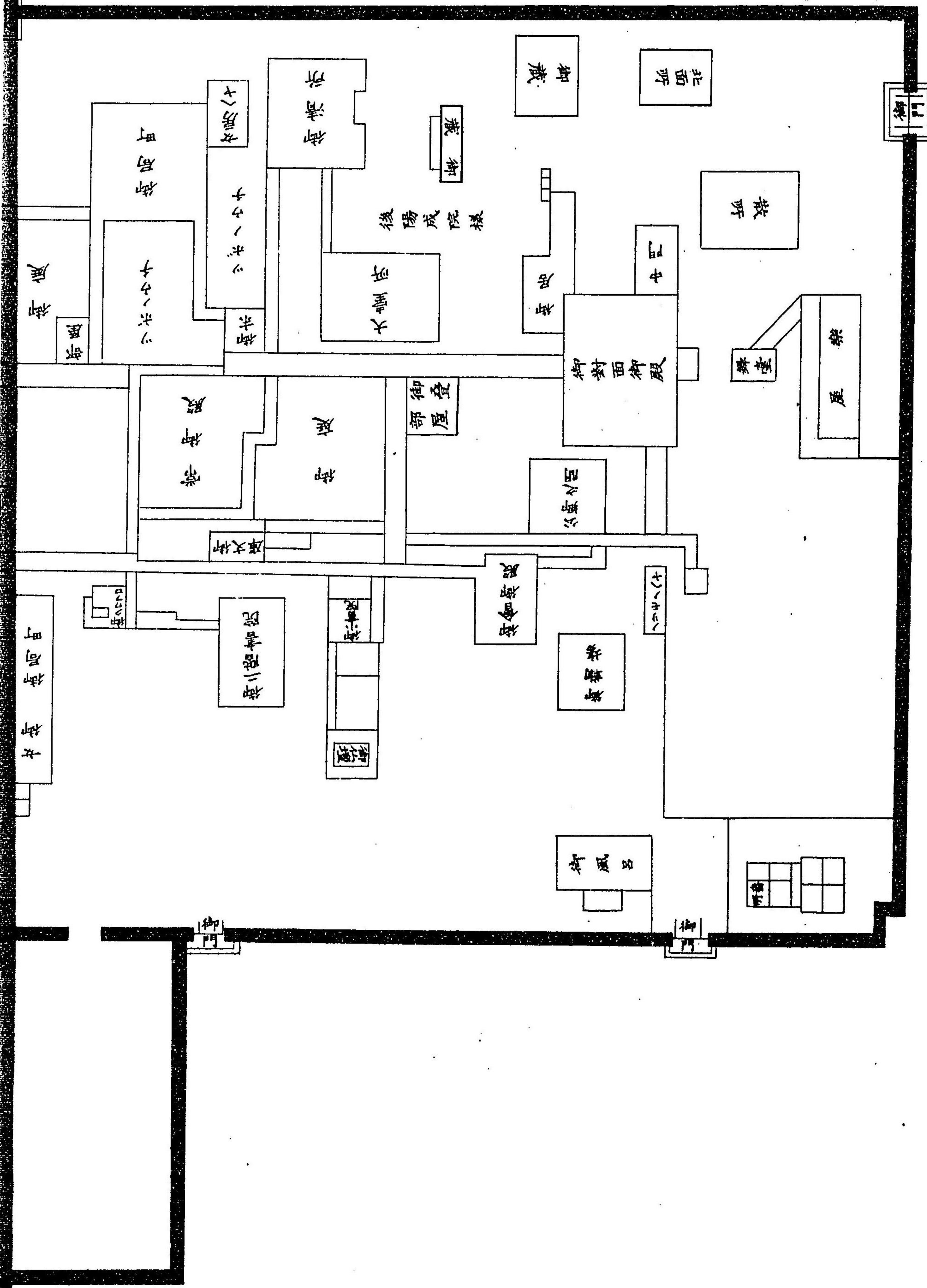
大宮御所

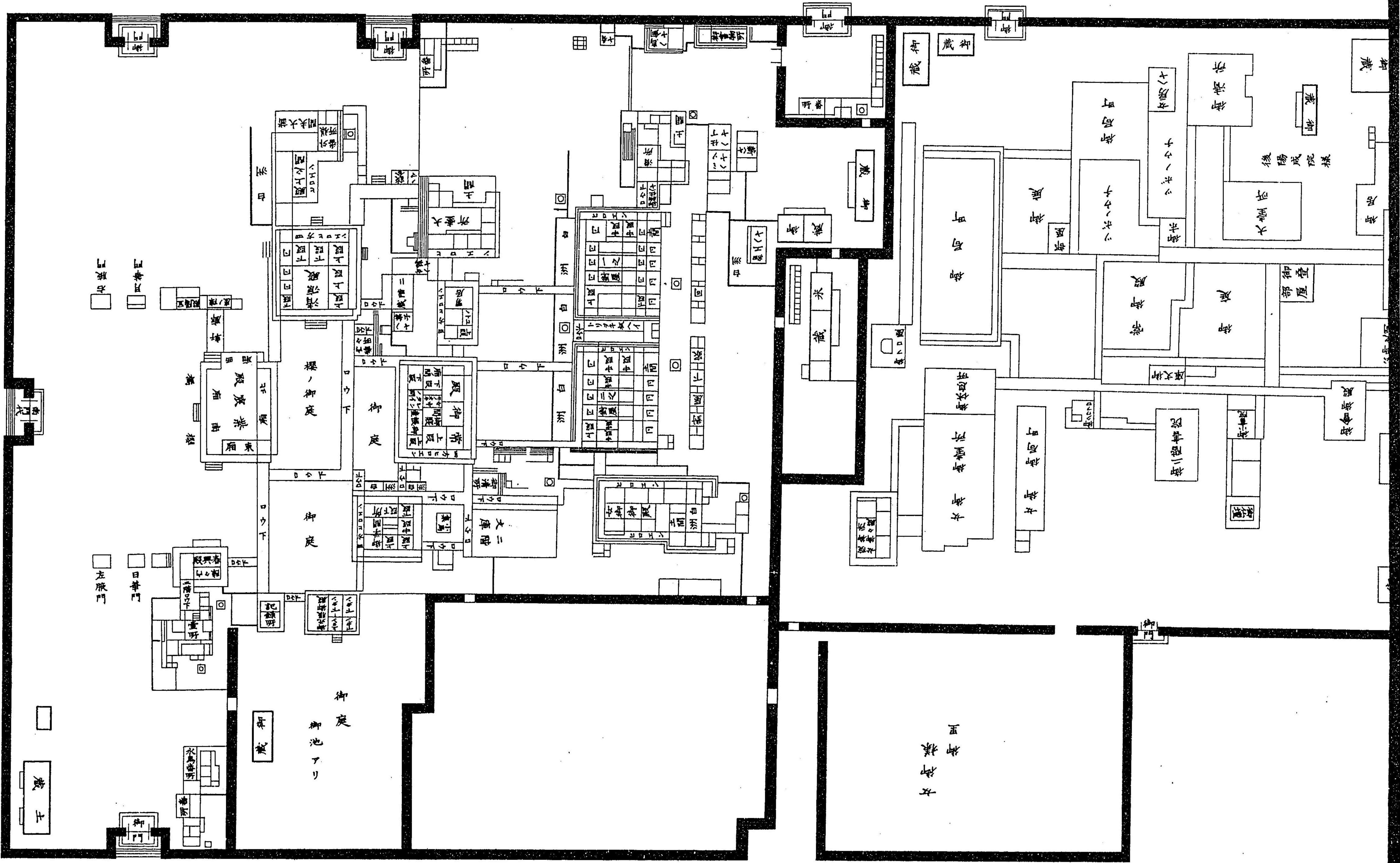
仙洞舊院ノ西北隅ニアリ、舊ト寛永中、徳川幕府ノ女院ノ爲ニ造進セシ所ニシテ、仙洞ト長廊ヲ以テ相通セリ、其ヨリ數回火災ニ罹リ、寛政造營ノ時、一切新築ナリシヲ、安政元年宮中失火シ、皇居仙洞ト共ニ烏有トナレリ、其後幕府ヨリ造進セシカ、維新後、只常御殿ト其他、接續ノ雜舎ヲ存シ、其他ヲ一切毀撤セラレタリ

平安通志卷之九

寛政以前皇居全圖

安政造營図所載

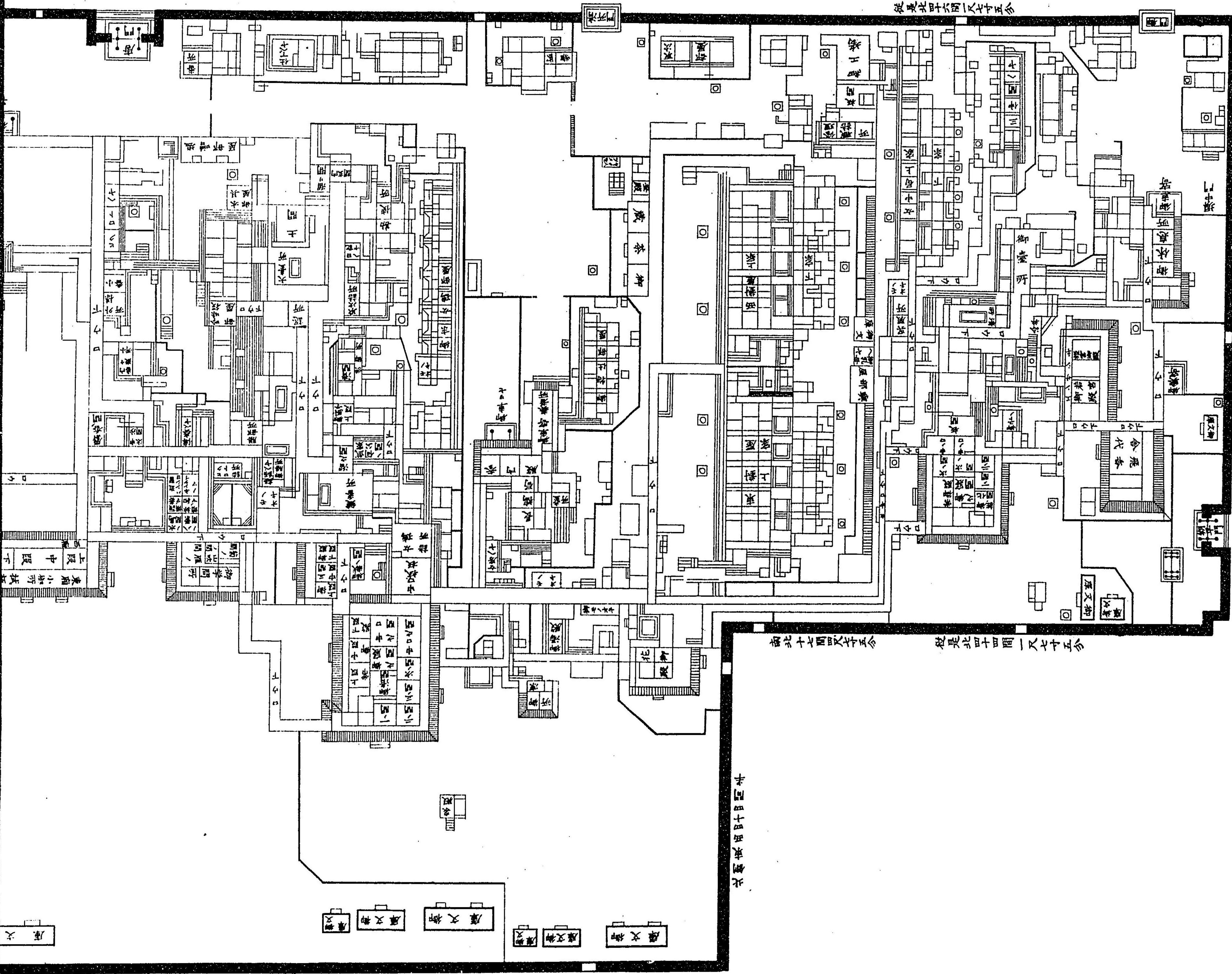




安政皇居全圖

安政造管誌所載

圖七十七 皇居



從是北四十間一尺七寸五分

南北十七間四尺七寸五分

從是北四十間一尺七寸五分

廿三日十月用冊畫片

御書院 御膳所 御物置 御殿 御所